格好をしてゐる。間近には家が黑んでゐて、その細長い窓に燈火が射して赤々と見える。誠に靜かな穩かな晩ではあるが、その押鎭まつた中に何處か熱い息をむつと吹込めたやうな處がある。』

電氣は必らず火花を散らさずば止まぬ。滿を引いて放たぬ矢は貫かねば往生せぬ。ナターリヤの心は熱して狂はん計り、賴む男の返事一つで運命が定まる。苦しい蒸し熱つい極みである。——しかしこれも一時腰の弱いルーヂンの不覺なる夢覺めて見れば、始めてよい經驗をしたことが解つた。かくてルーヂンは宛も夜會過ぎての手袋、菓子の包紙。外れた富札と同樣に不用になつた者を棄てられたやうに、匆々に旅仕度をして出立して仕舞つた。

水彩畫の纖麗、優美なる筆の跡をたどるが如き自然描寫を背景とせる生の活動は極めて鮮明、活躍たるものがある。以上は單なる一例に過ぎない。若し此種の文字を求めたならば千言萬語を費しても、僅かに其千萬分の一しか盡すことも出來ぬであらう、ハムレットが父の亡靈に邂逅する凄慘たる眞夜中の光景、『ヴェニスの商人』に於ける

ジエシカとロレンゾの月あかき夜の戀物語の如き、或は『ファウスト』劇中主人公ファウストが己が書齋にありて沈思に耽ける有樣及びマーガレットが罪を懺悔して聖母マリアの像の前に跪きつゝ啼き悲む場の如き、いづれも人生活動の背景として自然を描寫せし名文である。

以上は文藝上に現はれた人生の背景としての自然に過ぎないが、實際の人生に於ける背景たるべき自然に付いては、我等御互に極めて豐富なる材料を有するは今更ら云ふ迄もない。これは我等の經驗に訴へて、前述の文藝上に現はれた關係を以て之れを代表することにする。

三

次に作者の作物に對する關係、時代の作者に對する關係、及び民族の作者に對する關係の如き、いづれも緊要缺く可らざる背景となつて居ることは明白なる事實である。英國に於て聖書に次いで多く讀まれたと云はれて居る『天路歷程』を正當に解釋

せんとすれば、最非共著者ジョン・バンヤンの性格を知らなければならぬ。バンヤンは一種の宗教的妄想に襲はれて、屢自分は未來永却滅亡すべき運命を有することを信じて大に戰慄恐懼した此悲しき心的狀態は遂に彼をして家族を捨てゝも滅亡の社會を脫して、神の國を目がけて旅立つと云ふ趣向となるに至つた。此信仰あればこそ百難を排して猛進する神を保持した。ミルトンの『失樂園』や『サムソン・アゴニステス』を知らんとすれば、此清教徒詩人がクロムウエルの死によりて折角打ち建てられた理想の國家が破壞されたことや、屢々妻に別れ、友に捨てられて痛く轗軻不遇の苦辛を嘗めた果ては、あはれ失明の人となりしことなどを認めなければならぬ。若し彼れにして、身を順境に處して、一生何等の悲涙を流さなかつたならば、『ラレグロー』や、『イルペンセルソー』の如き美しき抒情詩の作者たるに止まつたであらう。アルフレッド・テニスンは二十四才にして斷金の友アーサー・ハラムの訃音に接した。これより彼は精神上の煩悶に陷り、人生を疑ひ、神を疑ひ、幾度か悲哀の淵、失望の谷に沈まんとし

たが、一縷の希望に辛らくも進路を見出し、やがて肉の損失は靈の利得となり、遂に歡喜と感謝とは朝潮の如く溢れ來り、慰安と平和とは溫き日光の如くに胸に宿ることゝなるに至つた。此心靈上の經驗を知らざれば、『イン・メモリアム』の名篇は到底解釋することは出來なゝ。

"Strong Son of God, immortal Love,
Whom we, that have not seen thy face,
By faith, and faith alone, embrace,
Believing where we cannot prove;

* * * * *

"Thou seemest human and divine,
The highest, holiest manhood, thou:

Our wills are ours, we know not how;
Our wills are ours, to make them thine.

『力ある神の子　不朽の愛よ
　われらは汝の御額を拜せねども
　　信仰　唯信仰によりて汝を懷き
　見定め兼ねれば長れかしこむ

　汝は人にしてまた神
　　いと高くいと聖き人
　　理知られど我等の意志は我等のもの
　我等の意志は我等のもの
　　これ汝のものとせんため』

と歌つたのは單に詩人の空想ではなくして、親しく彼が心證體驗した信仰の告白であ

つた。

これと同じく人格と學說、人格と事業、人格と信仰の如きも決して分離し得ざる程の密接なる關係を有して居ることは今更云ふまでもない。これは悉く隱れたる人格を背景として示されたる事物である。又時代が個人に影響を及ぼすことも同じである。進化論者は自然陶汰と云ふかも知れぬが、力ある者が常に力なきものを虐待するは世の常である。斯くの如くに婦人は常に男子の暴戾を防ぎかてに、幾度か憂きの涙にくれざるを得なかつた。特に日本の女子は此運命を暫くも遁れることが出來ず、古來の文學は屢〻これが味方となりて、其薄命を描いて吳れた。近松の『天の網島』の小春や紙屋治兵衛の女房おさんの果敢ない運命は、日本婦人には敢て珍しからぬものであつた。いくら『女大學』のやうな服從一點張の道德を强いられても、容易に諦め兼ねるのは其常であつた。明治文壇に於て『其來るや何ぞ遲かりし、其去るや何ぞそれ早き』と嘆げかれた樋口一葉女史は實に女の運命の哀れなることを叫ばんために生れ出

でた薄命の才媛であつた。明治二十五年から二十九年まで僅かに數年間短き一管の筆に、あらゆる日本婦人の賴よりなき運命を歌ふた其纖麗な文字は、作者自身が貧家に生れて覺束なくも婦人の手一つで母と妹とを支へて遂に夭折するに至つた悲みの聲であつたと同時に、明治時代の半ば覺醒せんとしても未だ容易に舊道德の羈絆を脱することの出來なかつた若き女子の憐れな有樣と、消えやらぬ煩悶と、綿々たる痛恨との發表であつた。『一葉全集』に現れた女性を玆に一々語りつゞくることは素より困難のことであるが、其一二を擧げて見やう。『あゝ此樣な浮氣者には誰がしたと思召す。三代傳つての出來そこね』と世をうらむは深刻を以て鳴りし『濁江』のお力である。『旦那樣の身持は那程までに吾を袖にし給へども、女の身の悲しさはあけて夫とも怨じかね、心にもなきあさましの擧動、家づきとて許されず、浮世の外にわれから身を捨つる』のは罪なくして濡衣一枚で逐ひ出されたお町のうらみである。伯父の難儀をよそに見兼ねて主人の金に手をつけるのは『大つごもり』のお峰である。『それでも吉ちやん、

私は洗い張りにあきが來て、もうお妾でも何でもよい、何うでこんな詰らないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふのさ』と寂しさうに笑ふのは、『わかれ道』のお京である。所謂敏腕家として時めく人に娘を緣かせ、孫まで設けてやれ安心と思うて居れば、お關は良人の虐待と放蕩に堪えきれずに、實家の兩親に離緣さしてくれと訴へるのは『十三夜』の物語である。高山氏は此作を評して云ふ。『よしや其深刻は「濁江」に及ばずとするも、日常市井の資料を驅りて是の凄愴悲慘の情理を曲盡す。筆路洒脫淡きこと雲の如きも、情火斑々として人に迫まる。これ所謂四三年にして碧を藏するの契を得たるもの、洵に得易からざるの才と謂ふべし』と。其他世を果敢なみて自殺する者、氣狂ひになるもの、苦界に身を沈むるもの、狹斜の里に育ち、うら恥かしき物のあはれを思ひそめて暗巽の惡魔が壁一重の彼方に虎視耿々としてることを知らざる者、いづれもこれ日本婦人の薄命悲運を訴へて其聲將に天に達せんとするものである。これを單に女性作家の軟文字なりなどと目するは誠に無情冷

酷の至りである。彼女の描寫せる所のものは舊道德と男子の壓迫とに對する義憤であつて、婦人解放のために戰つた矢叫びの聲であつた。我等は此作物を通じて、意志薄弱にして誘惑に陷り易く、神なく信仰もなく唯盲目なる運命に弄せられ、虛榮心と嫉妬心とに驅られて何時しか思はぬ禍の種を蒔き滔々として薄明と暗闇との間をめぐり〳〵て果てしなき女性の半面を見るのである。これは如何にしてもシャーロット・ブロンテやジョーヂ・エリオットを出した英國文壇からは產出し得ざる日本の特產物と云ふべきである。

近代の露西亞文學は稀れに見る文界の偉觀である。今迄眠れる巨人が夢覺めて其思ひを發表せんともがいて居るやうな有樣である。林氏の言葉を藉りて云はゞ玆には『古い宗教や哲學や道德や慣習や、乃至は古い理想の權威を破壞せずんば止まぬと云ふ恐ろしき奮鬪が見出さるゝ。恐るべき惡夢のやうな現實生活の渦中より救はれたいと云ふ憧憬の精神が非常の勢力を逞ふして居る。一言にして之れを云はゞ露西亞の文學の

背景は露西亞人の生活に現はれた苦痛である。』バイロンの崇拜家にして情熱の極めて深刻なるプーシキンも、露西亞のヂッケンスと云はるゝ寫實家ゴーゴルも、觀察の嶄新なる、描寫の巧妙なる、感情と想像の豐富なるなど共に古今に獨步するツルゲネーフも、鐵の如き意志と火の如き直覺とを以て哲學と文藝と宗教と人生とを統一せんと試みたトルストイも、いづれも此現代人の祈禱とも云ふべき氣分の範圍を脫することが出來ない。思ふに斯くの如くに深く人生の何ものかにあこがれてゐると云ふことは現代人に特殊な調子と色彩とを與ふるもので、これが或は意識的に或は無意識的に其生活の暗憺たる背景となつて居ることは否む可らざる事實である。

誰かの言葉の希臘の彫刻（グリークスカルプチニア）、ゴス風の殿堂（カセドラル）、中古の繪畫（メヂエーヴルペインチング）、及び近世の音樂（モヂルンミユージツク）と云ふことがある。精細に其內容と意義とを考へて見ればこれらの言葉は各時代の精神や氣風が明瞭に知ることが出來やうと思ふ。由來希臘人は現世の事物に圓滿なる理想を求めんとし、感覺にて捉え得べき具象界に於て美を發揮するやうに努めた。從つて肉體美や

形態美を重んじ、之れを最も完全に進めんと試みた。其一つの結果は即ち彫刻の發展を見るに至つたのである。斯くて其彫刻なるものは何時も理想の輪廓美を示めしたものである。次に來るものはゴス風の伽藍である。これは基督教信仰の結晶せるものである。其雲衝く計りの尖塔はウオルズウオルスの歌ふた如く、神が造れる靈の教會の姿である。一度其堂内に這入れば浮世の榮華はうたかたと消え失せて、ひたすら恐畏の心に充さるゝのである。尖塔、圓柱、尖れる窓、弓形の彎梁、半圓の天井、廻廊の上に高く黑き影を映せるオルガンの正面、これらのものはいづれも悉く相集り相倚りて、心靈の無限の憧憬を物語り、大御神の稜威かしこむ信仰の眞心を洩らして居る。中古時代の繪畫も亦これを宗教的に考ふれば前者と其趣きを一にする。シマブエ、ヂオット、及び其流を汲める畫家はいづれも擧つて此藝術を藉りて彼等の靈的背景に丹青を加へて現さんとした。彼等は決して華麗なる希臘藝術を以て滿足しなかつた。自ら彩筆彫管を採りて人と天使とを描き、希望と恐怖、榮光と天罰とを寫さずんば止まな

なかつた。見えざるものを十分に活かさずんば滿足しなかつた。最後に近世の音樂に至りても同一である。美しきハーモネーの樂音は人が神を讃美する爲に工夫した絶好なる藝術であつた。東洋諸國の諸ろの人の造れる神々はメロデーで滿足して居つたけれど、宇宙を統一せる眞の神は諸ろの樂音の諸調を欲し給ふた。初代の傳說は暫らく餘所にして、紀元七世紀のグレゴリー一世の時代よりハンデル、バッハの近代に至るまで、音樂は何時も神を禮拜することに起り漸次完全なる藝術として獨立するに至つた。思ふに音樂程靈的要求を滿足せしめ、又靈的內容を發表し得るものはない。指頭一たび琴絃に觸るゝや、鏗然として發する音響は殆んど物質ではない。其魔力ある樂音が續け樣に名手の技によりて發せらるゝや、悲喜哀歡を始めとして心靈上のあらゆる情緒と經驗には綿々として縷の如くに響いて來る。我等はブラウニングが『アブヅオグラー』に於て樂人をして心靈界の奧義を傳へしめ、ダビデをして琴を彈じてソーロ王の病を慰めしと云ふ古事を歌ひたるを讀みて楚々として心を動さるゝものであ

る。アーノルドは歌ふて曰く

Miserere, Domine!

The words are utter'd, and they free.

Deep is their penitential moan,

Mighty their pathos, but' tis gone.

They have decared the spirits sore

Sore load, and words can do no more.

Beethoven takes them then—those two

Poor, bounded words—and makes them new;

Infinite makes them, makes them young;

Transplants them to anothr tongue,

Where they can now, without constraint,

Pour all the soul of their complaint,

And roll adown a channel large

The wealth divine they have in charge.

Page after page of music turn,

And still they live and still they burn,

Perennial, passion fraught, and free:

Miserere, Domine?

人は言葉を以て云ひ現はすこと能はざる神に對する恐畏敬虔の信仰及び自分自身の心靈上の憧憬向上の高情をば僅かに樂音の魔力を藉りて不完全ながらも發表するに至つた。以上がこれらの言葉の表はす所の內容の一班である。これいづれも其時代に於ける精神上の氣分と內容とを洩らしたものと見るべきものである。

四

次に物質の背景としての心靈を考へて見たいと思ふ。勿論物質と心靈との關係は哲學上千古の疑問にして、これまで種々なる意見を主張した者甚だ多かつたけれども必竟するに不可解である。さりながら心靈は思考し、決斷し、感受するものであつて、物質は空間内に活動し、心靈のために存在するものなることは大體に於て首肯さるゝことゝ思ふ。斯くの如くにして森羅萬象の中に神靈ありとなし、或は自然の裏には大精神が存在するとなすやうな觀念が昔から一般に人の信ずる所となつた。それ故にグレゴリーは其道德書に於て述べて曰く

『十分心して有象の事物を觀ずれば、我等はこれによりて無象の精神的の事に想倒する。蓋し有形なる宇宙の壯觀は創造者の痕跡である。人は創造者を見ることが出來ないけれども、其造りし物を見て稱讚する時は即ち彼を見る途上にあるのである。』

又聖ヒラリーは

『誰か能く自然を見る時、神を見ざる者あらん』

と云ひオーガステンは

『自然の萬象推移は其創造者を示めすものにして、其變化起伏は言語の如く多種多樣なり』

と云ひ、十七世紀の伊太利の自然崇拜トマソ・カムパネラは一層詩的情熱を以て天地の有樣を告げて云ふ

『萬物情あり、然らざれば世は混沌界のみ。火の熱し、石の重き河川の海洋に注ぐも、悉く異を捨てゝ同に從はんとの意あるがためである……神宣はく、萬物感ずべし、但しわれに似る必要の多少に準じて其の感情に鋭敏あるべしと……空と星とは極めて鋭敏なる感覺を與へられ互に光明を交換して其意思を通ず』

これは單に一例に過ぎないが、斯くの如くに天地を有情となし、これが背景として神靈を認めたのは詩人は勿論のこと神學者、哲學者、畫家などに甚だ多く其例を見出すことが出來る。『おゝやさしき神よ、汝は汝の造りし物によりてかくも愛らしく慕はしきなれば、汝自らは如何ばかり美はしく慕はしきことぞよ』とは彼等に共通せる感應であつた。

天地を有情視して其間に神靈の宿れるを知るは人の微妙なる心靈の働きによるべきは勿論のことにして、玄妙自在なる想像の官能は此點に於て極めて高尚なる役目を充たしつゝある。世には感情とか想像とかと云ふ官能は微塵もなく理智一點張りにて學理を究め、人事を知らんとしてる人もあるけれども、斯かる人に完全なる發展を遂げ其目的を達した者は甚だ稀れであるやうに思ふ。彼等はつまり心靈の羽翼を切り去り視覺を捨てゝ單に四つ這らして物を探らんとする者である。ウオルヅウオルスの罵倒した哲學者の如くに

One that would peep and botanize
Upon his mother's Grave.

＊　＊　＊　＊

One to whose smooth rubbed soul can cling
Nor form, nor feeling, great nor small;

A reasoning, self-sufficing thing,
An intellectual all in all.

「母の墓場を踐みて植物の採集をなし、
其心は磨滅して美も情もまとひつかず
彼は推理を以て滿足する理知萬能の人なり」

にして、憐むべき精神的不具者と見るべきものである。其結果は何時も無神論者となり、破壞主義者となり、厭世家となり、自滅者となつて仕舞ふ。これに反して心靈の情感を旺盛にして天地を見れば、天地玆に一新し、豁達快活の氣象は朝日の如くに心に充滿して來る野の百合を見、空の鳥を眺むれば、いづれとして神の御心を傳へざるはなし。

Earth's crammed with heaven,
And every common bush afire with God;

But only he who sees takes off his shoes,
The rest sit round it, and pluck blackberris,
And daub their natural faces unaware
More ahd more from the first similitude;

「天に地に充ち溢る
所在の荊棘には靈火燃ゆれども
見ざるものは靴をも脫がず
平然として其處に座して果實を摘み
知らぬ間にいよ〳〵本來の面目と遠かる」

とはブラクニング夫人の述懷である。靈眼を開きて地上を見れば、溫光悠々として永劫の春を示めし、見るもの聞くもの、悉くわが靈を養ひ、わが心を慰める。歲月來るも時劫に超越せる靑春の若やぎは何時もわが胸に躍り居るを覺ゆるであらう。ウオル

ヅウオルスは雛菊を見て無限の情趣を以てこれに向つて己が感想を述べて

"*Sweet, silent creature,*
That breath'st with me in sun and air
Do thou as thou art wont, repair
My heart with gladness, and a share
Of thy meek nature."

『美はしき無言の者よ
汝は我と同じく日光に浴し空氣を吸ふ
今も變はることなく喜悅をもて我が心をいやす
我希くは汝の優しき性を學ばんことを

と歌うて居る。斯くの如くにして目に觸れたる微細な物も一旦想像の力に過へば無限廣大なる情感の境と化し、世界は正に一變するに至るのである。

今は神の超越とか、內在とか、神觀としての凡神教とか、自然神教とか、一元論とか、二元論とかを吟味するのではない。唯自然教に對する一面の見解として其背景に神靈あると云ふ觀念を告ぐれば足るのである。

五

以上背景に關して種々なる感想を述べたが、われらはこれより人間の精神的背景とも稱すべきことについて少しく考へて見たいと思ふ。個人の精神的背景となるものは其數に於て其種類に於て極めて多く一々之れを擧ぐることは出來ない。先づ重なるものと見るべきは祖先、遺傳、家庭、閱歷、修養、潛意識、及び神である。

ダルヴキンは『人間の始祖』(デフスセント・ウヴ・マン)に於て人間の大本源に溯りて其發展の由來を進化論によりて說明し、ヘンリー・ドラモンドは『人間の上進』(アッスセント・オヴ・マン)に於て人間の精神生活の發程進歩を論じて其完成と目的とを愛の活動に置いた。一は人間の動物に對する關係を說き、一は神に對する關係を論じた。これいづれも見逃し難き人間の背景である。今暫らく

人間の原始的祖先は別として、我等は無數の過去に於ける同胞に對して骨肉の關係を有すると共に精神上の關係を有することを忘れてはならぬ。例へば音樂を聽いて大なる感動を與へられるのは、一種の心の嵐が起つて心中に潛み居る過去の秘密が深底から搖り動かされるからであるとはラフカデオ・ハーンの見解である。即ちこれ一種の魔術にかゝつたやうなもので、種々なる聲音が生れぬ先きの數千萬年の記憶を喚起するのである。祖先傳來の悲哀憂愁の幽魂や、歡樂喜悅の靈魔が俄かに躍り出し、熱烈なる情となり懺悔の叫びとなり、失望のなやみ、憧憬のはげみは悉く其手を延ばし足をもたぐるのである。過去幾萬年間祖父の永き血統を通じて得たる經驗と記憶とが一時に潛在能力を表はすのであると云つて居る。巨大なる日本種の犬が夜半人靜まりたる時に悲しき呻き聲をなし、訴ふるやうな遠吠をするのは、やはり過去の恐ろしかりし時代の記憶が本能的に喚起されて自分の過去の野蠻性がこれに共鳴するのであると云ふ。犬のことはどうでもよいとしても、我々の生涯は暗夜の雷光の一閃するが如くに

前にも後にも關係なしに一瞬間に消滅して仕舞ふものとは考へられない。過去の祖先の遺せる種々なる遺産は我等の前後左右に又は我等の精神の中に山と積まれてあることとは否む可らざる事である。我等は此意味に於て自分一人生きて居るにあらで我等の意識を通して我等の祖先が働いて居るのである。

斯くの如き祖父の背景を有する我等は遺傳なる勢力に支配さるべきことは今更云ふまでもない。「善き樹は善果を結び惡しき樹は惡果を結ぶ」のは其原因は既に前代にあるのである。敬虔なる父母を有する子女は年若きを以て人に輕んぜらるゝことなく言と愛と信と潔きを以て精神上の王者となることあるは我等の屢々見る所にして、人生の慶福これに過ぐるものはない。「我をいつくしみわが律法をまもるものには、千代に至るまで恩惠をあたふればなり」とは實に此謂である。國木田獨歩の『欺かざるの記』にかう云ふことが書いてある。『美はしき品性は實に稀なる哉。某の人は一個の天才なり。されど其品性は美ならず。其品性は寧ろ下劣なり。其精神は高尚なり。其理想は

高尚なり。されど其品性は下劣なり。げに品性は中心の信義なる哉。某の人には才あり文あり。されど其人物に芳香なし。われはリンコルンを靈ふ。茅屋の民には美はしき品性の人あり。無學の人にも高尚なる品性宿るなり。品性は半ば遺傳なれども、されたゞれを養ふべし。德性を涵養し。氣質を變化するは此の事なり。されどこれ抑も末のみ。信仰の火を以て燒きつくすに如かず』

と自分は之れを讀みたる時一種の電氣に打たれたるやうに感じた。實に高尚なる品性も半ば遺傳なりとは能くも云ふた。リンコルン、ワシントン、エマースン、プルックス、我等は彼等の名を耳にする毎に黃金や寶石も其の光を失ふを思ふ。米國はローズヴェルトが戰艦を造つた爲めにエライのではなく、彼等を生みしめたに偉大なのである。彼等は政治家であつた。思想家であつた。崇敎家であつた。さりながらこれに勝りて貴く慕はしきは其品性の人なりしことである。其他多くの天才、詩人、學者、藝術家、辣腕家の背後には何時も非凡高潔なる精神的遺産のあることを思はないことは

ない。

如何に立派なる遺傳があつても、之れを醇化し美化する家庭がなければ、これをして圓滿潤達なる發展を遂げしむることが出來ない。若し其家庭にして屋壁墜ち、檐破れ、雨日に逢ふ時は不義の雨は輙ち屋漏淋漓として防ぐ可らず、惡魔の風吹き荒ぶ時は愛の燈火も直ちに消え失するやうであつては、却つて恐ろしき害毒を社會に流すやうな不具者を出すに過ぎぬであらう。こゝに於てか我等は一代の師表として仰がるるやうな志士仁人はいづれも神聖純潔なる家庭を其背後に控えて居ることを見るのである。特に家貧しけれども天使の如き潔白なる志懷を操ける母が其背景となつて居ることは疑ふ可らざる事實である。國民教育が山村僻地に至るまでも普及し、三尺の童子もイロハとともに忠君愛國の昔話を詰め込まれても、決して注文通りの忠臣義士は產出しないことは明白なる事實である。溫かき心情、純潔なる良心、寬宏なる精神、公明なる態度は修身書の諳誦の產物にあらずして、賢明慈愛なる母の感化によるもので

ある『柔和なる者は幸なり其人は地を嗣ぐことを得ればなり』とは此場合に於ても適用し得べき金言である。彼の個人心靈の權威を認めずして單に家族主義の形骸に依らんとするが如きは我等の因より贊成し得ざる所のものである。然りと雖清く暖かき家庭の權能を認むること能はざる者は寧ろ憐むべきさすらひ人である。子女の生長發育をして野の百合の如く天眞に、天使の如くに純潔ならしめ得ざる母は容易に赦す可らざる罪惡を犯しつゝある者である。學校の知育のみに力を注いで家庭の愛育を重ぜぬ間は、國民は理智に敏く利害に鋭く、名譽に熱することあるも、決して氣品高尙なる國民の出現を期することは出來ない。物質的報酬以外に精神的報酬に甘んじ、進んで奉仕の生涯を送り、犧牲の生活を送るが如き眞正の人物は如何にしてもこれ以外の場所に之れを求むることは絕對的に不可能のことである。

家庭の清淨なる感化より想起することは人が人の背景となると云ふことである。一人の偉大なる人物を出さんために、其兄弟、朋友、乃至先輩が直接間接に容易ならざ

る働きをして居ることである。世に總領の甚六と云ふ諺がある。長男はお人よしで一般に愚物であることを云ふのである。しかしこれは大に同情すべき言葉である。特に家族制度を何よりも重しとなせる日本にありては、一家の長子は父祖の家業を繼ぎ、其墳墓を守らんためには個人の希望を捨て、活動の志を捨てなければならぬ。かくの如くにして一生碌々として無名無爲の生涯を送ることゝなる。然るに次男、三男は後顧の憂へなきに乘じて、盛んに驥足を延ばすことが出來る。かくの如くにして兄は盲目縞の筒袖に前垂をかけて帳場働きをして居る間に、弟は手に唾して功名利達を恣にして居る。福翁自傳によると五人兄弟の中の末子なる福澤諭吉は長兄が家事を整理して居る間に、長崎に遊學して外國の事情に通じ。大阪にては緒方の門に入りて醫學を修業し、それから江戸に行き、亞米利加に行きなどして、遂に明治の大立物の一人となつた。これ其兄の御蔭であつた。西郷南洲は長子であつたが、幸にして長弟吉次郎なるものありて家庭の重荷を負ひて、兄をして名をなさしめた。家庭は英雄を造り、又英

雄を殺すものである。若し南洲翁にして從順にして家事の經營に長じたる吉次郎氏なるものなかつたならば、我等は一個の世に隠れたる無名の村夫子を得て、日本國の運命を指揮したる大英雄を失つたであらふ。幸にして其兄をして天下の士たらめしんがために自ら屈して家を治むる人となりし者ありて、彼は其志を全ふすることを得た。亞米利加二十代の大頭領となつたガーフィールドは貧家に生れ、早く父に別れた。しかし慈愛深き母と姉と兄との苦心によりて、遂に天下に名を擧ぐることが出來た。十一才の兄トマスは母と共に勞働に從事し、十五才の姉はゼームスを背負つて一里半の田舍道を通つて小學校に學ばしたとのことである。それから晩になれば弟は其學びたる所をおさらいする。兄はこれを聽いて僅かに勉强したとのことである。斯かる好兄弟を想ふ毎に、我等は英雄の名をなすのは無名の英雄ありて其身心を献げ、因て以て同胞をして雄飛の機會を與へたことを知るのである。これは實に親子の情、友人の信と共に人生をして詩歌的ならしむるものである。又かよわき婦人の身を以て、能く良

人に後顧の憂なからしめ、失望すれば之れを鼓舞奬勵して遂に其使命を全ふせしむるに至つたことは事珍しく例を擧ぐるまでもないことゝ思ふ。又學校の敎師が貧しき生活を營み、一生埋木の花咲くこともなきに、常に其子弟を指導して、各自の天分を盡さしめることも常に耳にする所である。吉田松蔭の名は幸に喧傳してるけれども、其事業としては何もない。然るに其弟子達は其精神に感激して維新の大業を成就するに至つた。此間の關係は丁度資本家が少壯の事業家に資本を渡して自在に其辣腕を揮はしめるやうなものである。基督敎の起原を尋ねる時は施洗者ヨハネは神の羔キリストの背景であつた。『我はキリストにあらず、惟その先に遣はされし者なり……彼は必らず盛になり我は必らず衰ふべし』とは能く其職分を自覺した言葉である。斯くの如くにして世には他の背景たるに甘んじたる無名の英雄が英雄以上に其數多いのである。我等は必らずしも自ら功名を競ひ、事業を遂げんとすることなく、甘んじて人のために其裏にかくれて犧牲の生活を送り、精神的報酬に滿足する丈けの雅量あること

が必要である。

善良なる家庭の愛育に肉肥え血清められ且つ他人の熱涙と鮮血とによりて生長した る者が出で、實社會の戰鬪場裏に驅馳して親しく辛酸苦楚を嘗め、進んで激浪怒濤を蹴破し、屢々失敗蹉跌し、屢々過誤罪惡に陷り、屢々懺悔改悛し、屢々發奮興起しつゝある間に、彼の人物は鍊鐵の如く剛毅になり黃金の如くに光彩を加へ、金剛石の如くに貴くなつて來る。彼の進む所荊棘の荒野は化して百花燎亂の花園となり、彼の手の觸るゝ所人は凡て祝福せられ。慰藉せられる戰亂茲に收まり、腐敗茲に淨められる。かくて彼の閱歷はよしや人爵の人に誇るに足るべきものなきも、千枚の特許證に包まれ、百個の桂冠を飾れる如きものとなりて、到處に人は彼を歡迎し隨喜して止まない。斯くの如くにして人格は累積的に漸次に其力と光とを加へて果てしがない。其人のこれまでの德行愛情は悉く集まり來りて現在の堂々たる威風を示めすやうになる。彼の戰場の勇士若くは壇上の牧師が、しかく畏敬の情を起さしむる所以のものは何の爲め

なるか。これ實に其背後に控へたる偉業併びに德行に對する記憶によるのである。即ちこれら偉業と德行とは力を協せて現はれ來れる偉人に光を放つのである。彼等は恰も天使に護衛されてるやうな者である。斯くして人格は實に德行偉業の齡を重ねなるものである。彼等は斯かる背景を有する故に凡人と異つて居る。それ故に其云ふ所常人の云ふものと何等異ることなきも、能く萬人を威服する魔力を有して居る。一手を動かさずして能く人を頤使することが出來る。人は其爲めとならば喜んで生命を捨つるも敢て辭さない。況んや其靴の紐を解かんことは爭つて人の爲さんと欲する所の名譽と心得て居る。これに反して陰鬱不安の容貌を見、或は眼咼深く落ち込みたる處に鋭くしかも落着きのなき眼光を見る時は、其人の過去の閲歴の極めて暗黑なる犯罪に充てるものなることを想起する。若し柔順なる驢馬の如き表情をなし、常に愚かなる御無理御尤もと云ふ贊同の顔貌を以て強いて微笑を裝ふ者を見る時は、必らずや三太夫か幇間なることを察するに難くない。彼等は臭氣甚しく鼻持ちもならぬものを背負

つて通りを歩むが如きもので、自ら其陋醜を覺らざるに至りては眞に憐むべき代物である。しかも世は互に汚物をぶら下げて得意がつて居る人々の多きには閉口せざるを得ない。こゝに於て時に化粧術と防臭劑とを利用して一時を糊塗することあれども、陋は益々甚しく醜はいよ〳〵其度を加ふるに至る。滔々たる濁流は宗教に政治に實業に汎濫して底止する所を知らない。

しかし人は神の形姿によりて造られたことが眞ならば、人の本體は純潔高尚なるものでなければならぬ。陋醜汚穢は人の塵芥屑物にして、清淨潔白こそ其本來の姿でなくてはならぬ。人は神の形姿によりて造られた以上は人は神の符號で又模寫である。主型は神である。神は人の最後の背景でなければならぬ。紙幣は金貨と取り換へることが出來る。贋造紙幣は金貨に取換へられない。人間は神の化體にして何時にても神と一致融合するものとなりて始めて人間らしきものとなる。人間らしくなるとは神らしくなるの謂ひである。これ以外に人間らしくなる方法はない。蓋し人間の主型は神

なるが故である。

先づ人間には良心と云ふ頗る不思議なものがある。これ我が所有物の如きも己が精神の中に在りて我れに對して一種の權威を有する事實を以て見れば、全く自分のものとも思はれない。此命令支配權を有する無聲の聲はこれを神の聲と認むるのは宗教的見解である。其絶對なる權威を説明するにはこれ以外の正當なる解釋を見出すことは出來ない。ウオルヅウオルスの歌つた如くに良心は『心靈に於ける神の最も親しき存在、又世界に於ける神の最も完全なる形像』

"As God's most intimete Presence in the soul
And His most perfect Image in the world."

である。我等は此良心に服從すること益々確實なれば、我等の人格は益々純潔高尚となつて來ることを常に經驗する。それ故に此精神的淨化を經驗する人々はこれを以て神の働きとなし、神わが中に働き給ふと信ずる。スピノザがわれらが神を愛して完全

に進む時は、これ即ち神が自分に對する無限の愛の一部に過ぎず』と云ふたのは此意味である。それ故に健行努力して暫らくも止まざる自力の人は常に謙遜從順に神の保助を仰ぐ他力主義の信仰を有するに至る。こゝに最も意味深き宗教上の秘義があると思ふ。

又我々は屢々インスピレーションと云ふ心靈上の不思議なる經驗を有することがある。これは我等の心の奥の深き感動であるが、一方から見れば其本來の字義の示めす如くに神靈わが心に搖動するのである。一たび此淨き感動に打たれる時は人は煮火によりて鎔化純化せる金の如きものとなり、全く神靈の儘になつて仕舞ふ。我意私慾は全く無くなり、身體と其表情は心靈に鎔化し、而して心靈は全く神の如くになりて、人は極めて神らしきものとなるのである。即ち神は心靈と身體とに顯はれて、無象の神靈は何時しか有象の形態を借りて働くのである。これが實にインスピレーションの意味なりとすれば、神こそは實に人間の主型背景なることが明瞭となるであらう。此意

味に於て我等の肉の生活を見る時は、『われを遣はしゝ者の旨に遵ひ其工を成し終はるこれわが糧なり』と云ふことになる。即ち肉體は心靈の容器となりてこそ始めて完きことが出來る。若し此主義に服せずして貪慾を恣にする時は、肉體は最早心靈の道具にあらずして、却つて自ら牢獄を造り、進んで自らの墓場を造ることゝなる。これがために人は心靈の特殊の働きである所の決斷の力を失ひて外界の力に制せられ、其結果全く器械的人間となつて仕舞ふ。物質主義の落ち着く所はこゝである。實に『靈は活かし肉は殺す』とは此謂ひである。

人間が神靈と斯かる父子の關係、原因結果の關係を有して居るにも係らず、恰も金滿家の子息が父の財産あるにも係らず、貧乏生活をなし、貴族の子弟が其身分を忘れて放浪の身となつて居るやうなものである。彼は放蕩息子である。彼は父母の膝下が窮屈で居心地惡しとなし、資産を頒與されて遠國に旅行し放蕩して悉く之れを費して仕舞つた。遂には豕の食する豆莢を以て己が腹を充さんと欲する程淺間しくなつた彼

は此時始めて頓悟する所あり、黯然志を改めて父の許に歸つて罪を謝した。あはれ我等の現在の所有は塵芥片屑に過ぎずと雖、これが爲めに全く失望すべきものではない。我等に何物の誇るべきものなしと雖、神は何時にても我等の用に供せんために無限の財産と無窮の生命とを備へて居られる。進んでこれを得んと欲するものは惜む所なく與へられて盡くることはない。彼はいくらでも富み、神の榮光の右の座に座することも出來るのである。こゝに於て我等は圖らずも近代の精神科學に一大光明を投じた人間の潜意識なるものを思ひ出さずには居られぬ。これは始め催眠術(メスメリズム)の如き奇妙なる現象として人間心理の活動を作成する樞要なる貯蓄所となるに至つた。神怪不思議の奪魂呪咀を事とし、迷信狐狸の業を事とし、人を誘惑墮落せしむる野蠻時代の遺物と見做されたものは、今は學問上容易ならざる資料となり、將來如何なるものとなるべきかは推測することの出來ないものとなつた。曩きに祖先及び遺傳の條下に於て一言した如く、顯意識の地平線に位する潜意識或は無意識の領域内には祖先傳來の思想、

感情、經驗、乃至未だ表示の機會なき無限の可能力が詰め込まれて居る。日常生活に於ては著はに意識の表面に表はるゝことなきも、時ありて表面に現はれて來ることがある。又時には心と心とは無意識の狀態の下に交通作用を起すこともある。恰もマルコニーの無線電信の如くに感覺の手段に依らずに遠方にある者或は死者と精神上の交通相識を行ふこともある。斯くの如くにして精神上の働きは時間と空間とを超越し、エックス光線の如くに物質の障碍をも難なく透破するのである。然るにこれまで此無意識作用はやゝもすれば人間の道德性を沒却し其人格を墮落さする傾向があつたが、これは大に誡むべきことで、人格を向上發展せしむるやうなインスピレーション即興的發動の方面を開拓せねばならぬ。つまり人間の意識を太陽のスペクトラムに譬ふれば七色景は顯意識にして、人の眼力はこれ丈けに止まり其一端赤色の場所を過ぐれば熱となり、他の一端紫色の場所を過ぐれば未だ物理上の秘密となつて居る不可解のものがある。これと同じく意識の一端謂はゞ下位に屬するものを潛意識と名づくべくは

他の一端上位に屬するものを超意識と稱すべきものである。後者こそ即ち我等の貴重なる人格と神性との潛在して居る所である。而して人格は實に潛意識が向上して現意識となり、而かも其現意識の上に神的要素たる超意識が加つて來る所に於て最高の發達を遂げるのである。若し人間と神との關係を明かにするに足るべき所謂『ミッシング・リンク』の所在を究めんとすれば、確かに此超意識の領域に於て之れを求むることが出來やうと思ふ。これが將來の宗教心理の開拓すべき主題であつて、ジエームスの『宗教的經驗の種々』は將來の學者によりて一層完全なる續篇を得て其目的が達せらるべきものである。

人が互に相信じ相愛するより美はしく慕はしいことはない。而して人は他を信じ愛する時は決して其有限皮相なる意識の領域や既成の人格のみを以て滿足するものではない。若しこれを以て滿足するやうでは餘り淺薄で餘りに失望し易い。これは人間の價値を餘りに安く見積つたもので、餘りに宿命的である。世の不信不義猜疑誤解は多

く斯かる見方から起つて來る。人生の進歩と心靈の權威とは實に人間の背後に潜める所の神とのミッシング・リンクを信ずるにより、又之れを愛するによりて始めて生じて來るものである。眞正の愛情は對手が未だ持つて居らぬけれども、其心靈の奥底に匿れて他日見事なる發達をなして立派なる德となるべき萠芽を有することを認識する不思議なる能力である。一たび此能力を有する時は冷酷なる主人を化して春風薫んずる紳士となし、沒義道なる良人に嫁して獨り寂しき荒野原を辿るに堪えぬことも暫しにて、やがては貴き良人と樂しき家庭と造り出すことが出來る。斯かる見識を有てる親は子女の今持つて居らぬものを信じて其子女を愛してこれを具備せしむるに至る。斯かる光明を有てる敎師は弟子の未だ現はさぬものを信じて督勵常に止まずして遂には之れを實現せしむることゝなる。又其子女弟子たる者も其親に愛せられ、敎師に信ぜられ、溫められ、淸められ、導かるゝために、眠れる意識は覺めて活動し、其無意識の中に潜める德性が漸次發達し來りて、何時しか見上ぐる程の高尙なる人格を形造る

やうになる。青年男女の愛情の如きも其肉慾的動機のために身を汚すことなく、互に現在に現はれた以上の貴重な人格を信じて之れを培はなければならぬ。純潔なる愛情は實にかくの如きもので、優麗極りなき心靈の光輝は此邊から發して來る、現代の放縱淫亂なる青年男女を救はんとすれば彼等に此靈覺を與ふるより外はない。かくてこそ神の子等が互に相携えて其父なる神の御前に歩み行く美觀が現はるゝのである。

夏の夕暮村雨降りて、新綠滴る樹梢の彼方遙かに東天を眺むれば、幼心の思出多き美はしき虹の懸れるを見るであらふ。虹は空の異象の中にありて最も美麗なるものである。然りながら虹を愛でゝ、遂に其背後に太陽の存在することを認めざる者は愚者である。美はしき虹は假象である。暫らく現はれて暫らくにして消え失せて仕舞ふ。輝ける太陽は假象でない。何時も正確なる速力を以て宇宙の軌道を公轉する。我等の視覺に訴へらるゝ者の背後には何時も太陽が存在する。時ありて人は之れを顧るも、寧ろ之れを何等の異常なきものとして全く閑却するを常とする。我等は憂きに人間の超

意識の中に神靈との連鎖の存ずべきことを云つた。これと同じく人間の主型は之れを心靈的方面から觀察すれば神靈なるべきことをも告げた。こゝに於てか人間の靈的生活は無限に高尚なるものとなる。無限に發展すべき潜勢力を有するものなることを知る。カーライルは曰く『人の幸ならざるは其偉大なるがためである。蓋し人は無限性を懷き、其あらゆる智慧を以てするもこの無限性を無限の中に葬り得ざるによる』と而して此無限性なる潜意識が向上して現意識となり、こゝに神的要素充滿して超意識の領域に達せる最高の人格はキリストである。少くとも基督信徒は之れを首肯する。即ちキリストの人格にありては神は常住座臥暫らくも離れなかつた所の背景であつた。我等は今茲にキリストの神性とか、神の化身とか、神人合一とか、乃至キリストの神たる意識などに關して論議する積りではない。唯人格の最高現としては必らずや神靈とぴつたり合つたものでなければならぬこと、而して最高人格はキリストに於て之れを認め得ることを確むれば充分なのである。『我を遣はしゝ者我と共にあり、父は

我をひとりおき給はず、蓋はわれ恒に彼の心に適ふ事を行へばなり。』「我と父は一なり。」「我は途なり、眞理なり、生命なり、人もし我に由らざれば父の所に住くこと能はず。」「われ父にをり、父のわれにをることを信ぜざるか。」「我は父にをり、父われにをる。」「汝の我に委ねし所の行は我これをなせり。」約翰傳の名を以て後世に傳はれる福音書は實に這般宗教上の最深最高なる奥義を宣明せんがために書かれたるものである。此貴き意識は實にキリストの生命であつた。畫家は此事實を如何にもして描寫せんものと苦心して、遂にキリストの頭に後光を戴かせた。キリストには神的要素、否神の靈充滿して殆んど現意識となつて居つた。「われら其榮を見るに誠に父の生み給へる獨子して恩惠と眞理とにて充てり。」それ故に我等はキリストを見て神を見、キリストに一となりて神と一つとなることが出來るのである。希くは我等の背景にキリストを潜ませしめよ。希くは我等の言行、思想、感情にキリストを顯はさしめよ。希くは我等の理想の天空に神の靈姿あらしめよ。希くは我等の現實の足許に神の姿あらしめ

よ。希くは人格の背景たる神靈をして遙かに見ゆる書き割りや、裝飾物たらしむる勿れ。希くは道肉體となりて我等の內に宿り、生ける生命の水滾々としてわらの人格より溢れ出でしめよ。愛ある神よ、われらを單に言葉の人たらしむる勿れ。神の靈我等の心を感動して、我等をして力の人たらしめよ、我等をして愛の人たらしめ給へ。そは神は愛なればなり。

六

日本人は背景を好まない國民である。蜆汁の中身丈けを欲し、肉のエッキス丈けを喰べたがる國民である。一夜漬けの速成を事とし、當座向きの成功計りを當てにして居る。雷應するにしても料理丈けに心を盡して、室內の裝飾や食卓の談笑をおろそかにし勝ちである。一氣呵成にやつつけて仕舞ふことに適すれども、持久の策を講じてジリ〳〵とやつてのけることは其不得意とする所である。背景なきが故に洒脫淡泊の趣きはありと雖、奧行きある底力がない。中身と肉エッキスのみを嗜むために、直ち

に滋養分を攝取することは出來ても、少しく固い物を當てがうと屹度胃弱を起したり、下痢をする。一體に努力なしに壯强とならんとするも、そは不可能である。速成的に物質的文明の設備を完うしたけれども、雨風の襲來ある毎に汽車不通となり、不作や何かのために輸入超過となる。目先きの成功丈けを見るからして、戰爭には勝てるがどうも其後の國民の活動が鈍つて來る。料理丈けを吟味するから、美食に飽ける外國人對手の外交談判には多く彼等を滿足さすことは出來ない。裝飾なきために文明の皮相に心醉するかと思へば早速骨董品の煤拂ひをして祖先崇拜や神社參拜となる。談笑に赤心を吐露しないために、形式ばつて國交の使節を簡派しても、兎もすると大切な仲間入りが出來兼ねて馬鹿を見ることがある。持久の策を講ずることなきために萬事が朝令暮改で、教育の施設でも、工業上の設計でも、商業上の活動でも、始終動搖する計りで、堅固不拔のものがないやうな譯である。

人或は日本には古今東西に稀れなる皇統連綿たる歷史がある。これ國民として無上

の背景である。これ以外に何の背景が必要なりや、これ以外のものは却つて貴重なる固有の國民性を破壞するものだと云ふであらふ。成程これに異論はない。併しながら是は日本國民全體としての背景であつて、これ丈けの歴史的背景は多くの必要なる背景中の一つに過ぎない。これは此まゝにして置いて、國民の進歩を妨げぬ範圍に於て敬意を拂はねばならぬ。それと同時に國民性の完全を期せんと欲すれば、決してこれ丈けでは間に合はないことを知らねばならぬ。時と共に進歩窮りなき人類は單に過去の恩惠遺産に甘んずることなく、何時も未だ開拓せざる新土壤を耕やし、未だ試作せしことのなき種子を蒔き、未だ發見せざりし新天地に向つて帆を揚げて見る必要がある。それ故に我等は祖先よりも偉大なることを期すべき筈である。「古への豫言者も天使も望んで未だ見ざりし」所のものを我等は凡て見るではないか。果して然らば我等の子孫は慥かに我等現代人よりも勝れたものでなければならぬ筈である、我等の將來の民族の血液は我等の血液を繼承して、しかも一層純潔に一層濃厚でなければなら

ぬ。我等の將來の民族は我等の望んで成し得ざりし遺志を奉じて一層偉大なる事業を成し、一層光榮ある冠を戴かねばならぬ。こゝに於てか世は擧つて祖先崇拜を謳歌すとも、我等は寧ろ子孫崇拜を唱導せねばならぬ。國運の發展を夢に幻に想望する時あゝ、我等の心血は躍らずに居られやうか。常に將來メシヤを降臨せらるべきことを待ち望んだ猶太人の心靈は偉大であつた。彼等はアブラハムの神、ヤコブの神を信じたと同時に國民を救ひ萬國民を救ふべき王の王、人の君、光榮あるメシヤを信じた。而して多くの豫言者と義人とは未だ現はれざるものを信じて救はれたのである。明治維新以來五十年間の我國の進歩は目覺ましいと人は云ふ。然らば今後五十年、百年、三百年、五百年の後の進歩は果して如何なるものありや。我等は過去の國民的背景に感謝すると共に、將來民族の偉大なる前景を望んで感奮興起せざるを得ない。

しかも將來の國民をして光榮あり、雄大なるものとなすと否とは我等現代人の責任に俟たねばならぬ。潜意識を通して現意識に達し、更らに超意識に向つて開展するが

如く、而して其間に縷々として暫らくも斷たざる努力憧憬あるが如くに、過去を通じて現代に達し、更らに偉大なる將來に向つて發展せんとする者は十分に戰ふべき戰ひを戰ひ、行ふべき義務を果さねばならぬ。而してこれを全ふせんがためには如何にすべきか。忠君愛國の精神は既に存在して居る。道義觀念は既に存在して居る。國民教育も網の目細やかに普及して居る。國防上の設備も必らずしも左程に劣つては居らぬ。富士の峰は永へに聳え、大八島の島根は深く根ざして動かない。以上は既に我國民の有する所である、少くとも備へて居ると一般に承認されて居る。又これをなすに必らずしも其人に乏しくない。さりながら我等の見る所にして誤りなしとすれば、我人と云はず、我等御互が未だ容易に開拓すべくして開拓せずに居る所の一事があると思ふ。即ち人間の主型は神であることを信じ、人間の靈は神の靈委によりて造れたことを信ずることである。即ち神を以て我等の背景とすることである。我等基督信者は少しく此人生の一大事を基督によりて學ぶことが出來た。これ慥かに心靈上の大發見

である。されど果して世を救ふ程に深刻沈痛なるものあるか、果して罪惡慾情を燒き盡す程に熱烈なりや、果してわれ神と共にあれば乏しきことあらじと叫び得る程に靈覺したか。我等の心靈の背景は依然として半ばスケッチを畫いた計りである。未だ全幅の畫面は生動しない、未だ槍舞臺に現はれる程の仕込みがない。未だ神つ大御心と一つとなる程に清められて居らぬ。我等は決して現在の所有物丈けを以て滿足することなく、一層高き靈の給物を給はらんことを祈らなければならぬ。かくの如くにして『われ生くるにあらず、キリスト我にありて生けるなり』と云ひ得る程に宗教的意識を明かにし。神と我とは一なりと云ひ得る程に完全なる域に達したいものである。背景をして畫ける藝術に止まらしめずして、神をして我等の心靈の元動力となすに至らしめたいものである。

四　國家と個人

國の氣品と紳士道

一

新聞紙の報ずる所によれば臺灣にては大規模の臺灣人謀叛事件ありて、死刑者數百名を出し、臺北の斷頭機六臺は寸暇なく活動しても中々やりきれぬとのことである。今や御大典が目睫の間に迫りつゝある時に、二十年以來の領土が今尙ほ斯くの如き始末なりとは眞に慨嘆すべきことである。又最近知人からの私信によるも、匪徒各地に起り既に處刑者三百以上目下裁判中の者同數以上ありとのことである。去る八月に新庄廳を襲はんとせし陰謀者中には保正や其子弟や、又は公學校の卒業生も加入して居つたので誠に遺憾千萬のことであつた。これを以て見ても公學校の教育丈けでは彼等

を善道に導くことは不可能なるを信ぜざるを得ない。元來干戈を以て獲得した殖民地なれば人民の心服し居らざる者あるは勿論にして、之れを融和善導するの道は宗教に依るの外はない。しかれども宗教は微々として振はざること甚しきものがある。これまでは生蕃討伐を唱導せられ、今や匪徒討伐に忙殺せられんとするは確かに聖代の一大恨事である。

それかあらぬか、臺灣の駐屯守備軍は今秋を以て北部地方に機動演習を行ふことに決した。守備軍全部の演習は今回を以て嚆矢とし、即ち安東總督統監の下に臺南、臺北兩守備隊は十月下旬から臺北、桃園、新竹の三廳下に武を較し、それから臺北練兵場にて觀兵式を行ふとのことである。多分これは臺灣人に對する示威運動の積りかも知れぬ。

思ふに殖民地の謀叛事件は世上其例に乏しくないことで、必らずしも當局者の失政とのみ云ふことは出來ない。南洋でも獨逸占領當時、ボナーベにはベーデル知事以下

の遭難事件あり、サモアの謀叛事件などありて、多數の島民が死刑や流刑に處せられて居る。干戈を以て獲得した殖民地の住民が必らずしも新政を謳歌しないのは勿論のことである。併し我々御互に日本人として公平に考へて見たいことは、日本人は果して新殖民族に對して人道に反かざる所置をなしつゝありやと云ふことである。屢々朝鮮や臺灣に旅行して親しく見聞せる所によれば、予は日本人が弱い人民に對して非常に禮を失し公道を離れた行爲をなすことの多きに驚かされた。炎熱の間に車夫を走らして用事が濟めば殆んど打擲せん計りにして追ひ拂ふやうなことは決して珍しくもない。無理に祖先傳來の水田を沒收して甘蔗を植えさしたり、子女を强姦したり、隨分氣の毒な虐待をして平氣で濟ませて居る。殆んど無警察と云はん計りである。靑島が日本の領土となつてからは酌婦や賣春婦が白晝盛んに街衢に横行し、土着人の支那人を苦しめて居る有樣を見て憤慨して歸つて來た人もある。

二

又日本に留學した隣邦の學生靑年が歸國してから要路の人となれば、何時も日本に對して反感を懷き、日貨排斥や、排日思想の張本者となることも知れきつた事實である。これは全體如何なる理由であるか。試みに東京に於ける隣邦學生が下宿屋其の他の場所で如何に冷遇虐待せられつゝあるかを目擊した者は容易に首肯するであらうと思ふ。女將が惡人と結託して彼等の金品を捲き揚げんが爲めに非常に陋劣なる手段を講じつゝあるけれども、一般社會は斯樣のことに關して餘りに寛大である。國際問題は決して外交家丈けの駈引ではない。若し日本人が彼等異鄕に來りて寂しい學窓の裡にある靑春の血に燃ゆる靑年を遇するに、もつと寛大なる襟度と高潔なる溫情とを以てしたならば、日支交涉問題もこれまでのやうに苦心失敗せずして濟むべき筈ではなかつたらうか。若し日本の官吏學者が留學生として歐米に滯在せる當時、我邦に於ける隣邦學生のやうな待遇を受けたならば、我等は如何ばかり歐米諸國を憾らず感じたであらうか。纖弱なる萠芽を惠んでやれば、大樹となつてから樹蔭に宿れるのであ

る。

三

南洋の新領土に於ても、旅行中屢々不快なることを目擊した。場所はジャルイト島のジャボール。一夜月明に乘じ傳馬を浮べて上陸した。こゝには本國に歸還の途暫し當地に滯在して居つたサモア土人が居つた。彼等は獨逸時代に謀叛を企てたために遠島に流刑の身となりしも、今は許されて本國指して歸へり行くのである。其中の一人の婦人が椰子の實一個を水兵に强奪されたと云ふて土人酋長の子を介して我等に訴へて來た。椰子一個はどうでもよろしいが、無斷で持つて行かれては困まる。特に弱い婦人と見て無謀の擧に出づるとは情けないことである。事の正否は容易に判じ兼ねるが傍で之れを聞いた古參水兵は酒に醉ふた勢ひで、我等の止むるをも顧みずに其婦人を對手取り、婦人は逃げる。水兵は之れを追ふ。怒號した水兵の後から婦人の悲鳴が聞える。何んでも黑髮を摑かんで擲り付けたらしい。それは我等が船に乘つてからの

ことであつた。予はサモア婦人が可愛相であつたけれども、どうしやうも無かつた。又或島で水兵が土人婦人を騙まして日本に連れて行くとか何とか云ふて意を迎えやうとして居つた。土人婦人は聖書を出して涙ぐみたる顏を蔽ふて居るのを見たことがある。一寸した旅行にも直ぐ眼につくのは斯かる種類の日本人の不心得である。

四

全體日本の道德思想は餘りに國家本位で何人でも自分の國さへ善ければ他國はどうでもよろしいと云ふ態度である。勿論國際間の問題となれば、自然こんな調子に傾き勝ちなものであるけれども、個人〳〵までが全然之れを是認し、又之れを正しき道德標準と考へて居るやうなことは、甚だ間違つた考えである。在來の歷史の發展順序を考察し來れば、現に斯かる發達の程度にあるのは止むを得ざることかは知れぬけれども、これは大に國家の氣品に關することである。眞に殖民地の住民を保護して利殖の道を講じ、共に天賦の幸福を增進せしめんとするにあらざれば、未だ寬容ある國家と

云ふことは出來ぬ。商人が如何に不正を働いて暴利を貪つても、學者と宗教家とは大に積極的手段を講じて其罪滅ぼしをせねばならぬ。支那に雇はれて行く教育家達までが出稼根性を發揮して、國の威信を傷くるやうな行爲を敢てするに於ては、誠に沙汰の限りである。これは全く日本が偉大なる國民としての精神的蘊蓄がないからである。單に薄つぺらな軍國主義や領土擴張の主義に驅られて外部に發展すること計り知つて、却つて精神的に貧弱なる國家となりては、甚だ面白からぬことゝ思ふ。斯かる謬見こそ大に國家の前途を危ふくするものである。

五

併しながら我が國家にもつと紳士的氣品を備へんことを要求する前に、國民各自がもつと紳士的氣品を養ふことが必要である。我々各個人が奮つて自己の品位と名譽とを重んずるやうにならねばならぬ。今のやうに收賄事件や何かで騒いで居るやうでは誠に心細い次第である。全體現代人の多くは道德上のことを餘りに芝居氣を以てやつ

て居る傾向がある。不純不潔なる外部の行爲を避けることは努力するとしても全く純潔なる思想と潔白なる情感との充實せる生活を營まんとする興味を缺いて居る。愛國とか至誠とか云ふものを外形化し廣告化して、單に形式上の誓言のやうなものと解するを以て滿足せんとする。我等は他人の尊敬を受くる丈けの人となれば嬉しく思ふ。併し我等は一層深く徹底して、自ら顧みて自らを尊敬し得る人とならねばならぬ。「大きな輝ける模造金剛石は不注意な觀察者の稱讃を博するかも知れぬけれども、決して自ら尊重する譯にはいかぬ。」これ以上深き根底ある動機道念が裏面に存じなければ、自然不誠實とならざるを得ない。ラスキンはヴェニスの寺院に於て總督の彫像を見たことがある。所が觀者に向つた表面は精巧に仕上げられて居つたけれども、裏面は粗漏極まれるものであつた。前面は額の皺や帽子のひだに至るまでいづれも苦心の痕跡を示めして居つたけれども、裏面の大理石は殆んど手が着けてなかつたと云ふことである。これ全く自尊の精神に缺くる所あり、純正の情念に乏しきがためであつた。

嘗つて或る米國人は日本には溫泉があつて身體を清め、米國には鑛泉があつて腸を清めると云ふたことのあるを記憶するが、米國はいざ知らず、これは確かに我が國人の一考すべき言葉であると思ふ。眞に善良ならんと欲するならば、先づ精神生活の根底から清められねばならぬ。『我等自ら顧みて疚しからざることが必要である。進んで神と正しき關係にあることが絶對に純正なる生活である。』

六

こゝに於てか、予は紳士道の皷吹を叫ばねばならぬ。日本には貴族もあり、豪商もあり、學者も教育家も多い。併し紳士の儀表として世に示めし得るやうな人士に至りては品切れの嘆を發せねばならぬ。紳士とは何ぞ。紳士とは如何なる場合にも他人に迷惑をかけないことを心懸けてゐる人であるとニューマンが云ふた。これは極めて適切なる定義である。成程消極的な云ひ樣に過ぎないけれども、社會の人々が互に相約束してこれ丈けのことを實行し得たならば、社會は須臾にして面目を一新するであら

う。然るに現下の實際を見る時は、自己の利慾のためには如何なる他人の疾苦をも顧みないと云ふ有樣である。喫煙、飲酒、放蕩の如きも、若し人に迷惑をかけぬやうに心がけたならば、餘程改善されるであらう。若し人に迷惑をかけることならば肉食をも廢さうと云ふたのはバウロであつた。宗教家として斯くありたいものである。然るに日本の所謂紳士なるものは、旅行中でも家庭にありても、成るべく多くの人に迷惑をかけてゐる人々であるとは淺間しいことではあるまいか。紳士とは小事を忽せにしない人だとはアヂソンの告げる所である。これも頗る要を得た言葉である。粗野とは小事に不忠なる行爲をなすことである。それか自然他人の迷惑となり、自分の名折れとなるのである。所謂東洋流の豪傑は何處までも野蠻時代の遺物と見ねばならぬ。

學生青年がいやに尊大振りて無禮な行爲を敢てし、無暗矢鱈に場所を擇ばず喫煙し校友會や團體の公金杯を自己の口腹を滿すために使用するやうな向もありと聞くが、これは眞に不心得千萬である。これが將來の官僚政治や收賄事件の禍を藏して居るも

のである。彼等がもう少し善諸を重んじ、獨りを慎み、粗野輕佻の陋醜を戒むるにあらざれば、我國の前途は誠に憂ふべきことが多いと思ふ。それ故に予は新帝即位の大典を擧行さるゝに際し、我が國の氣品の一層高くなりて新時代の要求に應じ得ると同時に國民一般に紳士道の信者たらんことを希望するものである。

義は則ち君臣情は猶ほ父子

御即位大禮の當日紫宸殿の儀に於て賜りたる勅語の中に

爾臣民世々相繼ぎ忠實公に奉ず、義は即ち君臣にして情は猶ほ父子の如く、以て萬邦無比の國體を成せり

と仰せられてある。惟ふに國家の隆盛は單に憲法の條文に示めされたる義に依りて確保さるべきものでなく、實に父子の如き情が普ねく行はれることによりて始めて全ふせらるゝものである。

廣く知識を世界に求むることを以て何よりの急務と心得た明治時代は萬代不朽の幾多の偉績を遺した。舊來の陋習を破り大に開國進取の實を擧げ、三百年間の因襲に捉はれて居つた我國が茲に一大進轉を決行するに至つたのである。斯の如くにして明治時代に於て啓蒙の事業が着々として功を奏することが出來たのである。

知識を世界に求めて之れを與へられたる我が日本國は今や更らに一歩を進めねばならぬ時期に到着した。大正時代は單に知識の拾集を以て滿足すべきものではない。知識さへ充實すれば國家としても個人としても優に覇を天下に誇稱するに足ると思ふのは誤謬の甚しきものであることは今更ら云ふまでもない。苟も全人の完成を期し、國家の品位を高めやうとするには正義を楯とし、大道を踐み、更らに至清至愛の靈感に生きねばならぬ。

我が國はこれまでは專ら國家の外廓を構へ、骨組みを造り、設備百端に焦慮するに急にして、未だ十分に個人生活の興味を喚起し、靈性充實の本義に逆らんとする餘裕

が無かつたやうに思はれる。然るに今や大體に於て國家としても個人としても其求むる所を滿たし得たから、これからは進んで一層根本的なる人生至高の問題に着目すべき時期が來た。今迄は昏然朦朦たる鏡面の假相を偲ぶことに滿足したけれども、それからは更に明晰に更に徹底したる生活の本然に立ち歸らねばならぬ。

此時に當りて勅語に於て、情は猶ほ父子の如しと仰せられたのは頗る劃切なる事と信ずるのである。我等は此父子有情の精神が今後國家の公けなる機關の運轉は勿論のこと、此家族的恩愛が社會百般の機關に現はれ、此血肉的溫情が濃厚に各方面の活動に現はれ行くことが現代の新しき要求なりと信ずる。これによりて紛糾を極めんとする幾多の社會問題も個人問題も容易に解決さるゝことが出來ると思ふ。

現代の日本は道德的には非常の亂世である。斯かる道德上の元龜天正時代を脱して一日も早く本當に太平の御代を現實せしむることに努力するのが刻下の最も緊要なる問題である。斯くの如きは知識によるにあらず、法律によるにあらず、警察權による

にあらず、軍備と兵力とによるにあらず、全く公明正大なる愛の發動によるの外はない。それ故に明治初代の青年が開國進取の主義を以て知識を世界に求むることに努力したやうに、大正時代の青年は宜しく此道德上の亂世を鎭定せんがために大に愛の靈的使命を鼓吹すべきものと信ずる。

仕上げの時代

明治時代は荒削りの時代であつた。百事悉く革新され、舊物は惜氣もなく片端から見事に破壞されて仕舞つた。政治も宗教も法律も制度も風俗も皆んな新らしくしなければ止まなかつた。今から見て隨分無理だつたと思はれることまでも、臆面もなく一掃されて仕舞つた。價値ある寶物までも二束三文で露店に憂身を曝らすやうな仕末となつた。

併し萬事急造的であつて、基礎工事に力を入れることも忘れた向もあり、旁々して

一寸見ては立派でも、決して理想的のものではなかつた。外形丈けはどうにか出來たやうなものゝ、內容はお恥しいことである。特に始めの程は相當に偉大なる人物も居つて淸廉潔白の心事を以て要職に立つたけれども、中途にして變な僞物が時を得顏に振舞つて百弊併び生ずるやうな破目を見るに至つた。

國運の發展上止むを得ず手に取つた荒鉋は戰爭であつたが、職人の遣り過ごしで、大事な中味まで削づり落して、埋合はせがつかないやうになつた。臥薪嘗膽は戰爭前のみのことにあらず、戰後の經營こそ國民の一日も忽かせにす可らざる所である、然かも其實際は如何。又立憲政治と云ふ立派な織物の型を持つて來て其通り見事に織り出さんと試みたけれども、糸が古かつたり粗末であつたりして、一層想ふやうにならぬ。屢々糸が切れたり縺れたりして、容易に捗取らなかつた。殊に教育の普及と云ふことには大分骨折つたけれども、智慧は「禁止の果實」なることを忘れ、過食不消化のために豫期しなかつた不健全なる思想や腐敗せる道德を產出するやうなことに至つ

た。學問さへすれば人は賢明、且つ善良になるものだと信じて居つたのは、全く人間其物の性質の判斷を過つたからである。

形式許りの未製品を讓り受けたのは大正時代である。これを立派に仕上げるのが大正時代の任務である。仕上は荒削りと異り中々骨の折れることでもあり、時間もかゝることゝ思ふ。豪放な粗漫な遣口では到底物の用には立たぬ。之れは既に時代後れとなつた。入眼點睛の技は一層巧妙なる手腕を要するのは勿論である。併し若しこれが出來ぬとならば國家はみじめなものである。出來るまでは何十年かゝつても念入りに遣つて見ねばならぬ。いよいよこれが出來なくなればそれが亡國と云ふことになる。

近頃海軍廓淸事件や本願寺問題を始め、種々なる不快な問題が續出して來たのは、これまでの遣方では駄目だと云ふことが分明に證明されたので、寧ろ進步發展の途上止むを得ざることである。面白いことではないか、輿論は從來の如くに默して「臭い物に蓋をする」ことを深しとしなくなつた程健全になりつゝあるのである。輿論即ち

一般耳目が現實に不滿足を表して來たことは邦家の一進歩である。そこで滿足な仕上げをしやうとするには如何すべきか。これが問題である。

第一、戰時的軍備に傾注され來つた國力と人材とを平和文化の方面に移し來らねばならぬ。眞の偉大なる國家が少しく落付いて來る時期になれば、斯くするは理の當然である。平和の戰士の勇ましい活動振りは國家の威權を高むること決して尠くはない。彼の劍戟を携えて戰場に驅け參じ、凱旋して金鵄勳章を飾るは名譽の至りであらふが、今はさう云ふこと以上に卓越せねば國が持てぬ時代になつた。兒戯に類することに浮かされて居る間に國家の土臺が腐つて仕舞つてはならぬ。社會問題の名の下にはあらゆる近代の諸問題が含まれてあつて、いづれも有爲な青年チャムピオンの才幹を要求して止まぬ。つまり社會問題は國家の仕上げには遲かれ早かれ解決せねばならぬ問題である。うれしいことにはわれらの敬愛する友人達は早くも玆に着目して既に戰線に砲列を布いて居る。今後我黨の青年は續いて正義の戰に參加して欲しい。

第二、神なき自治政治は自殺政治なることを知らねばならぬ。明治の立憲政治はほんの御手習ひであつた。少しは字の格好は出來たやうなものゝ、いくら贔負目に見ても決して讃めたものではない。全體立憲政治は西洋から讓り受けた古いお手本と祖先傳來の禿筆のみで書けるものではない。これでは摸倣政治である。自治政治は信仰によりて新しく開拓し行く創造の政治でなければならぬ。斯くなつて見れば權威の本尊を神に求めるより外はない。凡て上にありて權を執る者は即ち其象徴表現である。彼等は神の意志を奉戴して政治を行ひ國民は常に選良をして之れを監視指導すると共に何時も其結果に對して責任を頒つ覺悟がなければならぬ。自治政治は神に倚れる民衆政治なる意義を全うする時始めて理想に達することが出來る。有爲の青年は大に憲政時代の政治家として信仰ある人格を造り上げねばならぬ。

第三、宗教と教育とは互に反感情を捨てゝ融和せねばならぬ。一木新文相の教育方針の一節の宗教に關する條下に不心得な宗教家は取締らねばならぬ云々と云ふことを

告げてそれ以外餘り多くを云ふてない。世にさう云ふ宗教もあらふ。併し地方官でも大臣でも信仰せねば一日も自已に忠なる能はざる敬神愛人の宗教もある。爲政者も教育家も宜しく自ら兜を脱いで降參せねばならぬ。それを今以て宗教が分らぬやうではいかで今後の子弟を健全に造り上げて行けやう。宗教とは萬物の生命である。直に生きんことを欲する者は必らずや何かの形式に於て此生命に一脉の關係を有せすむば止まぬ。これは人生の自然である。舊來の偏見狹量に加ふるに性來の放縱生活を棄てゝ眞に子弟の全人の教化を念とせねばならぬ。

戰時に於ける英國の少年義勇團

一

日本の御役人達は西洋の基督教青年會の眞似をして田舍に澤山に青年會を製造しました。村の若い衆は公共事業とやらのために御規則づくに働くやうになりました。併

し生きて居るべき筈の若い衆が古い郡長さんや村長の御先きに使はれて摸範村呼ばりの虚名に隨喜の涙を流してるやうでは御氣の毒と申すより外はありません。所がこれにも懲りずに近頃は又舶來物の摸造品の製造に多忙な古手の軍人や、市會議員などが出來て來ました。私は日本の青年團にジョージ・ウエリヤム、ジョン・モラトの熱誠靈感なく、又近頃流行の少年義勇團にバーデン・パウエルの氣魂があらうとも思はれません。私共の考へでは少年義勇團の如きものは餘り意味もなく飜譯的に模倣するのは一種の滑稽としか思はれません。最も大事な中心的生命がなくして單に其制度組織などを移殖して見ても、到底甘く行く筈はないと思ひます。寧ろ目下の處では小中學校の體操科の意義を十分に承認し其應用活用の範圍を擴張した方が遙かに有益だと思ひます。故森文部大臣の創設にかゝる學校教育に於ける兵式體操が、今は單に武裝行列の餘興となつて仕舞つたのは誠に殘念なことです。私は教育者と有志家が寧ろ此方面に意を注いだ方が適當かと思ひます。

二

何は兎もあれ私は茲に標題の如き內容に就いて一言申し述べて、讀者諸君の御參考に供しやうと思ひます。ローズベリー卿は嘗つて申したことがあります。『若し予が國のために最高の理想を掲げ得べしと假定すれば、其國民が悉くボーイ、スカウトの主義に基づきて訓練されたものでなければならぬ。蓋し斯かる國民は人類の名譽であり又世界中最大の道德的勢力となるであらう』。これが英國に此運動が得た高き信任です。曩きにサー、ロバート、バーデンパウエルが南阿戰爭に參加し、メーフキングの包圍攻擊を受けた時、計らずも少年有志團を指揮しこれを偵察任務に當らしめて意外の功績を擧げたのが端緒となりて、歸國の後ち英本國に於て之れを創始したのです。此の團體には九ケ條の大切な憲法がありますが、つまり其要契は神を愛し王を尊び、國を愛しこれがためには何事をも辭せざる覺悟を養ひ、虛言と不名譽な行爲を避け、義氣に勇み、有用なる目的のために手と眼と智識とを用ひ、これによりて將來大帝國

の市民たるに適はしき人物となる訓練を早くから施すと云ふのです。役に立つと云ふことは全體の中心主義でありまして、此團體の訓練を受けた者は實際生活の大學を卒業した丈けの價値があるのです。第一に團員は堅忍不拔の精神を養ひ、機敏熟練の氣象を育つるために人格の訓練を致します。それから獨立自主の實行を奮勵し、次に緊急非常の際に臨機應變の手段を以て他人を助くることを敎授されます。それですから料理や伐木のことより溺死者變死者の蘇生法取扱法に至るまで、或は水陸の測量より無線電信電話、飛行機等に至るまで、練習を受け且つ之れを應用するのです。

三

斯かる少年團體を戰時に使用して見たら面白いことがらあうと發議したのはキチナー卿で、バーデンパウエル將軍は早速之れに應じて一種の動員令を發したのはつひ最近のことです。所が一週間の中に倫敦區域丈けにて二萬二千人の出師準備が出來ました。そして彼等のなすべき任務は大約左の通りです。

住民に告示を傳達すること及び宿割、徴發、警告等に關する事項
傳令、信號、無線電信等によりて通信すること
橋梁、排水渠電線等を巡察して間諜の破壞を防禦すること
給養、輸送等を機敏ならしむるやう情報を求むること
住民の間に組織立ちたる救濟法を講ずること
國防任務に從事せる人或は傷病者の家族を救助すること
海岸にありて河口港灣に於ける船舶の出入を監視し、海岸救難隊を助力する等其他
必要の任務に服すること

以上は單に軍國時代に於ける實際任務の一部に過ぎません。其他其地方や境遇に適する種々なる特別任務は凡て地方官憲と相談の上行ふことになつて居ます。

例へば今日到る處に活動して居るのは自轉車隊です。先つこれが編入許可證を得るまでには技術と修繕法の檢査を受け、堅牢なる一臺の自轉車を所持して居ることが必

要です。そして事あれば何時如何なる場合でも王のために奉仕せんとの覺悟を要します。特に受けた命令を逐字的に繰り廻へし、地圖の讀み方に達し、迷宮のやうなロンドン市街に通曉して居る必要があります。

次に道案内の徽章を有する團員です。此徽章を得るには、少年は其地方の本營の周圍二哩以内の徑路や小道を悉く諳んじ、晝夜を論ぜず外來人を誤りなく案内することが出來なければなりません。又地力の團員に二哩四方の民家や田畑の所有者や廣表を知り、特に病院、停車場、郵便、電信局、消防器、鐵工場、製造所、警察署等の所在地を知らねばなりません。

それでいよ〳〵二萬二千の應募者を召集し、これに種々なる特別任務に服せしむることになるや、第一に使用希望を申込んだのは英國皇太子で（皇太子はウエールスの團長です）自轉車隊員の援助を求めました。次に郵遞總監は電信部補助のために六十人の自轉車隊を要求し、他の公共團體は一週間繼續して働き得る百名の自轉車隊を要

求して來ました。十人の團員は飛行機製造所に行きて夜間監視に服することになりました。其他陸軍省、海軍省、諸種の官衙にありては少年團は大人の群に交はりて恰も二十日鼠のやうに機敏に働いて居ます。

海軍救難隊に援助して好評嘖々たるものは海上義勇團と稱する一部です。其首領は海軍大將ペレスフォード卿で海岸監視に從事して居ります。到る處の岬、入江、港灣には眼の鋭い少年が電信機を携帶して海岸事故の通信に從事して居ります。海身省は特に千二百人の海上義勇團を徴發し此種の任務に從事し、バーデンパウエル將軍は自ら東海岸の仕事の監督をして居ります。

以上はほんの大體の御話でありますけれども、國家の危機に遭遇して少年には如何にも少年らしき働きをやつて居る樣子が髣髴するであらうと思ひます。これらの少年は悉く小學校卒業後の者で、多くは種々なる事情から未だ職業のない者丈けです。給料としては一日一シルリングから二シル六ペンスまでです。そして其の任期は戰爭時

期の間丈けとなつて居ます。

四

善種を沃地に播く程驚くべきことはありません。快活な活潑な少年の投げ捨てられて居つたのを集め來つて之を利用すれば、實に驚くべき好結果を見るに至つたのです。バーデンパウエル將軍が年甲斐なく餓鬼大將を氣取つて何をするんだと怪んだのは六年以前のことでした。然るに少年心理の樞機を握つて甘く之れを廻轉した所が瞬く間に英國全土の華となり、延いて歐米諸國に偏ねく行はるゝに至りました。一人の佛國の少年團員は獨逸兵の捕虜となり、自國兵の埋伏せることを白狀しないので射殺されました。此美談は英國に傳はつて一方ならぬ奮勵となりました。其死刑の模樣を記した一節に斯ふ云ふて居ります。『彼は平時と變らぬ歩調を以て電信柱に進み行き、綠滴る葡萄園を背景としてこれに身を倚せ、そして莞爾として射擊兵の一齊射擊を受けた』。此佛國少年の名は何と云ふたか、其場所は何處であつたが、殘念ながら明かにな

つて居りませんが、茲に少年義勇團の規律ある鍛練が遺憾なく發揮されてるではありませんか。斯かる無名の少年英雄が多くあれば、これに勝れる其國の寶はありません。唯我子の勇ましき死を聞いた母親は坊は出來かしたと喜びましたらうか。感謝の涙にむせびましたらうか。又或る人は申しました『若しボーイスカウトが戰爭となる八年前にベルジュムに出來て居つたならば今日ベルジュムに取つて一層幸福であつたらうが』。兎も角男は遲かれ早かれ公けの犧牲とならねばなりません。

五

少年時代は元氣があり餘まつて、どうして之れを用ひて善いか窮して居るのです。一寸でもじつとして居れないから何か爲ねば堪らない。丸で乾ききつた枯草のやうなもので、少しでも火の氣に觸れゝば盛んに燃えます。彈藥のやうに甘く之れを鐵砲の中に込めて發火すれば彈丸を運んで行つて、大なる破壞力を示めすのです。つまり此元氣を利用する指導者があればよいのです。理屈でない、寧ろ意氣に投ずればどんな

にでも動くのです。それで或人がバーデンパウエル將軍に向つて『貴下はどうして彼等の腕白小僧をあれ程善く操縱して大人も及ばない功績を擧げたのか』と尋ねた時、將軍は微笑を洩らして云ふのには『それは別に大しい譯はありません。まあおだてたんです（Well. I encouraged them）。此おだてると云ふこと、即ち奬勵と云ふことは統率の心理に於て最も大切な個條です。靈感とか神興とか云ふものが何時も自分獨りで胸中に溢れて居れば、其人は天才でせう。併し我等御互ひは度々おだてゝ貰ふ必要があります。基督は善く此秘契を知つて居ました。其證據には眞面目に基督に奬勵して貰へる人程幸福な人はありません。神樣は時々私共をはげましてやらうと考へて居らるゝに相違ありません。私共は此意味でも何時も少年でなければなりません。

子供の世界

草は雨に延び、花は風に綻び、雲雀は空に囀り、柳は霞に目覺めました。五月の天

地はどう見ても美はしく、氣も暢び〳〵します。小供達は日光を浴びて自由快活なる活動の衢にむれ集ふて居ります。

小供に考へる力はどれ程あるかは分りませんが、活動の力は何時も溢れて居ります。丁度水を一杯盛つたコップが、少しでも動けばこぼれるやうに小供の頭に何か衝動を與へれば直ちに活動せずには居られません。

特に幼兒は自分の周圍にある物品を自由に弄んで盛んに自己の教育をやつて居ります。若し茶碗を持つならば、其形狀や、重量や、色彩模樣などを研究しますが、時には之れを破つて、其硬度の試驗をも致します。自分の小さき努力によつて容易に効果の現はれるものは、殊更らにうれしく思ひます。それ故に障子の紙を破つて穴を明けてはこれまで見えなかつた庭園を透見して非常に興味を感じて居ります。又これを破つて物の音響を練習し、覺えず歡喜の聲を發します。

活動の結果は生長發展と云ふことです。小供が日毎に「智慧も力もいや勝り」行く

のを見る程愉快なことはありません。筍が柔かな土壤を破つて躍り出づる如くに、子供は大きくなる外に何の仕事も義務もないやうに、朝よりも晩の方が大きくなります。身體は延び、智識も增し加はり、精神も發展して行きます。そして何時の間にか其子供に獨特な格の萠芽が出來て來るのです。斯くて天上天下唯一人と云ふ權威が與へられるのです。此の權威を蹂躙する者は親でも誰でも天罰を受けずには居られません。

往昔埃及の暴君は獨太人の幼き男の子を悉く殺すやうに命じたことがありました。又基督の生れた時に、ヘロデ王は界隈にある當歳の子供を悉く殺したと云ふ傳說があります。子供を殺すのは一國を滅ぼし、一民族を斷つのです。ペスタロッヂ、フレーベル、モンテスソリー及び多數の敎育者は名譽と富貴とを捨てゝ子供の愛育に從事しました。これ一國を救ひ、一代を淨むるに最も快適な、最も賢明な方法でした。

陽春五月は子供の天下です。今や大乾坤は一大樂園となつて其遊ぶが儘に任ぜられ

てあります。心ゆく許りのピクニックを行はして見て、汚れ易い俗世界をば嬉々たる舞踏の庭となし、悟々たる散歩の場所と化して見たいと思ひます。我等彼等の上に神恩天のマナの如くに降り注がんことを祈るものであります。

少年期の修養

古來我國にありては五月を以て男の子の祝福を祈る習慣がある。それ故に我等は茲に更に少年時代に溯り、親しく其特徴と意義と修養とを考へて見やうと思ふ。

一

少年時代とは人生の蕾の時代である。未だ花咲かず未だ香り高からず、將來大に延びんとして日夜に春の日の來らんために準備しつゝある時代である。年齢から云はゞ十二三歳から十六七歳までの腕白時代を指すのである。云はゞ人生の重荷もなければ責任も感ぜぬ、極めて輕快な無邪氣な時代である。何と云ふことなしに、心美はしく

言葉に得言はねど、何處までも延びやかに生長する時代である。流れ行く小川に棹して行くともなしに降り行く有樣は唯夢の如くに美はしく、蜻蛉の如くに輕妙である。

少年時代には何等負はされた人生の課業はない。若しそれありとすれば、全く自然に生長すると云ふことあるのみである。唯それ何等の作爲なく苦心なくして若草の如くに延び行く丈けである。素直に延び行けば、それで凡ての期待は果されるのである。若し此時代に強ひて小さな愛國者を作り、若き親孝行を造らんとすれば、それは却つて虚僞を構ふることになる。彼の使命は單に無邪氣に自然に生長すればそれでよろしい。現代の教育が古き頭に宿れる型を以て、餘りに早く彼等を律しやうとするが故に、若き生命に早くも憂慾と懊惱との黑い影が出來て來る。修身と作法の教授は單に自然に發する生命の規律を整頓し行く丈けであれば宜しいけれども、若し此自然性に違行して、古い形式の道德を鼓吹しやうとするに於ては、それは少年の禍ひとなる。

其若き生命は萎縮するの恐れがある。僅に多少の注意を拂ひて他は悉く放任して置けば、所詮融々として延び行くであらう。

例のエレン、ケイ女史も『子供の世紀』に於て子供は其性質の儘に自由に發達せしめよと云うて居る。そして子供の樂天地は日本である。日本では子供を大切にし、我儕を寛容する。從つて子供は自由に活動し、樂しく嬉戯すると云ふて居る。併し若し小學校の修身の教科書を見、作法教授を見る時は、我等は尠からず失望させられる。子供等には果して自由の活動が許されて居るか。餘りに獨斷的な國家的教義を押しつけられて、早やく思想の自由が拘束されてることはないか。家庭に行つて見ても其生活は穴居時代の遺風を面のあたり見るが如く、疊の上に蝦蟇のやうにして居らねばならぬ。早やく行儀法に習熟し、大人の眞似をすればおとなしい子として、頗る好評を博する。特に子供の着物は絶對的に活動の出來ないやうに出來たもので、脚部の運動は非常に妨害されるのである。女の子に至つては殆んど御話しにならぬ。巖谷小波さ

んが彼等少年兒童の精神生活に濃厚なる色彩を添え、其趣味を發達させたことは感謝するに餘りある。若し此上に彼等の服裝其他に於て、十分彼等の身體の發達を遺憾なからしむる工夫をして呉れる人があらば、これは甚だ喜ばしいことゝ思つて居る。如何にせん。今日一般の日本家庭の經濟其他の事情は意の儘にならないのであるせめて世の思慮ある親達に對して、少年男女は靈肉共に健全に生長さへすれば、それでよろしいと云ふ眞理を十分徹底するやうに、理解せしめたいものであります。少年イエスは『智慧も力もいや勝り、神と人とに益々愛せられたり』とあるは深く味ふべきことである。

二

少年は生長する目的を果さんために盛んに活動し運動せねば止まぬ。品行方正學力優等と云ふ評語を以て彼等の理想とするのは、必らずしも彼等の爲めに計りて、忠なるものではない。勿論品行不正學力劣等なるは宜しくない。然れども活動盛んなる時

代に、餘りに箱庭の苦蒸す處に入れては、時には苦も踏みつけねばならぬ、狹き餘地でボールを飛ばせば硝子窓にも當る。彼等は無邪氣に運動して居れば、彼等に對する凡ての問題は、頗る容易に解決されるのである。

米國の大都會にありては、運動場建設委員と云ふものがあつて、盛んに小規模の運動場を設計する。この企圖の實施以來不良少年は著しく減少しつゝあると云ふ統計上の結果が現はれた。紐育市の警察官は小運動場と公園の設置以來其界隈に住居する少年の犯罪行爲は無くなつたと報告して居る。シカゴの南區にありては此方法を二年間實施した後、全市に渉りて一割七分の犯罪減少を見るに至つた。更らに顯著なるはセントルイスであつて、夏期にありて運動場が終日開放されて居る間は、少年犯罪者の數が五割減少した。つまり貧民窟は少年犯罪者の養成所で、これに對して所謂教育機關が完備して居る。活動寫眞の如きは特に彼等に旺盛なる冒險的精神をそゝのかして居る。

少年の活動的精神を最も善く利用したのは、少年義勇團である。英國の少年義勇團はバーデン・パウエル將軍の創意になり、滿十二歳より十八歳の少年に平常人に仕ふる道を敎へる團體である。『其憲法の第三條には團員の義務は有用にして他を助くること なり』とありて、「一日中に必らず他人のために一善をなすべし」と規定してある。又第八條には『團員は如何なる境遇にありても常に微笑を洩らし、口笛を吹くべし』とある。即ち常に快活なる面貌と樂天的思想とを鼓吹して居る。日本では此れの眞似をしてやつて居る人もあるけれども、『少年軍人の素地を作らん許りで、全く窮屈な贅澤な形式に抱泥し、日曜日まで平氣に召集して居る。今日の日本の小學校のやうに終日課業に追はれてる兒童をば、それ以上ハンデキャップをつけるのは苛酷である。兒童心理に盲目な遣り方である。

少年時代は我等の所謂徒渉時代である。未だ脚下が底に屆いて居る。硝子屑や危險物の無いやうにし自由に淺瀨に活動せしむれば、決して不安なことはない。單に虛言

をつかぬ事、無用の迷惑を人にかけぬ丈けのことを守らしむれば、後は凡て放任してよいと思ふ。但し今日の日本の社會は甚だ不完全である。さらぬだに惡に陷り易き人間の性質を顧みないで、出來る丈けこれを誘惑しやうとかゝつて居る。就中所謂上流社會には萬種の不良老人なる特種部落ありて、著しく社會に毒流を注いで居る。又當局者も種々の御都合からして、彼等のために態々市の一部を裂いて、肉慾耽溺所を經營して居る。若しそれ丈けの親切氣があるなら、其代りに何故に少年のために市設運動場を設計しないのであるかを疑ふ。こんな荆蒭の多い。腐敗した社會では到底健全なる少年の養はれやう筈がない。此點に於てわれらは我黨の人々の一層の考慮を願はねばならぬ。

三

今日に於て少年の健全なる發達を望む者は、必らず學校生活を考へざるを得ない。學校生活は少年のために設けられたる最も快適なる社會生活である。實社會はつめた

いけれども、學校は暖い。街衢の人は無情であるけれども、學友は何時も親切である。此間に於て活動の子等は最も安全に、最も愉快に遊び且つ學ぶことが出來る。若い心に播きつけられた種子は迅速に發生する。而して良き地に播かれた種子の如く、將來三十倍六十倍、百倍の果實を結ぶことは請合ひである。日光は校庭を隈なく照し、友情は春風の如くに吹き通ふ。人生の瀨踐みは斯くの如くにして敎へられるのである。

若し彼等を家庭丈けに籠城せしめたならば、決して將來の男らしい活動は出來やうもない。蝌斗を其儘に水中に放ち置きて、陸上に擧げなければ、依然として鰓丈けが活動する。到底肺臟の動きが始らない。少年も學校に於て多數の中に混じり居る間に、色々なる自分の能力を發揮する不知不識彼等は競爭して居る間に男子の魂が育ち行くのである。同じ鴨でもこれを手飼ひにすれば、身體は大きくなつても其腦髓は餘り發達しない。これに反して、野にある鴨は必要上腦髓が大に發達する。これは常に危險に對して、自己防衛の必要のために、鳥ながらも其腦漿を絞るからである。斯くの如

くにして幾多の教育上の原理が彼等の上に應用されて、彼等が次第に發達し行くことは誠に快心の至りである。

併し茲に注意すべきことは、彼等の餘り多數なるために、個性に對する注意の行き屆かないことである。今日のやうに六十人七十人の兒童を一所に集めて、其個性に應じて教育せよと云ふのは、註文する者が無理である。姓名を覺える丈けでも一仕事である。自然『並みの子供』を標準として型を造るのは止むを得ないことである。しかし實際此型と云ふものは、丁度靴屋店頭の靴のやうに、何人の足に合はした譯けでもない。唯一定のきまりで造つたのみである、偶々これが誰れの足にも當てはまると思ふのは胡摩化しである。出來ることなら子供の足を痛めない程度にこれが這入らねばならぬ。今日のやうに劃一主義の教育法のためにどれ程兒童の足と云はず、手や頭が傷はれて居るかは、必らずしも樂觀を許さない。

特に今日の學校教育に於て、最も憂ふべきことは、教師一般が智識に於ても人格に

於ても思ひの外低級なることである。これは國家の施設が國民教育を遇すること未だ薄きに失するがためである。才能秀でたる青年教育者が一生を棒に振つて、國民教育に從事するのはどうしても惜しいやうな氣がする。自然社會の劣敗者が餘生をこゝに託するやうな事になる。或は暫らくの腰掛けにこれを供する。加之彼等はやゝもすれば、因襲久しき形式的國家思想に捕はれ、兒童心靈の價値を悟ることなく、事毎に小なる偏見によりて律せられて居る。それ故に自己の地位を學校の組織などに重きを置き、案外兒童心靈の福祉を輕んずることが多い。融通のきかない頭腦を以て教育的迷信を。若き心靈に强ひんとするのを見る時、我等は國家の前途のために戰慄せしこと果して幾度ぞ。希くは當局者は今少しく這般の消息に公明なる判斷を下して若き心靈を飢渴に陷らしめざるやうにして欲しいものである。

併し學窓の下にある少年は多幸である改善すべき餘地多しと雖、學校以外に彼等を教養すべきそれ以上の設備はないのである。彼等は此意味に於て、何處までも職を教

育の任に奉ずる士君子の自重を祈らねばならぬ。彼等の心靈がペスタロッヂやフローベルの如き靈感に滿され神を忘れぬ愛の教育を行ふやうに至らしめん事は、我等の滿腔の祈願である。

黎明期の修養

一

古人の歌うた如く、『世の中は三日見ぬ間の櫻かな』である。嚴寒去りもやらず、陽春未だ來るをためらひつゝある時、早くも落花狼藉の衢を想ふは聊か早計である。されど枝頭既に何物かの搖動しつゝあるを見る時、われらは其處に春の艶麗と其裏に隱れた憂愁とを偲ばざるを得ないのである。花植ゑし人の心は知らねども、花見る人の心せわしき、まだ咲かぬとあげつらうも束の間にて、花の顏今見んと、思ふ心の果さぬ間に、早くも花は雨にうつろひ風に散るのである。

されどこれにも勝りて變化の多いのは、青年期の變化である。昨日まで頑是なき小供と見し者は。今日は早やくも丈高らかに骨逞しくなり、理想にあこがれ戀に惱み、文藝に志し功名心に燃える。一たび智慧の實を味うては、矢も楯もたまらず、內容の充實を叫び、或は生の悲哀を歎き、或は生の歡樂を歌ふ。斯くの如くにして蕾は瞬刻にして去り、燎爛の春は殺到し來るのである。

二

黎明期はロマンスの時代である、永劫の青春をさながらに花挿しにして理想の衢に行かんとするのである。瑞光祥雲わが左右に侍べり、僅かに一歩にして希望に達し得ると思ふのである。思想の花と感情の花とは綾なす姿に咲き亂れて居る。此時に當りて思想も浮ばず、感情も溢れずば、其人は末賴母しからぬ貧弱な青年である。マルコニーが無線電信機の發見端緒を聞いたのは、未だボロニヤ大學の一學生であつた時である。ラヂウムの發見に志したキユーリーは若き青年であつた。細菌學の恩人パスト

ールの畢生の偉業は多くは青年時代に於ける豐富なる想像力の所產であつた。種々なる文明の利器を殆んど一手で引受けたやうな發明の天才エヂソンも、悉く若い時の『思ひつき』のまに〳〵造り上げた記念である。ロマンチックな心の花は斯くの如くにして先人未到の地を開拓しては、其足跡を遺して行く。此意味に於てプラートの『詩歌は歷史よりも活ける眞理に近し』と云ふ言葉を採るものである。エマーソンは「一の貴重すべき暗示をも持たぬ學術的系統よりも、寧ろ眞理の閃光を有する不完全なる學說や文章を選ぶ」と云ふたのも首肯される。世は古くなつても、青春の思想感情思索發明は何時も瀕瘁せる生に新しき靈力を與へるのである。

三

櫻の花は散つて仕舞へば、それで其天賦の仕事は濟んだ譯である。しかし青春の思想感情は其儘に消え失せては惜しいものである。理想と想像は多くの偉人にありては、貴き力ある豫言であつた。彼等は此豫言を實現し得たから人生の金冠を戴くことが出來た。櫻の花は風に散つてもよい。しかし、君の理想をいつくしみ、君の靈感を冷ます勿れ。よしやこれを三十四十にして實現し得ずとも、一生の間には何時かは少しなりとも實現せでは止まぬ筈の者である。これを以て青年時代が人生一代の準備時代となるのである。われらは刹那に意義を見出し、刹那に生活せねばならぬと同時に永遠に生き、永劫に成さんとする希望と努力とを缺いてはならぬ。夢の如き過去と暗の如き未來との間に一閃光を照したる現在を尊ぶと共に過去と未來とを抹殺し去つてはならぬ。因果の理法は今も昔も依然として不滅である。君よ青春の花を惜め、されどこれを眺めて酒に醉ふ勿れ、血を淨め、肉を穢す勿れ。罪は赦されても、罰は永く身に殘るからである。

四

青年時代のロマンスを重んじ、これが實現に心を傾けると共に新しき自我の誕生を迎えねばならぬ。われらは一度は母の胎內から新世に躍り出でた。しかしわれらは今

一度自覺せる靈我の誕生を必要とする。青蟲毛蟲でも、春に至りて一大變化をして胡蝶となる。青春期に於てかゝる心靈的變化を經驗することなくして浮世の潮を踏む者は、禍ひである。彼は人生の淺瀨を徒渉する者にして、遂に風を孕まして快舟を遣るの心を知らない。予昨夏南洋の新領土に遊び、大蜥蜴を携え歸り、これを動物園に託して置いた。秋將に闌ならんとする時、其脱皮の時期が來た。惜しい哉。冷氣身に滲みて遂に斃れて仕舞つた。傳道者は云ふ、『天が下の萬の事には期あり、生るゝに時あり、死ぬるに時あり、植るに時あり、拔くに時あり、泣くに時あり、笑ふに時あり、悲むに時あり、躍るに時あり。』人生其時を得ざれば多く敗亡を遁るゝことは出來ない。青年は暗いけれども社會は冷いものである。學窓は日がさすけれども、活動の衢には風が吹き荒ぶ。靈的脱皮はこれを今にして試みることなければ、遂に不慮の禍ひにも斃死せねばならぬ。われらは玆に宗教を信じて教會に加入せよと云ふのではない。われらは人生の根柢を据え付けるがために、靈我の誕生日を迎えよと云ふのである。

五

青春の思想感情を重んじ、次に靈我の誕生を迎え、更らに進んでわれらは自己創造の力を有たねばならぬ。若し人間が諸種の動物と異る所あるならば、それは確かに自己創造と云ふ靈力である。われらは自然界の法則を左右することは出來ない。宇宙の運行はわれらの範圍以外に屬する。しかしわれらは志すに從ひて、自分の力量、才幹、信念、思想、愛情等を形造ることが出來る。人格の建設は自分以外には何人にも依賴することは出來ない凡ての藝術品は他より與へられても、これ丈けは自分で努力する外はない。それ故に自分に取りてはこれ程美はしい製作品はない。しかもこれがためには、どれ程人知れぬ苦心を要するか分らない。特に卑しき氣儘な我の姿のやうに此製作の邪魔になるものがない。ラフアエルは畫筆を揮うて居る間、自分の影が畫布の面に落ちないやうに、紙製帽子に蠟燭をつけて被つて居つたと云ふことである。克己精進の蠟燭を頭上に照らすことは極めて必要なことである。自己創造と克己と云ふ

ものは仇敵ではない。克己の皮殼に獨創の我が眞珠のやうに包まれるのである。中世時代の隱者のやうに、克己を美術化してはならぬ。皮殼を料理しても滋養にはならぬ。克己は手段である。されど皮殼の間に裏まれぬ眞珠はなかつた。克己なきところ獨創の我の完成はない。われらは自己創造の威力を發揮し、大に我と云ふ藝術品を造らんために深く此一事を念とせねばならぬ。

六

流動體の如き思想感情を具體化し、氣體の如き理想、理想を固體化し、また夢の如き閃光を實現して、大に自己創造の偉業を完成しやうとするには、意志の力がなければならぬ。流動の水は冷却して氷となる。醗酵せるものは時に至りて芳醇の美酒となる。美はしき青春の花は意志の働きを俟つて人格の實を結ぶのである。上品な家庭に生れたる才人が初志を貫くことが出來ずに、中途にして浮草の生を託するに至ることは、其例甚だ尠くない。彼等は其始めや鷹の如くに飛び來り、其終りや蝸子を潰した

やうな悲慘事を現出する。『浮草』の主人公ルヂンのやうな才情の煥發と、見果てぬ夢の戀と、果々たる好果に枝もたわゝな弱さとは斯かる青年の姿である彼は何時も熱心に主張しながら、自ら結論を求めんとすることなく、また之れを實現しやうとする氣合がない。彼は何時も最後の一歩に於て躊躇するのである。染屋のやうに新しい鮮やかな色彩を以て染めなすことが出來ても、織物屋のやうに縱糸を入れて、立派な模樣を織りなすことが出來ない。『花が咲いても實を結ばない。

勿論これでも花としての價値はある。テニソンの詩にあるやうに愛したこともなかつたよりは、これを失うてもやはり一度は愛したことのある方が勝つて居る。兎も角花が咲いたと云ふ經驗があれば、人生のインテンシティに一きわ深さと香りを添えることは疑ふべきではない。斯かる人は死として終りを全くするよりも、寧ろ玉となつて碎けた方が其天分であらう。ゲートがハムレットを評した言葉の中に大きくなる槲樹を鉢植えにすれば、早晩鉢が破れない譯けにはいかぬと云ふことがある。これが多

くの詩人肌の人に見る所で、彼等は情感の豊かであつた割合に、意志の力に缺くる所あつたために、斯かる無結果に終るのである。『人各々天分ありて、完全なる性格はないから、花と散るも、果を結ぶも容易に難ずべきことではないが、男子と云はず、女子と云はず、有らまほしきは意志の威力である。これ人の本懐である。

七

鐵は鍛錬すれば鋼鐵となる。意志も鍛錬せねば用をなさぬ。人生歌の如く流れ行く時、何人もこれを喜ぶことが出來る。しかし一度萬事意の如くならざるや、懊惱百端憂愁暗澹ならざる者果して幾人ありや、斯かる時猶も微笑禁ずる能はず、仰いで天日を感謝する人こそ、慕はしくも尊いのである。意志は斯かる時に其威力を發揮し、且ついよ〳〵其研度を加へるものである。特に凡ての青年の書齋に訪づる寂寥の鍛錬は其冷氣が時々零度以下に降り行くことがある。ファウストも此寂寥の化身に見舞はれて歡樂の街に肉の温みに觸れた。幾多の青年は肉の温かみによりて、暫しの歡を買ふ

けれども後のつらさと苦みを如何にすべき。鳥は塒に歸る時、若き人は夜の暗きに出て行く。そして一瞬の妥協が永遠の悔恨となるのである。斯かる時、心機一轉して向上の一路を辿り、進んで神の聖靈の袖にすがり得る者は幸ひである。ランドル曰く、『寂寞は神の控室である。一歩を進むれば神の御前に侍べるのである』。われらも傳道者と同じく、『汝の少き日に汝の造主をおぼえよ』『神を畏れその誡命を守れ』これは萬人の本分たりと言はねばならぬ。これ最も大なる積極的なる靈の鍛錬である。

青春論

一

陽春四月櫻花正に爛漫たる時、我等筆を驅つて青春を論ずるは、これを謳歌せんためなり。青春の美を傳へて、人生不斷の若やぎの馨香を慕はんとてなり。永劫の姿にあこがれて、日星の進轉と共に永遠の生命を追ひ求めんがためなり。

麗かに咲く花の香ほり、青空高く啼く雲雀、朧ろにけぶる月の影、いづれか春の姿ならざる。青草は離々として延び、柳葉は千條萬條と亂れもつれ、禽鳥羽毛を新にして美裝整ひ、若き人は戀の甘きに歡び且憂ふも、みなこれ春の心なり。

青春美は天眞の直觀美なり。例へばこれを肉體美に就いて見よ。青春の皮膚を見る時、我等は其天鵝絨よりも美はしく、絹布よりも柔かに心地よく、讃嘆よりも强靱に綱鐵にも勝りて耐久性を有し、雪も、大理石も、乳香も、象牙も、乳酪もこれに比ぶべきにあらざるを知らん。『其唇は紅ひの線維の如く、その口は美はし。其頰は面帕の後にありて柘榴の半片に似たり。あゝ春風よ起れ、南風よ來れ、花園を吹きてその香氣を揚げよ。』

二

肉體美にも勝りて美はしさは心靈美なり。純潔なる心靈は其受くる清高なる天命悅服するによりて向上し、一刻も貴からんと努む。斯かる心靈は常に美と光明とを滋養

物となし、希望と歡喜とを樂む。必らずしも他を感化せんとせざれども、美なる心靈は恰も燈明臺が海面に漂ふ船舶を凡て引き寄するが如く、凡ての人を近かしむ。若き心靈の如何にしても許容し得ざるものあり、そは强ひて醜なる行爲、言語、思想を示めされ、無理にこれと關係させらるゝことなり、心靈は決してこれを許すこと能はず、これ其純潔を穢すことゝなればなり、かゝる心靈は其内に攝取したるものを變じて悉く美なるものとなす魔力を有す。心靈にして此靈妙なる働きを爲さゞれば生存の理由なく、心靈の働き絶えて止むことなくば、これによりて一切のものは悉く美化さるゝを得べし。我等の犯せる不義の行爲。われらが流させたる苦がき涙これらもやがて、心靈にありて慕はしき光明、溫かき愛情とはなるなり。『人生の一擧一動は早晩其外殼を脱離して其鮮美なる光明、われらの心中より放射するを見ては、眼爲めにまばゆきを覺ふることならん。』

肉體美は青春の外的象徵なり。暫らく開きて散り行く花の姿なり。心靈こそは其な

ことの姿なり。人の悲むべきは老いにあらず。老いて青春を忘れ、頑となりて枯稿凋落を示めすことなり。昔時、テソーナスと呼べる美少年ありき。曙の女神オーロラに愛せられ、天上に登りて不朽の生を得たり。然るに年去り年來る程に、紅顔の人は何時しか白髪となりぬ。嘆じて曰く『あゝわれ生を厭ふ、希くは早く老骸を捨てゝ白骨と化せん』とこれ徒らに長壽を願ふて、心靈の發展を忘れたる者の歎聲なり。

三

我等の欲する所は久遠の青春なり。永却の若やぎは永生に入る第一歩なり。偏固を去り、執着を去り、頑陋を遠けて、常に快活暢達ならば、よく永く青春の美を全ふすることを得ん。古今幾千萬の人多くは身未だ衰えざるに早く心老い、氣倦む。生未だ半ばならずして、既に發露進轉を中止し、或は富に捉はれ、或は位に安んじ、或は名に滅ぶ。斯くて自ら老大者となりて若き者の障害となり、これが仇敵とならんとす僅かなる立身出世によりて却つて人物の下落を見るは誠に憐むに堪たり。何時しか自己

退隱の皮殼を造りて、進歩派を破壞者と罵り、理想家を狂人となつけて、永く自ら社會の落伍者となれることを知らざるなり。世の教育者、宗教家にして殊の外斯種の人の多きは邦家の恨事なり。

大人は老いて小兒の心を失はず。斯かる人は年老いても心老いざればなり。これ偉人の偉大なる所以なり。彼れに創造、自發の生命あり。恰かも畫家が名畫を盡かんと欲し、樂人が靈音を發せんと欲し、これがために永久老いず、年老いてもこれを知らざるが如し。其心常に創造的にして新しきを思ひ、始終自發的なるが故に活動を樂む。特に自己それ自身を一種の美術品となして、自己を以て人生の一傑作たらしめんと欲するが故に、彫琢を盡し、丹青を極めて、猶ほ及ばざらんことを恐るゝなり。蓋し權力のみを貪る者は權力を得れば即ち老い、黄金のみを愛する者は黄金を得れば即ち老い、報酬のみを求めて働く者は報酬を得れば老ゆ。されど偉人の心靈は無窮大を慕ふ。故に彼を滿足するものは無窮大の外、何物も彼れに益なし。彼は一生を青春の

大畫室に入れて寸時も鮮美、優麗なる自己創作を捨つることなし。

四

我等は如何にせば青春を完ふするを得べき。我等は先づ功名心を淨化せざる可らず。我等に功名心の存するは恰も純金に多少の銅を加へて硬質を帶ばしむる如し。道德いかに貴くも功名心これに加はらざれば用をなさゞること多し。しかも此功名心の淨化せられざるがために、劣情、私慾の奴隷となり、空しく汚濁の衢に彷徨する者多きは比々皆然り。純潔なる功名心が白熱の如く、我等の胸裏に燃ゆる時、其焰は火の如く强く、大水もこれを消すこと能はず、洪水も溺らすこと能はざるべし。嘗て北の國、雪白き所、一敎師其處を去るに臨みて『生徒諸子、卿等は宜しく功名心を懷け』と勵せりとか。其後其輩下に幾多の俊才を出せり。味ふべき言なり。

青春美を完ふする第二の道は幻を見る力を養ふにあり。若し現實を以て唯一の棲息地となさば、そは既に死滅せる枯骨を懷けるなり。我等は須らく現實を超越せざる可

らず。幻は現實ならざるものを憧憬するに當りて眼前に髣髴する永劫の片影なり。誰か奔龍の全身を見ることを得ん。雲際に其片影を見る時、我等の心躍る。幾多の片影によりて全體を想望して轉々情切なり。理想は屢々幻となりて我等を訪づれ、我等に刺戟と光明とを與ふ。或人『力の秘訣』と題せる書を綴れるあり。就いて讀めば、力を得るの秘訣は幻を見るにありと論ぜり。『御心の天に成る如く地にも成さしめ給へ』とは實に天際の理想鄕を地上に實現せんとする大祈禱心なり。これ靈の幻なき者の容易に口にすべからざる壯語なり。豫言者イザヤは嘗つて此幻を見て『こゝに一人の王あり正義をもて治め、君主等は公平を以て宰どらん』と歌ひ、パトモスのヨハネは『われ新しきエルサレムの天より降るを見たり』と告げぬ。人若し幻を失はゞ、目前の仕事だも爲す能はざるべし。我等は未だ成就せざれども其完成の姿を見るが故に、能く困難と戰ふことを得るなり。彼の厭世家の行動を見よ。彼は眼下の混沌、雜駁に捕はれて失敗を豫期して進む。故に失敗は彼の前途に横はりて彼を苦む。種播く者を見よ。

彼は一粒の種にも將來の成熟を歡びつゝ、勇み働くにあらずや。幻を單に空隙に見ることなく、これを己が現下の仕事に携へ來る時は、常住座臥の間にも天國に住む心地し、げに『エホバの大庭に住む一日は千日にも勝れり』と喜び歌ふことを得べし。

我等は再び告げん。青春美は一たびは肉體美となりて現はれ、進んで心靈美となりて、其永劫の齡ひを完ふすることを得べしと。『肉は滅び靈は活かす』とは永遠に眞理なり。青春に光榮永へにあれ。

偉人とは何ぞや

われらは世の中に三種の人あることを知つた。其中最も優れる者は偉人である。然らば此偉人とは何ぞ。母は其愛兒に向つて「汝は大きくなつたらエライ人になれ」と云ふ。教師は其生徒に對して「將來エラクならねばならぬ」と告げる。頑是なき小供もこれを望み、勉學の生徒もこれを願つて止まぬ。しかし分かつたやうで分らないのは此エライと云ふ言葉の中味である。又其中味なるものも時代と場合とによりて多少の變化をなすやうである。

凡人を野に譬ふれば、偉人は山である。彼は卓然として雲表に聳え、衆人ひとしく之れを仰ぎ見る。黎明未だ朝暾を送らざる時、山巓は早やく新光に照される。黄昏は黑蛇の如く野も里も包む時に於て夕陽は其頂に五彩の冠を戴かしめる。偉人も亦かくの如きものである。世未だ新光に浴せられぬ先き、彼は天の靈光に照される。人は暗黑に彷徨して慰藉なき時彼は「新らしきエルサレム」の幻象を以て希望と勇氣とを傳へる。

われらの偉人に對する態度に二種ある一は低きより高きを仰ぐ偉人崇拜の態度である。もう一つはわれも高きに登り、偉人たなんとする態度である。此等二つの態度はわれらをして、人生に靈的奇跡を行はしむるものである。

偉人を崇拜するの結果、偉人を永く記憶せんと試むる企畫がある。肖像畫、銅像、

大理石像、大殿堂、金尖塔、モーソレウムの如き古來此目的に供せられたる記念物である。併しこれらのものは俗人には好いかも知れないが、未だ不完全なものである。偉人を後世に傳へんとて人の發明せる最上の方法は傳記に如くはない。偉人の精神と行爲との一切の内容は玆に遺憾なく發揮せられる。美はしき背景は極めて鮮明に映出され、幽遠なる奥行きは心ゆくばかりに啓示せられ、まばゆき功績は微妙なる色彩を以て巧みに畫かれて來る。歴史も、科學も、倫理も、傳記の神聖なる範圍を犯してはならぬ。傳記記者はひたすらに偉人のおもかげを映寫せんと努めなければならぬ。

伊太利の詩人マリオストーの面白い比喩談がある。凡ての人の命の糸の末端には其の名を刻めるメタルがつけてある。「死」が此鋏を以て此メタルを切つて仕舞へば、「時」は來りて之れを「忘れ川」に投げてやる。すると偶々其處に浮いて居る白鳥がこれを摘みて「命の川」に入れる。すると其メタルは流れ流れて後世子孫の手に拾はれる。

しかし幸か不幸か白鳥は何時も其處に居ない。多くのメタルは「忘れ川」に沈みきつて仕舞ふと云ふのである。そして此白鳥は即ち傳記記者である。世には多數の偉人があつたらうけれども、後世に傳はるのは其中僅少なる一部分に過ぎない。

然らば傳記記者の手にかゝる偉人の資格は何であるか。アリストートルは悲劇の主人公となる三つの要素を擧げたが、移してこれを偉人の資格にしやう。(一)完成。人は其一生を完成してから始めて其價値が定まる。それ故に棺に收められることが必要である。それまでは容易に其評價は定らない。蓋し死は生の對照物ではない。生の「最後の瞬間」(ラスト、モーメンツ)であつて、生の一現象である。而して生の眞面目は此貴重なる「最後の瞬間」に於て極めて赤裸々に現はれて來る。乃木將軍の心事も、道德觀も、主義主張もあの悲壯なる自殺を以て極めて確實になつた。これ其一例である。(二)壯烈。何時も絹布團に包まれて春宵千金の睡眠をむさぼり、出でゝは常に電車、自働車をすべらし行くが如き人には偉人は古來稀れであつた。釋迦が偉人となるためには、金殿玉

樓を捨てゝ、乞食に等しき苦難を嘗めねばならなかつた。よしや生れながらにして偉人たる人ありとするも、波瀾なければ、傳記記者は殆んどこれを傳ふべき術を知らぬと云ふことである。苟くも一片耿々の雄志を懷いて俗界に臨む者、豈波瀾なからん。狂瀾怒濤に翻弄せられぬことやある。或は白浪巖を嚙み、洪波天を衝き、矛盾あり、反抗あり、離叛あり、齟齬あり、失敗あり、悲痛あり。かくて鐵は煉鐵となり、鋼鐵となる。かくて金は純金となる。かくて地中より採掘したる大理石は偉人の半身彫像となるのである。然かも其至誠は誤解せられ、功績は泥を塗りつけられること多く、其冠は荊棘の冠にして、其最後は十字架上なることが尠くない。

(三)、非凡(マグニチユード)。一鄉の利害を支配する者は一鄉の大きさがある。一縣に範を垂るゝ者は一縣の大きさがある。一國を指導する者は一國の大きさがあり、世界に影響を與ふる者は世界的の大きさを有つて居る。又代議士として四年間の怪しげな存在を認めらるゝ三流の政治家あり、五十年間の明星と仰がるゝ宗教家あり、百代の師表となる

聖人がある。共に場所に於て或は時間に於て、一般俗衆に勝れる大きさ、即ち非凡を有して居る者は偉人である。

但し茲に注意すべきことは、此「非凡(マグニチユード)」の內容は漸次靈化されつゝある事實である。例へば佛國人は嘗つてナポレオンを以て佛國第一の偉人と仰いで居つた。然るに近頃は細菌學者パストルを以て佛國第一の偉人と目せんとする傾向がある。ナポレオンの偉大は動物的偉大である。パストルの偉大は精神的偉大である。一は自己の利慾のために砂上に樓閣を築いた。一は萬人の幸福のために生命の流れを汲んだ。基督の「われは人を使ふために來れるにあらず、人に使はれんために來れるなり」と云ふ言葉は刻々人生を指導しつゝある正しき文明の道標である。それ故にベーコンでさへ「役に立つといふことは偉大(グレートネス)の尺度(ユースフルネス)なり」と告げて居る。

今や學生青年の活動の動機が益々利慾に奔り、其野心がやゝもすれば淨化せられざる時に際し、何人か果して彼等に人生の要契を悟らしむる者ぞ。偉人となるは彼等の

共に希ふ所。しかも其志望や極めて卑し。何ぞ聖なる靈感に觸れて、現代に超越せざる。これ偉人となる秘訣である、但し白鳥が來りてわれらのメタルを拾ふや否やは顧る所ではない。

國運の發展と青年の努力

一

私の友人が嘗て英國に留學して居た時、或日のこと煙草屋の前を通り過ぎた。所が八つ計りの可愛い男の子が煙草を買はんと六ペンスの銀貨を出して帳場に手を延ばしてゐるが身體が小さいので屆かない。帳場には十三四の娘の子が居て、男の子に煙草を渡さうとしても同じく達しない。そこで友人は下の子供を抱いて煙草を取らしてやつた。喜ぶだらうと思つたら、却つて怒つて銀貨を其處に打ち捨てた儘歸つて行つて仕舞つた。これは案外なことになつたと思ひつゝ釣錢を受取り、其子供の家を尋ね

て之れを渡してやつた。それから友人は何故子供は親切にして貰つて怒つたかと云ふことを考へて見たのに、子供は自分でなすべき事を、他人に助けられたのが氣に障はつたのだ。何でも自分のことは自分で成さねばならぬのに、邪魔されたのが氣に喰はなかつたのだ。と分つた。友人はこゝに至りて非常に感服した。子供ながら此獨立心があつてこそ、英國のすばらしき發展が出來るのだと云ふことを、今更の如くに悟つたとの事である。

此自重剛毅の精神こそジョン・ブル・スピリット即ちイギリス魂である。如何なる國にも其國特有の精神ありて、國運の盛衰興亡は此精神の發揮せらるゝと否とによりて定まるものである。往昔のギリシャ人と云ひ、ローマ人と云ひ、或はもつと古きエジプト人と云ひ、其國特有の高潔偉大なる氣魂の、盛んに活動して居つた間は、實に世界に覇を稱してゐたが、一たび文弱に流れ、華美を競ひてより、野蠻人の侵入を受けて其文明は破壞せられ、國家の命脈は事實上斷滅の悲運に遭遇するに至つたのであ

る。然るに、英國人は古來此精神を持して容易に之れを捨てず、今日に至るも依然として此精神の磅礴しつゝあるは、誠に英國のために祝さねばならぬ。

この英國民族の發展の由來を考ふるに、英國民族の祖先なるアングロ、サクソン人種は今日の北獨逸とデンマークとの國境を中心として、エルベ河とウエーゼル國人の手に移つた。一度海上權を握つた英國人は、盛んに海外に雄飛を試みることになつた。それより進んで十八世紀に至れば、五大洲到る處に其雄大なる飛躍をなし、其勢力の扶殖、領土の擴張を實行するに至つた。

今日英國の殖民地の數は實に四十三の多きに上り、これに居住する人口は數億の多きに達してゐる。今これを其組織の形式より觀察すれば、大凡そ次の如きものとなる。

(一)特許會社殖民地——これは冒險者の組織したる會社に或程度まで特別の權利を賦與したるもので、米國の如き、印度の如きは、當初此方法によりて開發されたるもの

のである、又新しく占領したる殖民地にありても、此制度によりて統治されてるものは少くない。ボルネオ、ナイヂヤア、ロデシヤなどは其重なるものである。

(二)王領殖民地——これは英語のクラウン・コロニーと稱するもので、英國王の勅命によりて任ぜられたる總督が之れを支配する。例へば、香港、セーロン島、ト河との間の土地を占領して、海賊などを事とせる野蠻人であつた。紀元五六世紀頃に至りて、彼等は幾多の團體を作り、海を越えて今の英國に渡來し、其土着のルケト人種を征服して、玆に新しき國をなすに至つた。其後デンマルク人や、ノルマンの侵入を受け一度は戰ひしも、遂にこれと抱擁、合體して將來一層偉大なるべき素地を作つた。かくて十六世紀に至れば、エリザベス女皇の御世を迎へ、國運頓みに興り、政治上にも文學上にも、宗教上にも、其他諸般の方面に於て長足の進歩を見るに至りしを以て、充實、横溢せる國民の元氣は祖先傳來の西歐の一島國を守るのみにて滿足することが出來なくなつた。

先づ此氣運の產み出せる產物はスコットランドとアイルランドを英國に合併して、こゝに始めて成立したグレート・ブリテンなる帝國であつた。次に一六〇六年には北アメリカのヴアージニア洲を其領土に加へたが、これぞ海外發展の皮切りであつた。此時に當り、今迄スペイン人の掌握して居つた海上權は何時しか英人の手に歸し、英國は新植民地を獲た。トランスバール、ジブラルタル、セントヘレナ島の如きその重なるものである。

(三)自治殖民地——これは其大守或は總督か英國政府によりて任命せられ、行政機關としては責任內閣あり、立法機關には一院或は兩院の議會を有してゐる。北米カナダ、大洋洲の諸邦、ニユージランド、ケープーコロニーの如きこれである。

(四)半自治殖民地——これは土人と移住英人との數の相半ばする時に、一部英人の橫暴を抑へ、一部土人の優勢ならんことに備へんために、英國政府の干涉を受け居る殖民地である。ナタル國、マルタ島、英領ギアナ等其重なるものである。

(五)其他保護國……從屬殖民地、特別殖民地等、種々制度を異にしたるものあり、いづれも占領の歷史、其領土の狀勢によりて、適當なる手段を講じて居る。

又これを目的より觀察すれば、(一)商業殖民地たる香港、シンガポールの如きあり、(二)軍事的殖民地たるマルタ、ジブラルタルの如きあり、(三)農產的殖民地たる西印度、アフリカ諸邦の如きものを始めとして種々雜多である。

二

英國人が斯くの如くに多數の殖民地を占領するに至つた動機理由は。一にして足らないけれど、これを一括して云はゞ、國民の元氣實力が餘りに大にして、到底小なる本國に蟄居することが出來なくなつた爲めと云ひ得べきであらう。今其動機の鮮明に現はれたるものゝ一二を擧げて見れば、

(一)宗教的動機——往昔エジプトに居住せるイスラエル人(猶太人の祖先)は自分の好きな方法を以て、祖先の神を拜せんと欲して、遂にエジプトの地を出でてカナン

（今の猶太國）に移住する事になつた。これと同じく、英國の清教徒は信仰の自由を束縛された爲めに新英洲に渡航した。勿論それ以前に新英洲には英國人が移住して居たけれども、新英洲をしてよく新英洲たらしめたものは、『さつき丸（メーフラワー）』に乘つて行つた四百餘人の男女であつた。其他必ずしも迫害を受けずとも新領土に行つて、理想社會を建設せんとの希望を以て行つた者も多い。即ち監督教會派のヴァージニアに行き、羅馬舊教徒のメリーランドを占領し、フレンド派のペンシルヴァニアを建てたるが如きこれである。思ふに殖民事業に於て、是非必要なものは宗教的精神である。此精神がなければ、いくら海外に出掛けても、本國の懷かしさに矢も楯もたまらず、金さへ儲かればすぐにも歸國する者が多くて、到底永住的能力はない。『假令あけぼのゝ翼に乘りて天の果に至るとも、われ神の前より離ることを得んや』との信仰は絶海の孤島にあつても猶ほ能く寂寞を感ぜず、こゝに新故郷を建設する事が出來るのである。

（二）人道主義の動機——千古の偉人デビッド・リビングストンが最も暗黑なるアフ

リカ内地の探險に出かけたのは、學術上の貢獻を目的としたと同時に、彼が博愛義俠の精神に基づいたのである。即ち彼が熱烈なる信仰はアフリカの暗慘たる土地に福音の光明を宣傳して可憐なる民族を救つてやらねばならぬと絶叫したのである。此決心があつたから、彼は獅子に噛み付かるゝことも辭さなかつた。ので、今日利慾の外に何等刺戟物のない人々にあつては到底信ずべからざる奇跡である。リヴィングストンによりて一度開かれた門戸はスタンレー其他幾多の學德兼備の人士の出入する所となり、其結果として英國の數多の殖民地が出來ることになつた。

（三）活動主義の動機——クライブが萬里遠征の壯圖を抱いて印度征服の大業を爲し、ケンチングスが其後を追ふて之れを完成した事は、我々には珍らしくない物語である。此個人の痛快なる活動によりて英國の殖民地となつた模範的實例はボルネオのサクラワ王國の創設者ブルワク及び英領南アフリカの建設者セシル・ローズである。ブルックは日本の山田長政の樣な人で、しかもそれ以上の人傑であつたらしい。彼は始

め東印度會社の書記であつたが、金が出來たし、無聊に苦しんで居つたので、何か一仕事やらうと思ひ立つて、ボルネオのサクラワに行つた。偶々國に内亂があつたので、義俠の精神に富めるブルックは酋長を助けて内亂を鎮定し、段々重要な地位に用ゐらるゝに至つた。時に土民の信用が厚かつた爲めに、酋長が死んだ後王位に上ることゝなつたのである。今日でも土民はサクラワ王第二世に非常に歸順し、其善政に悅服してゐる。セシル・ローズは將來牧師となる爲めに勉强して居たが、あはれにも肺病に罹つた。餘命も長くあるまいから、生きて居る中に活動をやつて見やう、又暖國であるから保養にもなるだらうと云ふので、蹶然志を立てゝ、アフリカに渡つた。其の内にナタルの金鑛を發見して、巨萬の財産を造り、これが心核となつてこゝに建國者 (Staebnilder) たる榮冠を戴くに至つたのである。これは一例に過ぎないが、兎も角も英國にはかくの如き崇高、偉大なる活動的人物が輩出して、興國の大元氣を發揚しつゝある事實は我々の模範とすべき事ではあるまいか。

猶ほ此外に戰爭の結果として占領したるものなり、商業のため、工業のため農業のため、軍事上、要塞的必要のために領土となせしものもある。併し乍ら我々が深く考へて見たいことは、英國殖民地は英國民族の努力の結果として得たる個人々々の賞與報酬をば、國家に獻納したものであると云ふことである。即ち英國多數の殖民地は政府の官業にあらずして、民間の事業であると云ふ事である。

英國では蠻地に踏み入る急先鋒は宣教師である。次に商業家、最後に領事と云ふ順序で出て行く。我が日本國では如何かと云ふと滿洲でも、朝鮮でも、其他臺灣、樺太を經營するは主として政府の仕事に屬し、人民が進んで之れを開拓し、之れを充實せんとする精神は英國人の如くに盛んでない。勿論先づ可成にやつてゐるものゝ、國民の海外に於ける發展はまだまだ幼稚なものである。但し如何はしい紅裙連が世界の開港場は勿論の事、アフリカの内地までも遠征して、仕事に從事して居るは誠に勇ましいことであるが、日本男子の崇高、偉大なる人格の海外活動を見ない以上は到底英國

人と比肩して行く事はできない。

英國が斯る健全、崇高なる發展をなせしに對し、一方に於ては、四隣强國の壓迫を受けて、今は亡國の名殘を留めて居るポーランドがある。嘗てポーランドは今のオーストリヤ・ハンガリーよりも大なる領土を有し二千四百萬の人口あり。十九世紀頃には歐洲の一强國に數へられた。然るに十六世紀に至りて貴族の横暴、豪奢其極度に達し、議會を蹂躙し、希臘舊教、新教を迫害し、やがて貴族間の內訌、分裂となつて、こゝにオーストリヤ、ロシヤ、プロシヤの干涉を受くることゝなつた。其後一七七二年、一七八一年、一七九五年の三回に於て國土は三國に割讓する悲運に遇ひ、一八一五年のウインナ會議の結果として全く國家的存立を失ふ事になつた。其後屢獨立の旗を擧げ、其他不穩の擧に出でしも、全く其甲斐なく、外國の桎梏は益々きびしく其國民の手足を束縛するのみであつた。今やポーランド語は公衆の前に於て使用することを禁ぜられ、學校にありては之れを敎授する事が出來ないことになつて居り、其他店頭

の看板、停車場の告知書の如き、苟も公衆の眼に觸るるものは其國語を用ふることが出來ないのである。國亡びて山河あり、春は都に訪るとも、花に啼く鳥に驚かさるゝのみである。青年蹶起して獨立の旗を飜さんとするも、これ蟷螂の王車に向ふと同じことである。貴族の暴戾は外國の虐政を導き外國の虐政は遂に國運の命脈を斷つに至つた。かく亡國ポーランドは竟に地理學的名稱たるに過ぎない事となつた。

三

一方には覇を五大洲に稱する英國あり、一方には外國に併合せられたるポーランドあり、忠君愛國の精神を以て誇る我が國人は果してこれを何とか見る。我が帝國は二千五百有餘年の歷史を有すと雖、未だ必ずしも世界に誇稱するに足るべき大なる事業をなさない。明治時代に至りて頓に發展の氣運に際會し、近時屢國難を排して奮鬪した。世界の耳目は次第に我國の存在を認め。今後の行動に對して多大なる注意を拂ふことゝなつてより、誤解、嫉妬、猜忌漸く盛んならんとする。此時に當り我國人は大

に警戒して外患の襲來に備ふると共に、將來に於て、一層大なる活動を演ずべき大覺悟を抱かねばならぬ。青年の努力はこゝに於て國家の運命を支配することゝなつたのである。我等青年は祖先の遺せし志を繼承し、將來子孫の光榮を信じて努力せねばならぬ。我等青年は自己の使命を負ふて起ち、高潔、崇高なる人格と、偉大、壯烈なる事業を成さんと決心せねばならぬ。

人間に三種の階級がある。一は平凡以下の人間である。白痴、愚鈍、不具者の如きは先天的にコムマ以下の人間で、社會の屑物を收容する監獄にある囚徒の如きは、後天的に同じく一人前の人間として如何はしき人間である。我等已に先天的屑物ならぬ以上は決して後天的の屑物となつてはならぬ。第二は平凡なる一人前の人間である。よしや其體力に於て、貪慾に於て、凡人を凌ぐ事ありとしても、其人間たるの價値、力量に於て、何等勝る所なければ凡人たらざるを得ない。我等は少くとも凡人以下でなければ、或意味に於て感謝すべきことゝ思ふ。第三は平凡以上の俊才英雄である。

彼等は其體格に於て、其存生の年齡に於て毫も凡人と異る所なしとするも、其偉大なる人格や、事業、作物に於て優に天下の師表たるものである。かくの如きは萬人學んで悉く達し得ざる天稟の才能による所多しと雖、我等凡人たるに滿足せざるに於ては進んで凡人以上に少しなりとも漕ぎ付ける覺悟がなければならぬ。若し出來るならば平凡にして猶且つ無名の英雄たることを力めなければならぬ。事業作物に於て天下を驚かす事なしとするも、其人格、品性に於て、隣人鄕黨の敬愛を維ぐに足るべきものとならねばならぬ。

四

日本民族の發展に對して、青年の第一に努力すべきことは健全なる體格を作ることである。これは頗る平凡な樣であるけれども、最も注意すべき要項である。健全なる體格は崇高、偉大なる人格には是非無くて叶はぬ基礎的要素である。昔時より今日に至るまで、苟も萬代の師と仰がるゝ樣な哲人は悉く健全な人であつたらしい。彼等の

非凡なる德風は單に架空的消極的退隱主義の道德にあらずして、實に一代の罪惡を征服せんとする絕倫なる戰鬪力と、萬人を其羽翼の下に收めんとの雅量とがあつた。斯くの如きことは羸弱なる病軀に苦む者のなし得る所ではない。彼等の精神の非凡なりしと共に其體力に於ても確かに非凡のものがあつた樣に思はれる。蓋し薄弱なる身體と疾病とは其多くの場合に於て肉慾に耽り、或は隱れたる罪惡を犯すが爲めに起つたことが多い。自然の理法に反對する罰として自分の健康を破るのである。然るに偉人賢者は、決して斯る暗黑なる罪惡の經驗に身を沈める事はないから、從つて身體も健全であつた。

健康の產み出す所のものは、元氣、精力である。されど時あつて如何に健全なる身體ありとも、意氣銷沈し元氣の揚らざることもある。これと同時に餘り健全ならざる人にして意氣軒昂、精力絕倫なることもある。斯くの如きは寧ろ除例外とも見るべきものにして、元氣と健康とは一般に形影相伴ふが如き親しき關係を有して居るべき筈

である。元氣を鼓舞する第一の要件は快活なる精神を保持することである。陰鬱、憂愁の氣質は自殺、自滅の預兆を示せる心的狀態で、澁苦、不快の面貌は家庭に不和を釀し、社會に曇天を與へるものである。快活なる精神は生物發展の第一義にして、微笑の面貌は社會のバチルスを撲滅する美なる日光である。

世に厭世家なる者あり、自己の思想の意氣に當てられて、身動きもならず、自己の不滿足を誇大視する外に、他に對して一杯の冷水を與ふる程の親切心たもない。彼は寒夜の哲學者である。冷やかにして暗く、思ふ所、考ふる所、常に茶碗の緣を散步して其中に陷らざらんことをのみ憂ふ。世に樂天家なる者あり、朝日に感謝し、夕陽と和し、自己の思想を咀嚼して甘味を見出し、自己の職分に安んじて天恩を思ふ。其思想に光明あり、其言葉に彈力あり、其行動に靈音あり、人彼と和し、之れに近づかんことを喜ぶ。終夜歡笑するも猶人知れぬ秘密の喜悅あり。融和、暢達の氣象は天を摩さんばかりに思はるゝ時あり。疑惑、恐怖、嫉妬、猜忌は毫も彼の關知せざる所であ

る。彼の孔夫子の弟子曾晳が師匠の問に對して『拙者の樂みは政治上の權柄を握らんとにあらず、陽春三月、花紅に草綠なる頃冠者五六人、童子六七人を携へて沂水の流れに浴し、舞雩の岳に登りて、先王の道を歌詠することが何よりの樂みて御座る』と云ふたのは、樂天家にして始めてなし得る三春行樂の妙境である

元氣を盛ならしめんためには、自ら顧みて疚しからざらんことを期し、機會あらば人のために善を行はんとの心懸けが大切である。心中密かに疚しき時は純潔なる元氣は湧いて來ない。利己を目的とする者は必らず實際問題と衝突して意氣銷沈して仕舞ふことが多い。天空快闊の精神を持續する時は元氣、精力は其人の人格の程度に應じて必らず發露せらるゝものである。眞正の雄辯家は曇りなき心事と正大なる主張のある人にして始めて到達し得るものである。眞正の勇氣は身を殺して仁をなす樣な赤心の人にして始めて揮ひ得る靈能の力である。

山崎闇齋は非常の勉强であつた。嘗て下痢した所が其友人は、今度こそは闇齋が弱

つただらう、と思つて蔭からのぞいて見れば、闇齋は雪隱の中で、餘念なく書見してゐるので、大に驚いたとのことである。英國の文學者ウエイアム・ペワクフォルドは『ヴテーク』と云ふ小說を三日二夜の間坐りつゞけに書き終つた。米國のケロッグと云ふ醫者は一週間筆を執り續けて書き、休息の時は風呂に全身を浸して數時間の睡眠をなすのみである。彼の浩瀚なる著書は自然療法、菜食主義のオーソリチーとして有名なものである。カーライルは二十年間かかつて書いた原稿を友人に貸與せしに其女中の間違ひでストーブに入れて燒いて仕舞つた。カーライルは之れを聞いて非常に失望して、一時は爲す所を知らなかつたが、やがて氣を取り直して、再び書いた。これが有名なる『佛國革命史』である。ナポレオンは日に四時間しか眠らなかつた。そして終日馬上に跨つて三軍を指揮したとの事である。これらはいづれも元氣旺盛、勢力絕倫にして到底企及し得ざる所のものなれども、吾人は出來る丈け、かゝる模範に學ぶ所がなければならぬ。

五

健全なる身體と旺盛なる元氣とを具備し、次に進んで自己鍛錬の工夫を凝らすことは人生最大の要務である。

自己鍛錬の第一準備は自己を知ることである。自己を知ることは決して容易のことでないが、自己の力量を計り其應用を誤らぬ樣に、長所短所に通ずることが出來れば充分なりとなさねばならぬ。こゝに於て吾人は先づ謙遜と自重の二事を心がけねばならぬ。謙遜とは自己の未だ至らざるを思ひて、人の長所を學ばんとの精神である。若し自惚の爲めに小なる自己に滿足し、瓦礫の如き未製品をば彫琢の工夫を全ふしたる既製品の如くに觀ずる時は、おのづと進歩、發展を停止し、幾星霜を閲するも依然たる舊阿蒙たるを免れない。かゝる人には自己より一層高き理想なるものが存在しない。彼の如きは生きながらにして生活狀態の停止せるものである。これに反して、偉大なる理想に憧憬して止まざるを以て、常に自己の及ばざるを思ひ、日に日に新たな

る進歩に勵みいたしむるのである。ニュートンが自然界の澤山な法則を發見しながら、其心益謙遜にして『われは濱邊に小石を拾ふ兒童の如く知る所小なり、漂茫たる大洋は猶探らざる大智識界なり』と云つたのは千古の美談である。

謙遜に伴ふべきものは自重である。眞の謙遜なる人にして、始めて眞の自重の人たることが出來る。自重とは自己の理想的價値を推斷して、これより一歩も退かざらんとする努力である。此理想的評價を標準となして勇往邁進して、斃れて後ち止むの精神こそは最も男らしき精神態度にして、個人に此覺悟ありて始めて社會に活氣あり、歴史に異彩あるのである。瀑布と俊傑とは自ら其道を造ると云ふ言葉は實に這般の消息を洩らして居るものである。われは神の形像によりて造られたるものなりとの確信あらば、吾人は如何に高潔偉大なる心魂を造ることか出來やうぞ。

次に吾人の心がくべきことは自省と修學とであらう。共にこれ靜止的狀態にありて自己の鍛錬をなすことである。自省とは我れ獨り密室に端坐し、靜かに我が過去の經

遇を顧み、或は現在の境遇、現在の態度を察し進んでは將來の成行等を思ひめぐらして、我が厥摶の果して健全なりや否やを究めることてある。さりながら自省は時としては餘りにわれを省慮するに過ぎて、憂愁、痛恨の深淵に陷ることがある。こゝに於て修學の必要がある。修學とは古人の書を學びて其道に從はんとするを始めとして、我天賦の智能を啓發せんがために勵むことである。古聖哲の道を闡明し、眞理の俤を憧憬して止むことなき研究心は、人間の精神作用の中最も貴重なるものである。まことにこれは眞理其物を勞せずして手に握るよりも一層慕しきもので、此猛烈なる好學の心あらば、吾人の精神的進歩は正に春の野の若草の如くに延び延びと生長して止まぬであらう。

自省と修學とは個人が獨立して努力する狀態であるが、これのみでは未だ自己鍛錬のために充分なりとは思はれない。次で來るべきものは、交友と活動である。人は其交はる友によりて知らると云はれて居る如くに、吾人は種々異りたる人物と絶えず接

觸して一種の人物展覽會に臨みたるが如くに、こゝに様々の標本を觀察するのである。吾人はこれらの人物標本の比較研究によりて、不知不識の間に萬人の長所、美點をわれに攝取し、兼ねて萬人の短所、汚點を遠けることになる。或は甲の友と相親み、或は乙なる友と競爭する間に『自我』なる意識に次第に髣髴となつて來る。又至純なる友情は現世に於ける最も美はしき精神的產物にして、其淸淨、無垢、無私、無慾の姿に至りしは天下之れに勝れる慰藉と光榮とはない。人若し全世界を得るとも、かゝる友情がなければ、いとも憐れなる貧乏人と云はねばならぬ。交友に伴ふて起るべきことは活動である。特に凡ての機會を捉へて自己の本領を發揮せんことを務むると共に、友人、知己のために少しにても善事をなさんと活動することである。人は如何に思ひめぐらしても、寸陰も其生命を延ばすことの出來ないものであつて、進んで自ら働かずんば自己の輪廓は毫も擴張して來ない。世には案外に力ある人でも、單に想案にくれて居るがために終生空しく過す人は如何に多いか。一たび決心を固めてや

つて見れば、思ひの外に仕事は捗取るものである。この心を以て常に自分の第一に成さねばならぬ目前の義務を遂行すれば、第二の義務を勞せずして、わが力量の範圍内に這入つて來ることになる。青年學生が單に思慮百端して毫も實行に着手せぬが如きことあらば、これ由々敷大事にして、墮落、退歩、滅亡は皆これより起つて來る。若し進んで他人のために善事をなさんが爲めに應分の勞力を惜まずんば、其結果はよしや立ち處に現はれることなしとするも、自分に一種言外の滿足と喜悅とを與へるものである。世の煩悶者流の多くは、未だ嘗て一度も他人のために善事をなした經驗のない人である。彼等をして進んで道に惱める病者の手を取り、飢に叫べる貧兒に一飯を惠ましたならば、彼等の厭世觀は雲の如くに消散するのであらう。わがため人のために、絶えず活動努力する所に、活躍たる人生の波動が現はれて居る。自己を知ることに始まりたる自己鍛錬は自己を捨つることによりて始めて其目的を達することが出來る。これを暫く無我の情と名づけやう。恰も終生刻苦經營して造り上げた唯一の逸

品、傑作をば惜氣もなく、わが知己朋友に送る樣なものである。つまり自己を造り上げたのは。これによりて自己を利せんとのためにあらずして、これを國家のために、人道のために。後昆子孫のために、用ゐられる樣に捧げて仕舞ふのである。古人は『人生感意氣、功名誰亦論』と叫んだ。かゝる美はしき覺悟がなければ、如何に忠君愛國の教育をつめ込んでも其甲斐がない。此無我の情ありてこそ、國家は國難を退ける忠良の臣あり、人道は之れを扶植する勇士あり、吾人の子孫は模範として仰ぐべき百代の師を得ることが出來るのである。テニスンは歌ふて曰く、

我が意志はわれのもの、われ其理を知らず、我が意志はわれのもの、これ汝神のものとせんため

と云ふたのは實に無我の情を道破したるものである。松蔭はこれを至誠となし、更らに之れを解して、

人唯一心、心唯一誠、以是事君則忠、以是事父則孝、以是事長則敬、以是誨子孫則

友是其義也

と云ふて居る。此精神の發露が即ち、

かくすればかくなるものと知りながら、止むに止まれぬ日本魂

の一首を遺して、泰然自若として刃の露と消えたのである。苟も古往今來天下に美名を轟かしたる者にして此一片無我の情に皷舞、激勵されずして偉業を成した者は一人もない。

六

自分は覺えず長談議をしたが、最後に一小話を以て、此篇を結ぶことにする。ヘルシェルと云ふ天文學者は二十歳前後の時に『われは此世界を去る時には、自分の生れた時よりも一層美はしきものとなさん』と誓つた。そしてそれから學者となつて、奮勵努力した。果せる哉、彼のお影によりて、幾多天文上の新現象が發見せられ、此世界のみならず、天上界も一層美はしきものとなつた。あゝ我が敬愛する日本現代の青

年諸君よ、日本將來の國運の發展すると否とは、實に諸君の此決心を固めて努力すると否とによりて決定さるゝ問題なりと知り給はずや。

青年の憂ひ

一

我邦學生青年の憂ひは靈育問題の解決せられぬことである。そのかみ小學校にありし時、われらの讀める讀本には『神は天地の主宰にして、人は萬物の靈長なり』と云ふ文字があつた。當時の先生はこれを滿足に解釋して呉れなかつたが、しかしわれらは讀んで此一句に至れば、何となく襟を正ふするやうに感じたことを記憶して居る。若し吾國の爲政者と教育者とが、曠世の見識と透徹せる明察とを以て、其後ちも今日に至るまで、此言葉の意義を闡明し、これに則りて物興の氣運に乘せる國民性の涵養に志したならば、今日程に學生青年の不幸を招かずに濟んだかも知れぬ。惜しい哉、

今日の教育主義は維新の國是によりて定められた明治初年のものよりも退歩して居る。蓋し斯かる博大深遠なる思想こそ、天地靈明の照鑑し給ふ所、皇基萬代の安きを致す所以である。又斯かる公明嚴肅なる精神こそ、青年の意氣を旺盛にし、其若やぎを純化せしむるものである。何となれば一部人士の私見にあらずして、古今東西の聖賢の等しく到着した所の一大斷案である。若し彼等の遺訓より這般の思想を取り去つたならば、其殘る所は德教の形骸に過ぎない。若し彼等の生命から斯くの如き信仰を奪ひ去つたならば、一時を僥倖した僞善者にあらざれば、淺薄皮想なる空理の人に終つたであらう。われらは何處までも此種の思想、信仰に對して十分の尊敬を拂はねばならぬ。これ良心ある青年の特權である。而して彼の靈育問題はこれによりて、半ば以上の解決を得たものである。

成程近頃は教育の施設や組織は年と共に完全の域に進んで來た。教育の機關、學校の整理、生徒の統一、教材と德育等、著しく面目を改めて來た。體育は盛んになつた。

如何なる學校にありても竹刀の響き勇ましきを聞かぬはなく、背負投げの晴れの業の心地よきを見ざるはない。庭球のコートや、野球のグラウンドは幾多の勇士の奮鬪するに任せて居る。女子の學校でさへ、海老茶袴に長刀をつとりて巴御前の昔しをしのばせ、さてはスエデン式の輕妙なるに覺えず感嘆の聲を洩さしめる。水泳の如きも從來は一部の好事家の間のみに行はれて居つたが、近來頓みに其範圍を擴めて來たのは甚だ結構なことである。思ふに夏期にありては、水泳程理想的な運動は他にあるまい。斯くの如くに種々なる運動が此大勢を以て進まば、今後學生の健康狀態は大に改善されるものがあるであらう。唯患ふべきことは、これらの運動に從事する者は比較的少數にして、多數者は課せられたる體操を否應なしにやつて居るに過ぎないことである。依然として神經衰弱や、胃弱や、脚氣などに血稅を拂つて、青い顏して居る者が尠くない。一方に特志家の寄附金で建てた銅像のやうに逞しい運動家が居れども、一方には試驗勉强で土俵際わを胡魔化さうと云ふ向ふ鉢卷連が蟲の息である。折角道

場の落成式を擧げ、グラウンドの地均らしをしても、此の有樣では未だ大に誇るに足らぬ。早やくも野球の弊害を叫ぶ者あるは、これ實に少數者の罪である。壯快活潑なる野球を殺す者は實に不心得なる選手の罪である。今後大に學生の元氣を發揚せしむべき遊技が、今夭折することありとせば、それは甚だ惜むべき極みである。斯くの如きは單に運動の形骸を捉へて、未だ精神に達せぬがために起るものである。

二

次に智育の進步は益々完全の域に達して居る。學校教育にありては、一週三十時間もある教程を生徒に課して、懇切周到を盡して居る。百科の學術は古今東西に涉りて、之れを生徒の頭腦に溢れしめねば止まない。生徒はこれを丸呑みにし、時々試驗に際して、これを其儘に吐き出した者が優等生となる。昔時羅馬では、人に饗應する時は、腹に滿つれば服藥せしめて、これを吐き出さし、再び美食を供したと云ふことである。しかし、其結果種々なる知識は下宿屋の客人の如く、這入つては出て行く。

朝に幾何學を送り、夕に歷史を迎へる。學んでは忘れ、忘れては又新しいものを習ふ、詰込主義、丸呑主義、吐出主義、下宿屋主義などが盛んに行はれて居る。かくて父兄は饗應費の多額なるに驚き、學生は腦病と胃弱とに苦んで居る。これ程勉强したならば、餘程學者となるべき筈であるが、左程でもない。智慧と云ふ黃金も、見識と云ふ寶玉も、溜らない。やゝともするとやくざな零碎と斷片とのみか混然雜然として押し込まれて居る。實際に迂遠なる理屈は秋の落葉の如く堆積しても、一度眞劍の火に遭へば灰燼となつて仕舞ふ。筆記や講義は水嵩增して來ても、忘却と共に流れ去つた後は、やゝともすれば自然主義だとか、危險思想の如き鼻持ちのならぬ汚穢物や、手足を傷つける荊莉などが散在してるとは情けない。自然主義とか、破壞思想と云へば、如何にも近代人の素養とも見るべき、時代思潮であるかの如くに心得て居るは片腹痛きことである。これ思想、情念の腐敗せるもの、即ち墮落思想に過ぎぬ。かくの如き知識教育の弊害が續出して來るとは、實に心細い次第である。

三

かゝる墮落思想が現代青年を禍ひして居ることは實に邦家の深憂である。特に現今は過渡の時代なるを以て、舊來の德風は其儘では、一代の欽仰を維ぐ權威を失つた。種々なる手段によりて救濟の術を講じたけれども、未だ滿足すべき結果を見ない。或は武士道の皷吹によりて道德を維持しやうとしても、これは戰爭時代の道德としてはよからうが、今となりては浪花節の材料となつた。蓋し殺伐、好戰の如きは今日に適せぬ。かゝる形骸にこびりついて居ることは甚だ危險である。一時は戰爭を國家唯一の事業の光榮と思つたこともあつた。しかし平和事業に迂愚なるために、血を流して獲たるものも、外國人に蹂躙せられた。輸入超過のために、外國に償金を支拂ひつゝあると同一の恥辱を受けて居る。武士道の穿き違ひは國交上の邪魔とさへなつた。御國自慢や、喧嘩腰で出掛けて行くと、玄關拂ひを喰ひ、移住民は泣面に蜂であつた。

こゝに於て勤儉貯蓄を以て國家經濟の頽勢を挽回せねばならぬことに思ひ當つた。

しかしこれは消極的方法なるを以て、未だ大なる刺激を與へることは出來なかつた。古い桶ならばこの箍で弛みをしめることが出來やうけれども、護謨の如くに彈力に富める若い連中は一向難有からぬ。しかも勤儉貯蓄なるものが、果して尊德翁の本旨なりやは頗る疑はしい。翁の推度分讓の寬宏なる態度、天恩地惠を信じつゝ働く敬天思想乃至は荒蕪を耕やすには先づ心田を耕せとの人本主義、これらこそ翁の大精神の存する所である。思ふに尊德翁は淺薄、狹量なる御役人達の遣口に飽き足らざると共に、嘸ぞ日本子孫の急速なる進步、發展を見てほゝゑまれてるであらう。

今度は祖先崇拜の復興によりて國民道德を維持しやうと試みた。「自分が小供の時には神社佛閣に出入して殊勝な心も起したもんだ。今の若い連中は書物許り讀んで居るから、かゝる仕末になるのだ。神社に御詣りでもさせたならばよからう」と睨んだ。しかし今は雷電のはためきに桑原よと恐れて居つた時代ではない。寺小屋の手習小僧は何時しか西洋館でエッキス光線とラヂウムの實驗をなして居る。「遲かりし由良之

助」の駕籠の時代は夢と消えて、航空船の時代を迎へんとして居る。斯かる時に當りて舊慣と古俗を其儘に採用せんとするは、大きい足に小いさい草鞋を穿かせて、肉刺を出させるやうなものである。況んやこれに重い荷物を背負はして走れと命ずるのは、不心得の至りである。

勿論われらはわれらの祖先を尊敬し、これを祭れる神社佛閣に敬意を表することは、毫も辭せぬ所であるけれども、神話的神々、動植物や山川の如き自然物、什器の如き庶物などを崇拜せよと命ぜられるのは、此上なき滑稽である。かゝる幼稚な信仰は蒙昧なる野蠻時代の迷信である。若し強ひて之れをなさんとするは、これ正しく野蠻復歸の時代を見ねばならぬ。思ふに眞面目にこんな事を青年學生に强ひる人もあるまいし、又これを强ひられて狐狸や、毒蛇や、姪祠に參詣する學生もなからうが、如何にしても氣迷ひの沙汰と云はねばならぬ。氣早やな米國の一雜誌の如きは、此頃の日本思想界の退歩を見て批難、警戒の筆を動かして云ふ『若し日本が故意に幼稚にして奇怪なる神道の傳說に逆行退歩して、臣民及ひ兒童より信敎の自由を奪ひ去るが如きことあらば、世界の文明諸國は折角對等の交際を與へたる日本に向つて、從來の尊敬と信用とを與へざるに至らん』と。內にありては信を維ぐに忌らず、外にありては批難の的となるが如きものは早晩廢棄せられねばならぬ。

四

上述の如く、體育に、知育に、德育に、其他種々なる工夫、手段を藉り來りても、學生青年は依然として精神的飢渴に苦んで居る。これわれらの靈育の問題を云々する所以である。以上のものはいづれも必要缺く可らざるものなれども、憂ふらくは新時代の人の子の心靈に觸れて居らぬ。よしや觸れることあつても、之れを感動せしむる力がない。人の子の心靈に不斷の糧食を與へるものでなければ、如何に工夫を凝らしても悉く無用の長物である。佛國の文士パスカールの名著『思想錄』の中に『道樂論』と題する一篇かある。其大意は「人の心靈のさゝやきの恐ろしさに、百方これを默せ

しめやうと工夫する。そこで種々なる浮いた歡樂に時を費やし、多忙なる仕事に心を注ぎて、成るべく沈思默想を妨げやうと試みる。しかし淺ましき自分の姿を鏡に映せば戦慄すべきも、やがてこゝに神の御姿を認むることが出來れば、これほど幸福なことはない」と云ふのである。思ふに眞の藝術は心靈の無限性の發露であつて、ブランデスの如くに、これに慰藉と奬勵とを與へるものである。これに反して卑野なる道樂は却つて心靈を眠らせ、肉慾を挑發するのみである。カーライルも人の悲哀を感じ、心安からぬは、人に無限の心靈あるがためであると云ふて云る。あゝ我國將來の運命は一に此靈育問題の解決如何によると云ふても過言でない。

然らば心靈は如何にせば之れを養ふことが出來るか。これは決して一部宗教家の閉問題ではない。これは又確かに議論と理屈の跳梁跋扈を許さぬ。精神上の秘義である。瞑目沈思し、神明に契合して始めて達し得べき事實である。强ひて之れを云ふは、空しき影を追ふに過ぎぬととなるであらう。しかれども こゝにわが信ずる所を告白する

を許せ。

第一、われらは天地の主宰たる神明の存在を信じ、常に其愛護の下に努力せねばならぬ。

第二、人は萬物の靈長なることを意識し、われも人も此自覺を完ふせんことを工夫せねばならぬ。

第三、われらは如上の靈界の二大事實を最も明快、適切に敎へ與れたる人格に範を取らねばならぬ。

人各々信ずる所を異にすると雖、そは形式と色彩とに於て異るものである。何人にても以上の三事實に反對するほど思慮なき者はない筈と信ずる。一たびこれによりて靈育問題の解決を得たならば、わが國學生青年の前途は眞に多望である。

五　教會と社會

教師と人間學

一

英國の劇詩に『親切で殺された女』と云ふのがある。若し殺されるとすれば過分の親切も少し考へ物である。時には夫婦間に小波瀾を見るも、却つて單調を破りて、一層自他の長短を知り、交情を深くする手段ともなるであらう。それ故に多少の澁味は必らずしも排斥すべきものにあらずして時には寧ろ觀迎すべきこともある。ライマンアボットは之れに對して聖書は『敬虔に壓せられたる文學』なりと云ふた。これは聖書を一種の文學書として見た言葉で、宗教の書としては徹頭徹尾敬虔の大精神にて一貫されて居ることは別して怪むことはない。

されども聖書は決してそれ程嬉嬉な鹿爪らしき文字のみにて埋められて居ると思ふのは誤謬である。聖書の內容は寬容である。例へば創世記を虛心に通讀一過して得たる感想は如何なるものであらうか。單に宗教の書でない。これ一種の莊重なる神話を以て始まり、次に人情の流露をもて充ち滿ちた立身談、建國談、不和爲鬪の話、屠僧云ふに忍びざる肉慾描寫(今日より見れば)などが書いてある。時に卑猥或は艶美にして靑年の血を狂はしむることあれば、不義欺滿の詭計を逞うして人を傷け、人を呪ふものもある。斯くの如きは宛然現今の自然主義の作物に接するの感がある。又詩篇の如きは勿論神に對する憧憬の心を歌に出したるものではあるけれども、それにしては餘りに字句洗練に、構想巧妙なることはあるまいか。彼の十九章の天地の榮光を歌ひ次に人類の罪惡に胸を打つて嘆息する記事の如き何ぞ莊大なる。二十三章の牧人の歌の如き、人類の保護神の無限の恩惠を遺憾なく發露し傷心の人、厭世の人、これを讀みて感謝の涙を濺がずには居られない。雅歌の如きに至りては、寧ろ露骨に戀歌と命ず

べき書である程に、男女相思の美はしく、やさしき熱情を詠じて居る。舊思想の人は基督と教會の關係を比諭的に叙したものなりと强辯すれども、これは決して當を得たる解釋ではないことは今更ら云ふ迄もない。愛の力を說きて

愛は强くして死の如く
嫉妬は堅くして陰府にひとし
其焰は火の焰のごとし
いともはげしき焰なり
愛は大水も消すこと能はず

と歌ひ出でし言葉の如き、實に偉大なる發表である。イザヤ書の後半の雄大なる文章に至りては、之れを單に豫言の言葉として見るよりは、憂國の大熱情をば典麗、複雜なる筆を揮ふて記した文學であると云ふ方が一層適切であるかの樣に思はれる。流石は萬民の書である。神を說いても人を忘れなかつた。人間が何處迄も活動して居る。

人間の情事、心情の活動、感興の起伏、思想の抑揚は實に錦上更に花を添へて居るのである。

二

教會は宗教的集合所である。神を禮拜し天の大道を敎ふることは、固より怪むに足らない。然れども今日の教會としては餘りに多く神のみを說き過ぎることはないか。勿論中世紀や、又は人心が今日程複雜ならざりし時代であつたならば、簡單に神のことのみを說きて、何等の不足を感ぜざるのみか却つて當時の時代精神の要求に應じたかも知れない。然れども現今の如くに社會が進步し、人心が複雜になつた以上、是非玆に「人情が宗教の規則に壓せられてる集會所」にあらざるものがなければならぬ。今や教會の權力は認められすして各自信徒の向上的精神と倫理的活動を尊重するに至つたからには、玆に舊套を脫ぎすてゝ、時代精神の眞諦を察知し、人生の活問題に觸着せんことを務めなければならぬ。彼の學窓に育ちて世路に經驗なき、所謂潔白すぎ

たる青年宗教家が如何に天を説いても、當の的なる人間を知らざる爲めに、容易に心靈の急所に打ち込み兼ぬることはあるまいか。やゝもすれば宗教の空想を談じ人生と何等相渉ることなき架空の理想を高調することは、果して人間に同情し、之れを救濟するの道であらうか。十八世紀末葉の自然神學者の如くに宇宙以外に休息しつゝある神と其の理法を説くが如き結果に陷ることなきか。道學先生が今日の青年子弟の前に論語大學を得意に講義しても、青年子弟はやゝもすれば居眠り勝ちである。いくら道學先生が眼から火の出る樣におこつても眼は覺めない。古き皮袋は到底新らしい葡萄酒を盛るに適しない。教會の牧師がしやがれ聲を出して説教しても聽衆信徒の多くはやゝもすれば眼をこすりつゝ、未だ夢心地なことがある。これは單に六日間の勤勞に疲れた爲め計りとは云はれない。偶々聖日を守らんとて教會に出席するや、暫らく人間の心理作用を中止して假りに天空を飛翔せよと命ぜらるゝが如きは、多數の人は餘りに窮窟に感じ拘束に抑へらるゝことはなきか。又もつと氣の利いた者は堅き椅子に

すがり付いて朝の半日を窮窟に過ごさんよりは家にありて花鉢をいぢるか、手紙を書くか、或は戸外に出でゝ自然の新綠に數日の單調を破らんと試みるに至るのである。特に世の開け行くに從ひて人の閑散を慰むべき娯樂的設備はいよ〳〵完全になるので、人は好んで清興を茲に恣にせんことを競ふ。世の中が殺風景で又不潔だから、寧ろ家族諸共に教會に行きて妙なる響音に心を洗ひ、牧師の説教に慰められんとせし時代は寧ろ過去の夢となつた。

しかも牧師は之れを悟らず世は益々基督教の精神に接近し其の感化に浴しつゝあるに、教會の集會は却つて寂寞なりと嘆息してゐる。勿論これには種々の理由があらう、一つには國民的自覺心が國家の膨脹發展以來、普ねく日本人に影響せしために外國人直傳の宗教的法規儀式に對しては知らず識らずの間に不足を感じ來りしを以て、從つて教會諸般の制度と自分との間が何となく愛着せざることゝなりしこと。一つには曩日社會の空氣と教會の空氣と著しく異なりて、一般信徒は同情同感の士を教會の

中に於て始めて發見せしが、現今に至りては教會は却つて俗化し如何がはしき才子者流、廂式部が多くなり、必らずしも望むが如き溫雅なる空氣、清美なる光明を友とすること能はざるに、反つて文明思想の感化と共に如上の要求は教會以外に於て優に或程度迄之れを享受し得らるゝに至りしことである。(併しこれらのことは他日稿を改めて論ずることゝして今は單に玆に一言するに止めて置く。)要するに教會は人生と人情に對して注意空疎にして、其の同情熱烈ならざることあるを以て、やゝもすれば眞正の慰安、痛快なる奮勵を與へ、懷疑の解決希望の光明を傳ふることが出來ない。しかも青年の眞面目なる懷疑を解決する程の同情と識見なき牧師が、在來の儀式空文を繰り返へして恬として恥ぢざる如きは隨分地方に於いては珍らしからぬことである。

三

若し眞に世道人心のために聖職に當らんと思ふ人は文明の進歩し精神作用の複雜に

なるにつれて一層深く人間學に精通せねばならぬ。(勿論神を說くことを忘れてはならないことは云ふ迄もない)。所謂『現代人』と稱する人々の心理活動に通曉せざれば、近世人は容易に宗教の陣頭に甲を脫がない。小說も詩歌も皆此近世人を研究し時代思潮を理會して始めて多數讀者の歡迎を受け、人生の慰安としての其職分を全うすることが出來る。オペラや芝居に於てワグネルの如き作者が盛んに歡迎されて居るのは巧みに近世人の煩惱苦慮を描寫したが爲めであるまいか。若し今日の教壇に立ちてトマス・ア・ケムピスの『基督の模倣』の如き思想のみを繰り返す樣では、全く舊式の木製軍艦を以て今日の一等戰鬪艦に向ふ樣なもので却つて生兵法大創の基の譏りを避けることは出來ない。俗衆は猶ほ忠臣藏に感じ、千代萩、菅原傳授に泣き、幡隨院長兵衛には感憤するけれども、教會の說教は餘りありがたがらない。勿論斯かる娛樂的興業を以て神聖なる宗教の說教に比するは、少しく異常な感を起すけれども、人心の秘奧の要求は一層深く宗教によりて充實せらるゝもので、不斷に此要求は娛樂を要求

ずることゝ同じく活動して居るものである。又宗教にあらざれば到底癒すことの出來ない所の悲慘なる心靈は決して尠しとしない。これ蓋し過去の不完全なる世話物道德談などであるけれども、猶ほ肉あり血ありて、能く人情の機微を穿つにも係らず、一はやゝもすれば假設的理法を說いて人其物に同情すること少ないためである。說敎は立派は立派で誠に結構であるが、神を仰ぐことを知りて人の涙を拭ふことを實行しない。拱手して神を拜するがために人と握手することを忘れる。これは哲學であつて、宗敎ではない。少くとも今日の要求する宗敎ではない。玆に於て余は小說『聖者』第五章マリアが其良人ジオヴンニに對する述懷の條下を想起せざるを得ない。

マリアは良人が同胞人間に對する同情の强からぬことを知つて居る。之れを考ふれば心密かに傷ましく思ふが畢竟するに此缺點は良人をして其非凡なる學才を以て宗敎的大使命を果させない所以であると感じた。實は自分はジオヴンニが他人に對して餘所餘所しい態度をうれしく思ふたことのあるのは今更ら自分がとがめられ

る。つまり女心のかよわさに良人が自分一人に傾けた情愛の香ほりが薄らげる樣な氣がしたので。さればとて良人は同胞を愛する義務を認めず、人の嘆願を無下に斥け、人の悲哀に冷淡と云ふ譯ではない。云はゞ仁愛の極致とすべき所の人にある神を認め之れを愛せずして神にある人を認め之れを愛した故に其の愛たるや冷やかにして父の意を迎へんとて兄弟を愛する樣なものだ (He did not behold, and therefore did not love, God in man, which is the height charity; he behold and loved man in God, which is the cold love, like the loove one who is kind to his brothers soley to please their father.)

斯くの如き態度は學者或は遁世的宗敎家、瞑想的僧侶としては至極適當であるけれども、現代の如くに、思想界いよ〳〵多事にして、思潮や暗礁に破船滅亡する者の多き時代にありては迂遠であり、適切でない。若し現今の牧師に聖書の外にベーコンを讀む暇があればこれを閉ぢて寧ろ沙翁を開くべきである而してハムレットの如き俊才

が何故に人生を頓悟する能はざりしか、イアゴーは如何なる動機からオセロをして愛妻デスデモナを手打ちにさしたか。頑固なるリア王は何故に狂人となり玉の如きコルデリアは何故に破滅せしか。これらの問題を考ふるのは決して文學者の道樂とのみ見るべきものではない。正しく人間同胞の運命幸福に干與する所の宗教家の研究に適當なる問題の一つである。余は今に於て再びブラウニングの大作『環と卷』を想起せざるを得ない。良人ギドー伯の迫害に堪えずして身を以て逃れたるポムピリアは一人の勇敢なる僧侶カポンサッキの手に救はれた。然し死の綱は遂にポムピリアを逃さない。憤恚と嫉妬に心狂へる老伯爵は遂に之を慘殺しカポンサッキを以て仁義の奸僧と痛論した。此殺人事件のために當時の羅馬人は各自得手勝手の取り沙汰をなし、何人も其の眞相を知り得る者はない。或は伯爵を以て自衛の策に出でしものとなし、或はポムピリアの非命を悲み、或はカポンサッキの心中を疑つた。加害者や、瀕死の被害者や、證據人すら自己の知れる一部分により、自己の理あるを辯ずるのみにして到底徹

底しない。故に互に矛盾あり不調和ありて事局は容易に進捗すべくもない。暗中に埋られんとする時に、法皇インノセント第十二世は此事件に最期の判決を下すことゝなりたれば深く人生の秘密と暗黑とを探り、遂に快刀亂麻を斷つが如き痛快なる判決を與へて始めて此疑獄事件を結ぶことが出來た。

彼れ法皇は未だ嘗つて人の血で手を染めたことはなく肉慾に驅られたことはなかつた。世の罪惡の衢に徘徊して、其暗黑なる經驗を味はつたことはなかつた。彼は浮世の甘き杯に醉はず、翩々たる胡蝶に夢を結ばなかつた所の清淨無垢の人であつた。然し彼は人間學に精通せしを以て能く人間救濟の大使命を果すことが出來た。彼は單に瞑想三昧に耽ることを以て僧侶の仕事盡せりと思はずして、大に人生の活問題と人間の意義を會得して居つた。凡て牧師たる者は神を敬すると共に人を愛することを得て、始めて牧羊の大事を全うすることが出來る。

基督は神を知り、人を知り、神を愛し、人を愛し給ふた。而して御自身は神と人と

の合一せる人格であつた。これ實に基督教の秘義である。現今の基督教會の急務は此二方面を教會の講壇に於て、個人の行爲に於て一致和合せしむることである。然らば必ずしも教會の繁昌策に駒することはあるまい。

野外禮拜

一

聖書の記事を讀みて我等の注意すべき一事は宗教の背景に自然ありと云ふことである。然るに今人は全く宗教をば人間社會の俗塵にて捕へ、禮拜は不完全なる殺風景なる會堂と稱する建物の内に於てのみ行ふことゝなつた。これは不自然である。人間の始祖アダムとエバがエデンの園を神より給はりて、こゝに人生の甘樂と神命の莊嚴とに接したる。ノアと其家族とは洪水の中に方舟を浮べて、萬物絶滅の曉に於ても心安らかに五彩の雲と見まがふ紅の橋を見て、神の恩愛の約束をかしこみたる。アブラハ

ムは未だアブラムと名づけられたる時、カナンの地に來りしが、神彼に向ひて、『汝の目を擧げて、汝の居る所より西、東、北、南を望め、凡そ汝が見る所の地は我之れを永く汝と汝の後裔に與ふべし、我汝の後裔を地の塵沙の如くなさん』と仰せ給ひしが、アブラム遂に天幕を遷して、ヘブロンのマムレの橡林に住み、彼處には神の壇を築きしと云ふが如き、アブラハム神の命と信じて、其一子イサクをモリア山上の彼方にて犧牲となさんとせし如き。イサク母と分れて慰藉を得ず、老僕命を奉じて花嫁を迎へんと外出せし間も待ち兼ねて、黄昏ひとり、野に出でて、默想に耽り居たりしに、不圖目をあげて眺むれば、あはれ駱駝の一隊にて、わが待ち人と知られたり、といふが如き。ヤコブ生來熱烈奔放の人、一たび兄を欺きて家督相續權を奪ひしも永く家に止まること能はざるや、漂浪放吟の兒となり、行く〳〵我が運命の落寞を嘆じ、一夜石を枕に、假寢の床、夢に神の聲に接し、『汝何處に行くとも、必らず我汝と共にあらん』と聞きては飛び立つ思ひに曉を迎へ、其石を取りて神を祭り、其場所をベテル

（神の家）と稱せしが如き、モーゼ幕屋に神を祭り雲に蔽はれたるシナイの山にて、神の俤に接したるが如き、更らに彼が將に約束の地カナンを踏まんとして果さず、空しくピスガ山巓に英魂を遺せし如き。ダビテ神殿を建てんことを願ひて、其望みを果さず、却つて詩篇第十九章天地莊嚴の歌によりて其偉大なる宗教心を吐露せしが如き、エリアが暴君の虐待と國人の腐敗に憤慨し、失望落膽の深みに沈みて、獨り形骸相弔しつゝ山中に籠居、計らずもさゝやかなる神の御聲に接して、勇氣百倍、奮然正義のために戰ひしが如き。テコア牧人アモスが貴族者流の腐敗せる狀態を慨し叫んで曰く、『汝等、公道を茵陳に變じ、正義を地に擲つ者よ、昴宿及び參宿を造り、花の蔭を變じて、朝となし。晝を暗くして夜となし、海の水を呼びて、地の面に溢れさする者を求めよ、其名はヤウエと云ふ』といひしが如き、――いづれか其背景を自然に採らぬものあらう。更に進んでキリストの時代に來りて見よ。『狐は穴あり、空の鳥は巣あり、されど人の子は頭に枕する所なし』と云ふたキリストは何時しか家庭の人に

あらずして、自然の人であつた。彼はガリラヤの湖畔――水清く鮮かに、若草香ほり、紅花咲きにほひ、牧羊群をなして人に馴れ親む所に於て、多くの永世不磨の教訓を垂れた。美しきテベリアなつかしきマグダラ、忘れ難きベッサイダ、若やかなるカナ、健げなるナイン、月清く、波白き湖――キリストの人格の圓滿にして、壯重なる品性を備へ、其風采に溫雅優麗なる姿をにほはせたるものは、實に、これらの美はしき自然にあらざりしか、更らに基督教をして、正義、公道に偏せしめず、能く人道の脉々たる溫情、熱血を備へしめたるは、これら美はしき自然の給物にあらざりしか。

二

然るに、宗教は自然を捨てゝ殿堂や寺院に籠城して仕舞つてより、野花は造花と變じて靈香なく。亭々天を摩する鬱蒼たる森林はペンキ塗りの柱となりて、全く生氣なく。月明はランプとなり。清風の徐々に來ることもなく。泉水は水盤と變りて、濁

りを止めて居る。あやしき衣づれの群集。一莖の野花にも如かざる、假りのよそほひに思ひを凝らしたる俗衆。冷杯殘肴を携へ來りて、敢て天門を開かんとあせる利己主義の信徒。人の口より出づる說敎を聞きて、陽に感嘆する術を知れども、獨り密室に閉ぢこもりて、祈禱する丈けの熱情なき怪やしげの人々——これらは自然と遠かり衆ねて神と離緣せる罪の人が、人の造れる會堂に來集する有樣ではないか。自然を離れたる宗敎は、自然の美を補はんために、必らず種々なる儀式、禮典を造り始める。これ精神衰退の始まりである。自然に近き間は、必らずしも、人爲的の形式を必要としない。森羅萬象は實に神の造れる禮典、形式である。山は神の祭壇である。河は洗禮の泉盤である。海は永刼の音樂を奏づる神殿である。歌ふ鳥、舞ふ胡蝶は天使の姿である。人の子はこれらの形象によらば、何んぞ人爲的の美裝や、單調無味なる儀式を要せんや。我等は綠の色に如何ばかり心の慰めらるゝ、草と空と海と、皆これ綠色の美を示めす。こゝに我等は永刼不變の神の愛を見ることが出來るではないか。さりな

がら我等はやゝもすれば空しき變化を望むが故に神は此好奇心を慰めんために、屢、赤き色を我等に與へる。されど紅色は餘りに烈しきに過ぐるを以て、凡て紅色を呈するものは、須臾にして凋落するを常とする。こゝに於て我等は美果と紅果とは暫らくの慰安に供せられたるを知り、よしや青春の情は火の如く熱するも、そは永續するものにあらで、神の愛に比すれば、いとも脆きものなることを誡め敎へられるのである。疲れたる馬と、痩せたる牛には自然に放牧されて始めて肥え太り、元氣を恢復する。生氣なき宗敎や、趣味なき儀式、禮典は自然に歸りて、始めて失ひたるものを拾ひ來ることが出來る。

三

禮拜は敎會內のみにて行ふべしとは、果して何時、何人の定めたることなりや。雨ふる朝、寒き夕べは家屋の內こそよけれ、天晴れて氣燈み渡れる、夏の曉風淸く、月圓かなる秋の夕べなどは、共に倶に輕裘放吟して、野外に出でゝ天地創造の神を拜

し、天の高き地の廣さを思ふべきにあらずや、かくの如きは、單に『夏期學校』の『早天祈禱會』なるものゝみに於て行ふべきものならんや。宜しく凡ての信徒は屢々人の造れる會堂を後に見捨てゝ、樹影靜かなる所、草葉の上に座を構へて、或は祈り、或は歌ふべきである。これ最も美はしき禮拜所にあらずや。

新鮮なる空氣を呼吸し、天籟の聲に接する間に於て、我等の心魂は暗々裏の間に自然の神靈と一致瞑合するに至る。此時歌はざるも、祈らざるも、既に禮拜の理想的狀態に進んだのである。日本は天地風光の美に富むと云ふ。何んすれぞ、自然を放棄して、空しく會堂内に醜陋なる空氣に禮拜の精神を汚さんとはする。こゝに於て野外禮拜一篇を草するのである。

余は何故に牧師とならざるか

過日某所に於て偶然基督教界の名士某氏に初對面するの名譽を得た。時に氏は自分に向つて『甚だ突飛なことであるが君は傳道界に這入らないか』と云はれた。抑々此勸告を受けたのは今に始まつたことでない。想起すれば年少教會に屬したるが、當時一宣教師が自分を招き、餘程結構な條件を以て傳道界に入るべきことを勸めてくれた。其後ち、今日に至るまで幾多の牧師、宣教師、友人等から同一の勸告を受けた。現に或る人の如きは今でもこれがために祈願を捧げて居らるゝ。然るに御本尊の當人は例の舊阿蒙で依然愚を守りて賢に移ることを知らず、十年一日の如くに煙と燻ぶつて燃え兼ねた風勢、不得要領な生活を送つて居る。隨分罪な男で人に心配さして、自分はだゝをこねて居る。

偖て自分は此勸告を受ける毎にそれ〴〵御茶を濁して居つた。無い智慧をしぼり出してどうかかうか難問を切り拔けて來た。併しまだ自分の樣な者を押し立てゝ呉れる親切な人もあるのは意外のことである。今後何時まで此殘骸を此世に繫いでゐるかは知

れないが、それ迄は人々の厄介になることであるから、一つにはこれらの人の好意に酬ひ、一つには自己の立場を明かにせんがために、茲に『何故に自分は牧師とならぬか』を述べて見やうと思ふ。曩きに、多望なる青年牧師今岡信一郎氏は或宗教雜誌に於て『余は何故に牧師となりしか』と云ふ興味ある文を載せられたが、自分は何もそれの向ふを張らうなどゝ、そんな不穩な精神は、毫も持たぬ積りである。又自分は自ら高く持して、宗教界を瞰下するとか、其弱點急所を衝いて快哉を三呼せんとする樣なメフィストー的の邪念もない。思ふた所を有りの儘に述べて見たいと思ふばかりである。

二

第一、自分の信仰する神は非常に偉大高尚に、完全無缺なる者にして、到底自分の如きものが宣傳し得べき者でない。エマースンは大學を出て、ユニテリアン教會の牧師となつた。其時の決心覺悟は峯の白雪の如く、誠に淸高なるものであつた。彼は理

想的神靈にあこがれて、實に何とも云ひ得ぬ感激を以て教壇の上に現はれた。彼の眼中には信仰箇條や宗派心や儀文形式の如き人爲的事物がなかつた。靈の神は靈と心理とを以て拜すべきことを知つたのみであつた。然るに彼の說く所は到底俗衆に投じない。僅耳には餘りに高遠に過ぎた。俗衆はより多く信仰箇條の神を欲し、偶像的の本尊を望んだ。エマースンはこゝに於て深く考ふる所あり、斷然教職を退き、爾來徵象的文字の間に隱れて、僅かに深奧なる大宇宙の脈搏に觸れ、大自然のおもかげにあこがれた。彼は此時自ら考へた、『自分の信ずる神は實に偉大高尚なる神である。到底不完全なる品格とを以てしては、人に向つて說明することは出來ない。如かず人の礙きの石とならんよりは獨り自ら云ひ難き神に沒了し、自然の懷に抱かれんには』と。斯くてエマースンは山紫水明なる地に隱れてコンコード聖者となつた。自分は此事を思ふ每に此哲人に對して深厚なる同情の念を表するものである。朧げながら自分の信仰して居る神も、自分の樣なつまらない人間の宣傳し得べき安すつぽい、卑劣、倭小な

る神ではない。自分の如き未成品は三度も生れ變へらなければ到底神の字すらも口に唱ふることが出來ない。思ふに人が神を知り得る程度は其人の心靈に神の心靈が鎔化契合せし分量だけである。即ち神てふ大理想の生命が自分の生命に權化せし丈けしか分らない。其他は如何に美はしくとも決して自分其物と關係あるものではない。強いて之れを說明宣傳せんと努むるが故に、僞善者擬君子となる。空米相場師となる。知らざるを知らずとせよこれ知れるなりとの原則に反して、知らざるを知れりとなし、感ぜざるを感ぜりとなし、信ぜざるを信ぜりとなし。空言の祈禱となる。これを以て宗敎は空敎となり、空虛となる。こゝを以て一大虛に吠えて萬大實を傳へ、何處にあつても、如何がはしき說敎となり、祈禱となりて、牧師も信徒も敢て怪まざることゝなる。契約の櫃の空虛なることは悟らずして無暗に之れをかつぎ廻はつて御祭り騷ぎを演ずるに至る。御苦勞千萬此上ない。これは自分の如き者が宗敎界に現はれ出づれば必然起るべき假定的結果である。それで虛僞を傳へんよりは寧ろ沈默を守らんに如

かずと思ふ。人を入れんとて天國に背を向けるよりは、若し天國に這入れるものならばせめて片足なりと踏み入れやうと努むる方が勝つて居る。

三

第二自分はまだ人間のことも、地のことも分らないから、況んや神のことや天のことを說くことは出來ない。孔夫子は未だ生を知らず、何ぞ死を說かんと云はれたが、此言葉は餘程味ふべき眞理があると思ふ。宗敎とは神と人との倫理的關係を全ふすることの謂ひである。此關係なる語はこゝに甚だ重きをなして居る。單に神を說くのは神學や哲學の仕事で全く學問である。單に人間を說くのは心理學や倫理學の仕事で、これも學問である。宗敎は兩者の法悅的（即ち至上的）關係を實現することによりて始めて其職分を盡すことが出來るのである。それ故に宗敎家の知るべき根本的知識は人間である。現實界に居る人間を以て當面の研究事項に含めねばならぬ。人間と神とを結び付けるべき鎖の缺けたる輪を發見し、之れを補充するのが其大切なる務めであ

る。それ故に牧師は先づ人間學に通曉することを忘れてはならぬ。こゝに人間學と云ふのは心理學とか生理學の如き人間を解剖的に見て、其組織法則を研究するのではない。人間學とは、人間の心靈の活動の妙機を探求することである。例令へば沙翁の如き文學上の天才によりて記されたる心機の妙趣を研究すると同時に、一方に於ては現在社會に生存しつゝある多數の人間の心靈、性格に接觸するのである。即ち一方に於ては戲曲、小說、傳記に通ずると共に、一方に於ては異なれる社會の人間と廣く交際しなければならぬ。人間の萬般の行動發情に對して充分の同情を以て觀察せねばならぬ。さりながら千萬の人と交はりを結ぶことは時間も勞力も容易に許さぬことであるから、夫が文學上の傑作に出來得る丈け親炙することが捷徑である。人間學の極致は一轉して神の學問となる。然るに始めから人間を度外視し、人間に同情を表せず、一躍して神のことに至らんとするを以て神の眞諦に達することが出來ない。『汝兄弟を愛せずして、いかで神を愛することを得んや』神は依然漠として捕ふること能はず、杳

として人間と關係なきものとなる。やゝもすれば deistic god となる。これは神學者哲學者としてはいざ知らず、宗教家としては實に見逃すべからざる過失である。門番が鍵をあづかつて居りながら人を入れやうとしない樣なものだ。然るに自分が人間學に付いて知る所は至つて少ない。殆んど皆無である。況んや神に付いて知ると云はんや。若し自分の樣なものが牧師となつたならば、それこそポープの歌つた樣な雪隱に雲隱れして居つても一向差支のない神を說いたり、カーライルの嘲けつた樣な本尊のない契約の櫃を見せびらかしたりするのが關の山であるであらふ。斯くの如き神樣は既に多く世にありふれて居る樣子であるから、寧ろ自分の如きは暫く差し控へて居ることが已れを知るの明ある者と云ふべきである。

四

第三、『人はパンのみにて生くるものにあらず』この言葉は既に人はパンにて生くる者だと假定した上の言葉である。然るに今日の牧師は何時も衣食住なる下級問題に苦

められ、それがために餘念なく靈的なる上級問題に心を注ぐことは出來ない。今日の牧師は子供が多い。『生めよ殖えよ』との原始的命令を奉じてどし〳〵子供を生む。時に子供をこしらへることが信者をこしらへるよりも巧みである。佛蘭西に歸化したならば七人目の子供は國費で養育して呉れるであらふが日本では未だそんなことは出來ない。貧乏子澤山との俚諺の如くに牧師が貧乏だから子が多いと云はゞそれは論理學を知らない人の云ふことである。兎に角薄給の牧師には子が多い結果として、牧師はいよ〳〵窮迫に進み罪なき子供までも世の擯斥を受け、うらなり的境遇に陷れねばならぬ。通常一般の教育さへ與へることが出來ず、止むを得ず姨捨山ならぬミッションスクールの救助を仰がねばならぬ始末となる。自分は自給の故を以て牧師の職を辭した幾多の實例を擧げることが出來る。況んや歐米先進國の宗教界、思想界の消息に通ぜんがために新刊書を講讀するの餘裕ある人など殆んどありはしない。あれば除外例であつて、決して常例ではない。日本で新刊する薄つぺらな書物でさへ購讀すること

が出來ないので、日本の思想界のことすらやゝもすれば等閑に附し勝ちである。其結果は洋行歸りの人が日本の現狀に疎き所から一寸調子外れのことを云ふ樣なことになる。日本の思想界に參與せんとする者が當面の思想界の推移や雲行を知らずとせば、そは甚だ滑稽なことである。盲者が盲者を案内することゝなり、今日の樣に電車自動車の運轉疾走する文明世界にありては危險千萬なことである。又よしや日本の思想界に通じて居るとしても先進國の事情に通じなければ、到底日本の時代思想に超越して、之れを指導することは出來ない。故高山氏は『吾人は須く現代を超越せざる可らず』と云ふ言葉を標語として居つた樣だが、苟も逢迎主義の樂天的宗教家や、雷同的宗教家ならぬ限りは、宗教家こそ現代に超越し進んでこれを指導すべき義務責任を有して居る。然るに今日一般の牧師は此パン以外のパンの供給を受けない。神の言葉も註脚なければ中に咀嚼し兼ねることは明かである。自分の狹い觀察範圍によれば、彼等はパンも覺束なければ、パン以外のパンも覺束ない。從つて社會の地位、尊敬、信用もや

ゝもすれば覺束なくなる。あはれなるは牧師である。人或は云はん『牧師は犧牲的生活を送らざるべからず、古今の偉大なる宗教家を見よ』と、其言やよし矣、しかしこれ惻憱の心ある者の云ふことでない。人に地獄めぐりをさして自分は花の都で面白ろ可笑しく暮らして居る惡魔の聲だ。斯く云ふ者は自ら十字架にかゝつて見るがよい。我々は及ばずなから荆棘の冠を戴かしてやらう。

武士は喰はねど高楊子などゝ應揚なことを云ふた武士ですら、實は祿を食んで居つたからこそ、こんなことが云はれたので、今日の經濟的壓迫の時代に於て、之れを眞に受けてる人あらば、餘程蟲のよい人と云はねばならぬ。現今の牧師は外國人の冷杯殘肴にさへありつく緣がなくなつて來た。『牧師喰はねば高が知れ』で心ある者の同情に値ずべきものである。自分には養ふべき兩親、家族がある。家に餘財なく、賴るに親戚ない。自分の勞働が唯一の糧道である。自分は此糧道を斷たれぬ樣にと働いて行く。これでも牧師の所得よりは多少多い積り、若し今日職掌換へをしてなまじつか

牧師などになつたならば、それこそ秋風落漠、孤城落日の感に堪えぬ。自分は家族に安慰を與へ、自分で思想界の捨兒にならぬ樣にしたいと望むのであるから牧師となることは考へ物である。

五

第四、現代は職人の世の中で、人格の世の中ではない。これが現代を禍するものである。若し職人ありて人格なければ、世は機械的、物質的となり、無味枯渴となる。其結果として人道の聲微かに、道德の光朧ろになつて仕舞ふ、農工商業の社會ならいざ知らず、苟も、教育、宗教の如き情神的事業が其動力を優美なる人格に期待すること能はずとせば、これ國家のため、最も悲むべきことである。然らば現今の教育界は如何であるか。今迄智識一方に偏頼せる者も近頃は、倫理、訓練などに多大な注意を拂ひ來つたのは大に祝すべきことである。されどこれら倫理、訓練を標榜せるものゝ實際を見るに多くは教授者だも實行した經驗のない、又實行し得ざる假定的理想を以

て血氣盛んなる青年子弟に迫さり、或は軍人バラック的の杓子定規、沒人情主義を以て後進者を拘束することなきか、形式的事業と報告的結果は遺憾なく得らるべしと雖も、青年の圓滿なる心靈の發達に至りては餘り懸念して居らない。時には恰もボール送りをなす如く、他より受けたる者は早く人手に渡せばよいと云ふやふに、單に一時を糊塗することはなきか。故に自分は今日の教育者は職人にして人格でないと云ふのである。自分の常に思ふ所にては教育の要義は母の愛情を經とし、自己の精神的繼承者を造らんとする希望を緯となすべきものである。古今の偉大なる教育家は悉くこゝに默契する所ありて、能く其使命を全くしたものである。ペスタロッヂの如き實に斯かる覺悟を以て斯界の光明となるに至つた。心の開拓は心靈によらねばならぬ。高潔偉大なる人格にして始めて高潔、偉大なる人格を造ることが出來る。『神其像の如くに人を創造し給へり』と云ふ記事は偶々以て之れを教育の本義となすことが出來ると思ふ。此の境域に進み來れば、教育者は職人にあらずして人格でなければ出來ないこと

ゝなる。彼の道學者先生の古き皮袋の如き舊思想、舊形式は、今日の日本の教化には關係なき骨董品の如き者であるけれど、其精神に一の犯すべからざる威權を保持せんとするとのあるに至りては感服せざるを得ない。舊式の道德は彼等に負ふ所決して少くないが、これ以外の職人的根性を以て教育の神聖を瀆す者に至りては沙汰の限りである。又近頃は教育の諸學に關する著述や講演が盛んに世に行はれて居るが、これらは現代青年の煩悶などに對して至つて無頓着である。これらは單に口より耳に傳へらるゝものにして、殆んと人生其物に相涉らざるものである。世の教育者、倫理學者を以て任ずる者は多く西洋の智識の一面を丸呑みにしてゐるけれども、種々の社會問題の如きは教科書の何ページにも記されてないから、自己の職業以外だと云はんばかりである。却つて青年文士なる者が種々の刺激劑を社會に供し、或は利害相半ばし、功罪中和するにも係らず、現代青年の一伴侶となりつゝあることはけなげなことゝ云はねばならぬ。我々は狹き教室に籠城し、淺き學問に錨を卸して、沖行く船の難波せん

とするをも顧みざる教育者の無氣力を嘆息すると同時に、筆端墨汁を走らして奮闘しつゝある青年文士の勇氣を嘆稱せずには居られない。

次に今日の宗教界は如何であるか。これまでは教育と宗教との衝突を論じた曲學阿世の人々もあつたが、今日は此兩者の相提携すべき時期に達した。人は智識のみによりて滿足することは出來ない。必らず光明と熱情の健全なる指導、愛護を要求するものである。眞正の教育家は宗教的熱情の人でなければならぬ如く、眞正の宗教家は智識修養の人でなければならぬ。新時代の教育家は宗教の權威を尊重し、新時代の宗教家は教育の恩化を感謝して以て、兩々相協力して人文發達のために、心靈救濟のために力を致し、國家、人類の安寧、幸福を助長、增進せんことを努めなければならぬ。宗教家の天分は教育家と共に甚だ偉大なるべきは斯くの如くである。然るにかくあるべき宗教家は果して精神界のためにどれ程盡しつゝあるか、又どれ程世人の信賴を受けつゝあるか。

先年自然主義派小說家の重鎭國木田獨步氏が肺を病んで茅ヶ崎病院に死んだ。死する數日前植付正久氏は惱める病者を慰めんとて枕邊に坐した。病者は『われ如何にしても祈ること能はず』と嘆く、植村氏亦、之れを見て嘆いたとのことである。これ最も悲慘なるエピソードである。人生最後の一刹那に於て愛なる神の懷に抱かれてると信ずる程幸福なるはなく、獨り寂寞たる暗路をたどらなければならぬと思ふ程悲慘な事はない。祈ることの出來なかつた病める文士罪ありしや、祈らすこと能はざりし牧師罪ありしや。これは今更ら詮議立てをする必要はない。是を以て直ちに宗教家の鼎の輕重を問ふのは早計なことである。唯我々がこれによりて學ぶべき一事は如何に深奥卓拔なる贖罪論であつても、それは決して人を救ふ靈力がないことである。贖罪論は宗教ではない。贖罪論の上下せられて居る間に青年は煩悶し文士は慰めを得ない。寡婦と孤兒とは悲み哭いて居る。アウガスチンやカルヴヰンはいづれも偉大なる神學者なりしならんも、宗教家としては寧ろアシシのフランシスに行かねばならぬ。フラ

シスは理屈と議論を餘所にしてひたすら神の愛に勵まされて人を愛し進んで禽獸までも吾が兄弟姉妹と呼ぶに至つた。世に神學者は必要であるけれども、愛の難行苦行をなす宗教家は一層必要である。

自分は常に日本の基督教界に宗派樹立の必要あるかを疑ふ者である。今日に於て宗派爭ひをなし、儀式信條に執着することは果してどれ丈けの意味があるか、外國の宗派の直輸入商となつて舶來品を一人にても多く賣り付けんとしつゝあるは、本店のためには至極忠實なる働き振りであろうけれども、決して寛容なる宗教家の面目を施せるものではない。一例を擧ぐれば、キリストは全身を水に浸めたから、我々も之れに倣はねばならぬ。然らざる者は晩餐に列することは出來ないと主張する。しかしキリストが割禮を受けたから我々も割禮を受けねばならぬと主張しないが不思議。これは米國ならいざ知らず、日本には無意味のことである。凡てこんな風に頑固一徹の宗教家は時勢の進運につれて、漸次其數を減じて來たが、猶ほ今日と雖も、敬神愛人の大

精神を沒了してまでも、自家の狹小なる形式信條に拘束せられて居る人のあるのは實に氣の毒なことである。勿論儀式、信條は時代の衣服であるから、是非無ければならぬものであるが、新時代の要求に反しても、舊時代の衣服を着せやうとするのは、甚だ心得違ひと云はねばならぬ。

これを要するに今日の宗教社會は其使命の尊重すべきことを自覺せずして、やゝもすれば神學說、儀式、信條の末枝に拘泥して居る。勿論これらのものは必要なるものであるけれども、單に宗教の衣服である。かくの如きは時あつて須く蟬脫し去らねばならぬ。是非共こゝに宗教界の革新起りて、キリストの精神横溢し聖靈の恩化普及する時代とならなければならぬ。若し基督教が此儘に推移し行かば、果して何の日か其の使命を全ふすることが出來やうか。

しかも基督教が完全、優秀美なる宗教として現はるゝには、何も、宗教が抽象的にエラクなつて行くのではない。必らずや此宗教を心證、體驗せる人格が出て來りて『我

は道なり、眞理なり、生命なり、』と絶叫せねばならぬ。眞理は如何に貴しと雖、人格によりて權化せられなければ決して世に行はれるものではない。恰も自然界の驚異すべき現象、法則が進化論によりて始めて世に紹介せられたるが如くに、宗教の大自在の眞理は偉大なる人格なければ、何等の權威なく、勢力ないことは過去の歴史と個人の經驗の示す所である。キリストが人類を救ひ得る力ある如くに、我々人間は或點まで、互に救ふ力を有するものである。聖人は一代を化し美人は隣人を慰め、良妻は良人を救ひ、慈母は其子を救ふ、國家の志士は亂世を救ふて國家を泰山の安きに置くのである。而して宗教家なるものは一代の師表となり、一國の先覺者となりて、時代を指導し、世人を慰安すべきである。一國此種の人一人多ければそれ丈け一國の幸福增進し、一代此種の人一人多ければそれ丈け一代の光明を添えるのである。あゝ今日の牧師にして深くこゝに思ふ所ありて、此亂脈なる時代の救濟に心がけたならば、如何に迷へる羊はよろこび、天の使は讃美するであらうか。

必竟するに牧師は職人にあらずして人格である。人格なき人が強いて其職にあるは誤謬である。若し人格ある人は、よしや其職にあらずとも、常にキリストの精神を實行することが出來たならば、これは無名の牧師であつて、人之れに接して光明慰安を得ること疑ふべくもない。

かく考へ來れば自分は到底牧師の職に就かふと云ふ勇氣はなくなつて仕舞ふ。あゝ我れ惱める者なる哉。此薄志弱行より救はん者は誰ぞやと叫ばざるを得ない。もし人格を具備して居らないならば却つて益々進んで人生の要務を開拓し、信仰の實證をば自分の生涯に示さねばならぬ。自分の理想的生活は牧師であるが、此理想が現實となるには、三度も生れ返へらねばならぬことは前に之れを云ふた。

六

若し強いて宗教界のために盡さんとならば現在の仕事に從事して居りながら、宗教界の遊擊軍に馳せ參ずることである。即ち兩棲動物となるのである。これは或點まで

實行して居つたことで、今後も差支なき範圍に於てやつて見やうと思ふ所である。

＊　＊　＊

以上は理窟である。神靈一たび動搖せば山なす理窟も聖火一閃忽ち灰燼となるのであらふ。

附　錄

落穗拾ひ

沙翁の倫理觀

序論――道德と文藝との關係――沙翁は說かず――而かも不道德にあらず――
特に注意すべきこと――結論

一

『幽靈の正體見たり枯尾花』と云ふ古めかしい句がある。つまらないものでも見る人の心によりて、至つて大なる影響を受けることがある。特に其實物を見ずして、其片影や噂によつて一層の好奇心を刺激して、一種不穩の精神に心安らかならぬともある。いよ〳〵正體を見付けて、なんだ、こんなものであつたか、それでは別に驚くにも當らなかつたと合點するのである。人は他人に欺かれざれば、自ら欺きて以て、一種の

情感を覺ゆるものであつて、これが種々、樣々の形ちによりて現はれて來る。迷信となり恐怖となり、空想となり、自惚となりて中々容易に始末に終へないものである。或は一犬虛に吼へて萬犬實を傳へ、一波萬波を生じ、其波紋が水の全面を動搖するまでは止まない。小さきものにも、大きな尾鰭を付けて、非常にありがたかつてゐる。

又一方に於ては左程でもなしと思ひ、全く打ち忘れて、墓の被處に葬つて仕舞つて、さて後から何か珍らしきこともがなと思ふ中に偶々思ひ當る處があつて、再び之れを發掘することを始める。人々其遺物を見付けて恐悅がる。うれし涙に信心が出て來るかつぎ廻はす、拜がめまつる。かくなつては針程の事でも、見る〳〵棒程になり、柱程にもなる。後世の人が偉人に對する態度はいつもこれである。面のあたり顏を見、話も聞けば、やはり裏の方の權平さんや、隣りの太郎作位にしか思はない。飯もたべれば、笑ひもするし、くしやみもする。少しも他人と異なつたことはない。或は却つて大法螺吹きだ、山師だと云ふて、之れをいぢめつけたり、おまけに撲ぐり殺して仕

舞ふことも珍らしくない。所が誰れ云ふとなく、後からあの人はエライ人だ、斯く〳〵のことがあつた。しか〳〵の事もあつたなどと詮義立てをする。彌次連がやつて提灯持ちをつとめ、東西屋を始める。見る〳〵昨日まで墓中に埋められた人が、今日は偉人としてあがめられて來る。かくて時代の經過と共に理想化せる働きが少しづゝ行はれる。預め堅糸があつたのに、これに横絲を織り始めて、段々奇麗な織物となし、粧飾をつける。見事なものだ、凡人の仕業ではないと稱讃の聲が聞へる。何時の間にか、五尺の體を具へた人間が、無形の靈物となり、神樣とあがめられて仕舞ふ。これ蓋し人は自分に似て、一層大きな者を造りて、自分の指導を之れに依托したいといふ渴仰心がある爲めである。

『偉人の傳記は短かい』とはプラトーの喝破したる名言。されど其事業と感化とは實に永く、且偉大である。一代に這入りきれないから、之れを時代から時代に送つて縱に延ばして入れる。一人の心では包容し、解釋しきれないから、多數の人々が四方か

ら集つて、之れを研究し、自分の好きな方面のみを携え歸へりて、各々師匠の遺鉢を繼承したと濟ましてゐる。政治家、軍人の如きは、これらの偉人に比すれば短命のものである。成程一時は暴風の如く、或は雷の如くに、一代の風雲に乘じ一代の人心を收攬するけれども、一度雨晴れ、雲收まれば殘る所は廢趾、殘壘のみ。一痕の明月永へに其跡を弔ふのみである。こゝに至りては文學者、宗教家は偉らい。柔能く剛を制して、彼等は何時も敗けて、勝つて居る。彼等の生命と事業は、宇宙の大法に渾化合一し、其一點一畫もなし遂げられずには、天地の滅亡することは恐らくないのである。恰も彗星が天の一方を一過して其尾鰭は永へに其跡を留める樣なものである。

余が爰に少しく論せんとする沙翁の如きも、其例に洩れざるのみか、寧ろ最も著しき者の一人である。彼の傳は數言にして、之れを盡すことが出來る。即ち一五六四年四月二十三日（？）ロワーリックシアのストラット・オン・アヴォンに生れた。父をジョンと云ひ、母をメリー・アーデンと云ふた。父は百姓で小賣商を業とし、母は少し身

分のよい女性であつた。十四才の頃一寸學校に通學したらしいが分らない。十八才の時アンナ・ハサウヰーとて自分よりも八才長じたる婦人と結婚し、六ヶ月にして子を擧げ、三年にして双兒を設けた、それから何處を廻つたか、分らないが、何時の間にか倫敦に出でゝ、役者の下役を勤め、それが甘く行つて、役者となり作家となつた。そして一六一六年四月二十四日（？）五十三才を一期として、此世を去つた。これ丈けしか分らない。少しも光彩も何もない。シドネー・リーは其名著沙翁傳に大約四百頁を費やしてゐるが。其多くは評論に充てゝある。然るに其感化と事業とに至りては、實にエライもので、世界第一の文人として、稱讃されてゐる。英國博物館には沙翁に關する圖書の目錄だけが大冊二卷あるとのことであるがこれは悉く沙翁の作物の評釋、評論である。これによりても、如何ばかり、其影響の大なるかを、察知する事ができる。キリストの弟子が、洗禮のヨハネに向つて『汝は何人なりや』と問ふた時に、彼は之れに答へて、『われは野に叫べる聲なり』と云ふた。沙翁の如きも、其正體は分ら

ないけれども、其野に叫べる聲だけは、何時迄も何處までも聞き傳へ、響き傳へ、語り傳へて、止むべくもない。

かくの如き次第であるから、沙翁は生前果して如何なる考へを持つて居つたか、如何なる主義、主張を奉じて居つたかなどゝ云ふことは、到底分らない。悉く揣摩臆測に過ぎない。況んや、彼の倫理觀などゝは、以ての外の詮義立てである。月に向つて汝の倫理觀は如何に、河に向つて汝は何故に流れて止まぬかと問ふに等しく、決して明確なる解答を得ることは出來ない。こゝにかゝる題目を附した所以の如きも、實は沙翁の直接の倫理觀にあらずして、沙翁によりて自分が思ひ付いた倫理的思想の一端とも云ふべきものを述べて見やうと思ふだけである。

二

道德と文學との關係につき一言して見ると。廣義に於ける美術なるものは一切の美の發表である。道德は善惡の法則を規定するのである。而して眞なるものが美で、且

つ善なりと云ふ點に於て、兩者は或點まで、互に密接なる關係、融和を有するのである。然るに美術は潔癖なもので、少しでも道德上の說法を受けることあれば、直ちに其姿を潛めやうとする。美術は寧ろ道德的分子の多きに過ぐるよりは、少きに失することを好む。何となれば後の鹽加減は之れを味ふ讀者の匙加減に一任する。又眞正の道德なるものは、至つて內氣なものである。決して長廣舌を振ひ、或は長談義をなすことを欲しない。說かず、語らず、敢て辯ぜざる所に無限の妙味が籠つて居り、幽しみが何處となく人の心を引きつける。特にこれは文藝に於て最も大切なる要契であると思ふ。若し之れを忘れるならば、恰も隱君子を紛粧し、舞臺に上して、自分の功名談を講釋したり、或は純潔なる處女の恥かしがるのを、無理に廣人稠廣の間に拉し來つて、呼きにも、洩らすまじき、うか恥かしき心の秘密を洩らさしむる樣なものである。

美術は決して說法しない。美術は短刀直入、人の肺腑を衝き、其いつはりなき情感

に點火す。これ美術の壇場である。人が倫理學を聽いても、左程に感心せず、却つて欠伸の百千度をくり返すことあるも、却て美はしき詩歌、妙なる音樂、佳なる繪畫に心動くば、これがためである。活ける人間は理智に啓發せずして、却つて情感に燠發する。美術は國民教化の道具として、國人發展の手段として、時に倫理、道德說に勝ること萬々である。シーレーは其名著『エックセホモ』(基督傳)に『熱なき心にして清きものなく、情なき德にして危險ならぬものなし』と云うて居る。情熱は水の如きものである。能く人心を潤澤する。若し理智の談義に限れば、水は冷却して氷となり氷柱となり、最早や人心を潤澤する能力なく却つて觸るゝ者をして、寒冷ならしむる。此情熱を涵養し、以て人生の要契を心得しめ、之れを實行せしむるものは實に高潔なる文藝の力である。

三

沙翁は說かず。ジョンソン博士は沙翁は道德上目的を缺き、善惡の按排宜しきを得

ないと云うて不幸を洩らしてゐるが、これは道德一點張りにて文藝を律した人としてはさもあるべきことである。自家の意見、主張好惡、特徵等は沙翁の何れの作に於ても、之れを發見することが出來ない。種々の人々が沙翁の直接の意見を聞かんとしても、容易に分らない。或はハムレットの厭世觀に沙翁の人生觀が現はれてるとか、或はプロスペロの圓滿寬恕なる性格に作者の精神が洩れてゐるとか、或はポーシャの善惡の訓誡に彼の道德觀が籠つて居るとか、或は甚しきに至りては、道化者の諧謔の中にかくれて居るなどゝ詮義立てをする。しかしいづれも失敗に歸したと云はねばならぬ。依然として空を擊ち、影を捉ふる者の如し。沙翁の作物にはヒューマニテーの活劇が行はれて居るのみだ。善も惡も自由自在に其活動を恣にし。些の拘束を許さない。或は極惡無道の大惡漢が、清淨無垢の人間を巧みに蹂弄して、遂に之れを憤死せしめ、或は戀のさゝやき、こまやかに、一夢見る心地、末やいかに美はしからんと案じる中に、一陣の黑旋風に花を散らし、地に踐みにじつて仕舞ふ。作者は一向御構へなし、

アーと云ふ嘆聲一つだにも洩らさない。何等の制肘を加へない。こゝに於てか、サヴエージ・ランドルの如きは驚嘆の餘り、『一度人物を作り出すや、其後ちは作者の無干渉も甚しい哉』と云つて居る。沙翁は惡人に味方して居るやら、善人に味方してゐるやら毫も窺知することが出來ない。憐みもせず、悲しみもせず、喜びもせず、笑ひもしない。悲憤慷慨一切嚴禁否强いてこれを嚴禁してる跡さへ見えない。齒を食ひしばつて、啼きたいのを我慢してゐる樣な所は毫もない。これを大自然の態度と云ふべきか。『神は善き者にも惡しき者にも日を照らし、善き者にも惡しき者にも雨を降らす』と云ふ大自然の教訓は、其儘文字通りに、此大詩人に適用せられて居る。彼は明煌々たる鏡である。これをかゝげて人生の眞蹄を悉く描寫した。ミルトンは大詩人である。然れども此點に於ては、到底沙翁と同日の論ではない。宛然田舍の説教者の口吻を思はしめる。

四

而かも沙翁は不道德ならず。不道德なる文學者と云ふ意味は、不倫なる感情を挑發する樣な怪文字を弄する者の謂ひである。世の文藝に從事する者が、世の道德家、倫理學者から攻擊されるのは、此種の賤劣なる文人が多いからである。勿論、此種の文學も、純文學としては優に一種の價値を認むべきものも多けれど、沙翁は決してかゝる詩人ではない。彼は決して道德的ならんことを努めなかつたと共に、不道德をも顧みなかつたとは云はれない。蓋し、社會にありては、美德や高德が、東西屋となりて、自分の功德を世に吹聽しないと同時に、惡德、罪障は決して公々然として、其醜態、獸慾を演出する程向ふ見ずなものではない。同じく罪惡を犯す事も出來る丈け、之れを暗夜人なき所に於てなさんとするは人の常である。デスデモナが『不義な良人の見せしめに自分から進んで情夫に密通する婦人もあるまい』。と云ふた時、腰元のエミリヤに告げた時、エミリヤは之れに答へて、『それはやり兼ねません。さればとて、妾とても白晝では眞平御免で厶ります。暗がりでも出來ますものを』

"Nor I neither by this heaven by night;
I might do't as well i'the dark"—Othello IV, 3.

と云ふ心持ちは決してエミリヤ丈けではない。なるべく隱れた所にて、惡事をするのは、猶ほ人には廉恥の血の氣が通つて居る證據だ。社會の裏面には如何ばかり暗黑なることが行はれてゐるにせよ、其表面丈けは、成るべくは奇麗にして濟まして置く。よしや、墓をあばいたならば、骸骨や、腐肉にウジ蟲が湧いて居つても、外部は白く塗つて置く。臭い物には蓋をするとは千古の眞理。社會は常に醜穢に蓋をする。但し戰爭とか、其他非常の變事が起れば、社會の秩序こゝに亂れ、墓場の中のものが踊り出し、騷ぎ出して、百鬼夜行、否白晝横行の醜態を演出する。これは非常の場合であつて常の場合ではない。常には社會と云ふ庭園を掃除する者があつて、凡て不潔、汚穢にして、耳目に觸れてよからぬものは大きな箒を携へ來つて、成るべく塵埃一つ留むまじと掃除する。場所によつては雜巾がけして拭ひ清め、足溜りをしない程すべつ

こくなし、禮儀の心得なきものは、やゝもすればすべつて仕舞ふ。これが即ち世の警察官や敎育者のやる仕事である。但し片隅の方に芥が山と積つて、臭氣紛々たるは此の限りでない。特に炎熱の夏期に際して、これがために、傳染病を誘起する樣なこともある。血氣盛んな青年者流の如きは先づ第一に其感染を逭れぬのである。これであるから、時には大掃除をやつて、之れに火をつけて燒いて仕舞ふ。これが即ち大宗敎家大道德家の役目であつて、時には自分も火中に投ずることを辭せず、又は民衆が彼の所爲を誤解して、彼を火刑に處することもある。これが社會及人生の實際である。それ故に、外面如菩薩、內心如夜叉と云ふ諺も存在せざるを得ない。

沙翁は此人間社會の機微に徹底した。態々百鬼夜行の走馬燈を描く必要を認めなかつた。而してこれが却つて人心の眞態を得たのである。イアゴーが散々腹、罪なきデスデモナを其良人オセロに讒訴せしかば、オセロの心は煮えかへる計り、或は疑ひ、或は信じ、揚句の果は苦しくなつて『ヤイ〳〵汝はわがいとしの者を淫婦と呼びしな、